

伊丹市埋蔵文化財調査報告書

震災復旧・復興事業に伴う発掘調査

1999年3月

伊丹市教育委員会

序

本書は「阪神・淡路大震災」の復旧・復興事業に伴い実施した発掘調査の成果をまとめたものであります。この度の震災では、多くの建物に被害がありました。文化庁と兵庫県教育委員会は、この建て替え工事などの復興事業が迅速に行われるよう、遺跡の取り扱いの弾力化、補助対象範囲の拡大、県職員の市長派遣などの特別措置を実施しました。とくに、県職員の派遣では、他府県および政令指定都市から多くの埋蔵文化財担当職員が兵庫県に出向し、さらに被災地の市町の依頼に基づいてその発掘調査を担当しました。本市でも平成7年度から3カ年、北は青森県から南は佐賀県までの計31名の他府県職員の支援を得ております。

本書には、支援していただいた職員の方々の北園遺跡、山田遺跡、柏木古墳、荒牧遺跡、荒牧長野遺跡、西野遺跡の貴重な調査成果が収められていますが、刊行にあたり、さらに原稿の執筆から図版の作成まで担当していただきました。

支援職員のみなさんは、短い方で半年、長い方は3年間という長期にわたり、遠く故郷を離れて復興支援のためにご尽力いただきました。最後に、みなさまのご苦労に対し心から感謝申し上げます。

1999年3月

伊丹市教育委員会

教育長 乾 一 雄

例 言

- (1)本書は、平成7年1月に発生した「阪神・淡路大震災」の震災復旧・復興事業に伴う緊急調査として実施した埋蔵文化財発掘調査の成果をまとめたものである。
- (2)本書に収めた調査成果は下記のとおりである
- 北園遺跡第11次調査
 - 北園遺跡第15次調査
 - 山田遺跡第4次調査
 - 山田遺跡第5次調査
 - 山田遺跡第6次調査
 - 柏木古墳第1次調査
 - 御願塚古墳第6次調査
 - 南野古墳第1次調査
 - 荒牧遺跡第23次調査
 - 荒牧遺跡第26次調査
 - 荒牧長野遺跡第2次調査
 - 西野遺跡第5次調査
- (3)発掘調査は伊丹市教育委員会が調査主体となり行ったが、北園遺跡第15次調査、山田遺跡第5・6次調査、柏木古墳第1次調査、荒牧遺跡第26次調査、荒牧長野遺跡第2次調査、西野遺跡第5次調査については、兵庫県教育委員会から埋蔵文化財職員の派遣を得て実施した。県派遣職員は、他府県の教育委員会からの支援職員を主体に構成されている。
- (4)整理作業は、発掘調査担当者の指導のもと、伊丹市埋蔵文化財臨時職員が遺物の実測・トレースなどを行った。それぞれの作業は次の者が行った。遺物実測は瀬川眞美子・三輪隆子、遺物・遺構のトレースは、瀬川眞美子・丸岡タカミ、写真図版の作成は上谷浩司。
- (5)原稿は主に発掘調査担当者が執筆した。執筆者の氏名は、文末に記した。
- (6)本書の編集作業は、小長谷正治と瀬川眞美子があたった。
- (7)出土遺物及び発掘調査資料は伊丹市教育委員会にて保管している。

目 次

第1章 調査の概要	1
第1節 震災復旧・復興関連発掘調査の概要	1
第2節 遺跡の概要	6
第2章 発掘調査の成果	9
第1節 北園遺跡第11次調査	9
第2節 北園遺跡第15次調査	13
第3節 山田遺跡第4次調査	16
第4節 山田遺跡第5次調査	24
第5節 山田遺跡第6次調査	34
第6節 柏木古墳第1次調査	46
第7節 御願塚古墳第6次調査	61
第8節 南野古墳第1次調査	65
第9節 荒牧遺跡第23次調査	71
第10節 荒牧遺跡第26次調査	79
第11節 荒牧長野遺跡第2次調査	89
第12節 西野遺跡第5次調査	91

挿 図 目 次

第1図 調査箇所位置図	7
第2図 北園遺跡第11次調査区位置図	9
第3図 調査区設定図	9
第4図 平面図・土層断面図	10
第5図 出土遺物	11
第6図 北園遺跡第15次調査区位置図	13
第7図 調査区設定図・土層断面図	14
第8図 出土遺物	15
第9図 山田遺跡第4次調査区位置図	16
第10図 東側・西側トレンチ平面図・土層断面図	17
第11図 北側・中央・南側トレンチ平面図・土層断面図	19
第12図 出土遺物	22
第13図 山田遺跡第5次調査区位置図	24
第14図 調査区設定図	24
第15図 平面図・土層断面図	25
第16図 集石遺構平面図・断面図	26
第17図 出土遺物	27
第18図 溝平面図・断面図	28
第19図 出土遺物	29
第20図 井戸平面図・断面図	29
第21図 掘立柱建物1平面図・断面図	30
第22図 出土遺物	31
第23図 掘立柱建物2平面図・断面図	32

第24図	山田遺跡第6次調査区位置図	34
第25図	周辺の遺跡	34
第26図	平面図	35
第27図	土層断面図	36
第28図	集石遺構(1)	37
第29図	集石遺構(2)	38
第30図	出土遺物	39
第31図	溝	40
第32図	出土遺物	42
第33図	土坑	43
第34図	柏木古墳第1次調査区位置図	46
第35図	調査区設定図	46
第36図	明治初年の柏木古墳周辺	48
第37図	平面図・土層断面図	50
第38図	出土埴輪(1) 円筒埴輪	53
第39図	出土埴輪(2) 円筒埴輪	56
第40図	出土埴輪(3) 形象埴輪	57
第41図	出土土器	58
第42図	柏木古墳周濠復元図	59
第43図	御願塚古墳第6次調査区位置図	61
第44図	調査区設定図	61
第45図	御願塚古墳現況平面図	62
第46図	平面図・土層断面図	63
第47図	出土埴輪	64
第48図	南野古墳第1次調査区位置図	65
第49図	調査区設定図	65
第50図	平面図・土層断面図	66
第51図	出土埴輪・須恵器	69
第52図	荒牧遺跡第23次調査区位置図	71
第53図	調査区設定図	71
第54図	土層断面図	72
第55図	第1遺構面平面図	73
第56図	井戸1平面図・断面図	74
第57図	第2遺構面平面図	75
第58図	建物1平面図・断面図	76
第59図	出土遺物	77
第60図	荒牧遺跡第26次調査区位置図	79
第61図	調査区設定図	79
第62図	平面図	80
第63図	自然河道平面図	81
第64図	自然河道土層断面図	82

第65図	自然河道内弥生土器出土状況図	83
第66図	出土遺物	84
第67図	溝1・2・4平面図・断面図	85
第68図	出土遺物	86
第69図	畑状遺構平面図・断面図	87
第70図	荒牧長野遺跡第2次調査区位置図	89
第71図	調査区設定図	89
第72図	槍先形尖頭器実測図	90
第73図	西野遺跡第5次調査区位置図	91
第74図	平面図	92
第75図	土層断面図	93
第76図	住居址(1)	94
第77図	住居址(2)	95
第78図	住居址炉跡	96
第79図	住居址遺物出土状況	97
第80図	出土遺物	98
第81図	弥生時代のピット群	99

図 版 目 次

PL,1a	北園遺跡第11次調査全景	101
1b	＃ 出土遺物	102
PL,2a	北園遺跡第15次調査全景	103
2b	＃ 調査風景	104
2c	＃ 東壁土層断面	105
PL,3a	北園遺跡第15次調査東壁南側土層断面	106
3b	＃ 東壁北側土層断面	107
3c	＃ 出土遺物	108
PL,4a	山田遺跡第4次調査北側トレンチ全景	109
4b	＃ Pit17～23検出状況	110
4c	＃ Pit15土器出土状況	111
4d	＃ 集石遺構	112
PL,5a	山田遺跡第4次調査中央トレンチ全景	113
5b	＃ 南側トレンチ全景	114
PL,6a	山田遺跡第4次調査東側トレンチ全景	115
6b	＃ 西側トレンチ全景	116
PL,7	山田遺跡第4次調査出土遺物	117
PL,8a	山田遺跡第5次調査全景	118
8b	山田遺跡第5次調査集石遺構全景	119

- PL,9a 山田遺跡第5次調査集石遺構
- 9b " 集石遺構
- 9c 集石遺構
- PL,10a 山田遺跡第5次調査溝
- 10b " 井戸
- PL,11a 山田遺跡第5次調査掘立柱建物1
- 11b 山田遺跡第5次調査掘立柱建物2
- PL,12 山田遺跡第5次調査出土遺物(1)
- PL,13 山田遺跡第5次調査出土遺物(2)
- PL,14a 山田遺跡第6次調査全景
- 14b " 集石遺構検出状況
- PL,15a 山田遺跡第6次調査集石遺構完掘状況
- 15b " 集石遺構白磁出土状況
- 15c " 溝1、土坑1～5
- 15d " Pit30
- 15e " 南壁土層断面
- PL,16 山田遺跡第6次調査出土遺物(1)
- PL,17 山田遺跡第6次調査出土遺物(2)
- PL,18a 柏木古墳現況
- 18b 柏木古墳第1次調査全景
- PL,19 柏木古墳第1次調査出土埴輪(1)
- PL,20 柏木古墳第1次調査出土埴輪(2)
- PL,21a 御願塚古墳第6次調査全景
- 21b " 出土埴輪
- PL,22a 南野古墳第1次調査全景
- 22b " 調査区南側
- PL,23a 南野古墳第1次調査周濠検出状況
- 23b " 周濠内遺物出土状況
- 23c "
- PL,24 南野古墳第1次調査出土埴輪・須恵器
- PL,25a 荒牧遺跡第23次調査第1遺構面全景
- 25b " 井戸1検出状況
- PL,26a 荒牧遺跡第23次調査第2遺構面全景
- 26b " 溝6検出状況
- 26c " 溝6遺物出土状況
- PL,27a 荒牧遺跡第23次調査建物1
- 27b " 建物2
- PL,28 荒牧遺跡第23次調査出土遺物
- PL,29a 荒牧遺跡第26次調査全景
- 29b " 自然河道
- 29c 荒牧遺跡第26次調査自然河道遺物出土状況

29d	"	溝4(新)
29e	"	溝4(古)
PL,30a	荒牧遺跡第26次調査溝1・2・4	
30b	"	溝1
30c	"	溝1遺物出土状況
30d	"	溝2
30e	"	畑状遺構
PL,31	荒牧遺跡第26次調査出土遺物(1)	
PL,32	荒牧遺跡第26次調査出土遺物(2)	
PL,33a	荒牧長野遺跡第2次調査第5トレンチ南壁土層断面	
33b	"	槍先形尖頭器出土状況
33c	"	槍先形尖頭器
PL,34a	西野遺跡第5次調査西半全景	
34b	"	東半全景
PL,35a	西野遺跡第5次調査住居址	
35b	"	住居址遺物出土状況
PL,36a	西野遺跡第5次調査住居址炉跡	
36b	"	住居址炉跡遺物出土状況
36c	"	弥生時代のPit群
36d	"	礎石列
36e	"	出土遺物

第1章 調査概要

第1節 震災復旧・復興関連発掘調査の概要(平成7年～9年)

(年度毎の調査件数と調査原因)

平成7年度に実施した震災関連の発掘調査は14件である。この内、国庫補助事業として実施したものが8件、原因者が調査費用を負担する所謂原因者負担で実施したものが6件ある。調査の原因は、共同住宅建設が最も多く4件、次いで土地区画整理事業2件、寺院建て替え2件、倉庫建て替え2件、個人住宅建設2件、公衆浴場建て替え1件、社員寮建て替え1件となっている。7年度の調査原因を見てみると、翌年度に増加する共同住宅建設工事に係わる発掘調査は少なく、調査原因が多岐にわたり、建物の建て替え工事が中心となっている。

8年度は、18件の震災関連の発掘調査を実施した。この内国庫補助事業として実施したものが17件、原因者負担が1件である。調査原因を見てみると、共同住宅建設が15件、寺院の建て替えが1件、個人住宅建て替えが1件、土地区画整理事業が1件となっている。8年度の特徴は、調査原因に占める共同住宅建設事業が76%と高い割合を占めていることである。

9年度は7件の発掘調査を実施した。すべて国庫補助事業として実施したもので、調査原因を見てみると、共同住宅建設3件、個人住宅建設3件、寺院建て替え1件となっている。

(遺跡毎の調査件数)

震災関連の発掘調査について遺跡毎の調査件数を比較してみると、有岡城跡・伊丹郷町遺跡の調査件数が最も多い。この遺跡は、市の中心市街地に位置していることに加え、江戸時代以来酒造業で栄えた場所で古い町並みを残している地域でもある。震災ではこうした古い建築物に大きな被害があり、震災後、建て替えが進められた。

調査件数に占める有岡城跡・伊丹郷町遺跡の割合は、7年度が14件中6件で43%、8年度が18件中12件で66%、9年度が7件中5件で71%となっている。次いで調査件数の多い遺跡は、北園遺跡が3件、荒牧遺跡・南野遺跡・御願塚古墳が各2件となっている。

(県職員の支援)

震災復旧・復興事業に伴う発掘調査については、震災後の復旧・復興事業を円滑に進めるため、発掘調査を迅速に実施することを目的に、兵庫県教育委員会の職員の支援制度が設けられた。支援制度は、他府県の職員と政令指定都市の埋蔵文化財担当職員、および兵庫県教育委員会の埋蔵文化財担当職員で構成され、市町の派遣依頼に基づいて、発掘調査毎に支援が行われた。

伊丹市の場合では、7年度に有岡城跡・伊丹郷町遺跡第152次調査、同165次調査、柏木古墳第1次調査、山田遺跡第5次調査、北村遺跡第1次の4件で支援を得ている。8年度は有岡城跡・伊丹郷町遺跡第169次調査、第171次調査、第176次調査、第181次調査、第182次調査、第184次調査、第187次調査、山田遺跡第6次調査、西野遺跡第5次調査、北園遺跡第15次調査、荒牧遺跡第26次調査、荒牧長野遺跡第2次の12件の発掘調査で支援を得ている。また、9年度は有岡城跡第192次調査、第194次調査、197次調査、昆陽寺境内遺跡第8次調査、緑ヶ丘遺跡第12次調査5件で支援を受けている。

遺跡名	所在地	調査期間	面積	調査概要	備考
有岡城跡 第151次	伊丹3丁目525-4	平成7年 6月19日～8月29日	403㎡	共同住宅建設に伴う発掘調査。伊丹城期から有岡城期の堀跡、および江戸時代の酒蔵跡を検出。	
有岡城跡 第152次 (国庫補助事業)	伊丹3丁目533他	平成7年 7月3日～9月8日	263㎡	公衆浴場建設に伴う発掘調査。有岡城の侍町及び江戸時代の町屋の調査。有岡城の堀跡等を検出。	支援調査
有岡城跡 第160次 (国庫補助事業)	中央2丁目8-24	平成7年 10月30日～12月13日	100㎡	大蓮寺の寺院建設に伴う発掘調査。創建時の建物跡、溝跡、江戸時代の建設跡等を検出。	
有岡城跡 第165次 (国庫補助事業)	北本町1丁目13番地	平成7年 11月13日～1月26日	290㎡	万徳寺の寺院建設に伴う調査。鎌倉時代から江戸時代の調査。良好な状態の火災跡を検出。	支援調査
有岡城跡 第168次	中央2丁目416-2	平成8年 2月15日～3月29日	300㎡	共同住宅建設に伴う発掘調査。江戸時代の町屋跡を検出。	
有岡城跡 第173次 (国庫補助事業)	中央2丁目428-4	平成8年 3月27日～3月30日	16㎡	個人住宅建設に伴う発掘調査。江戸時代中期遺構の町屋跡、井戸跡、胞衣壺・埋額等の遺構を検出。	
北園遺構 第11次 (国庫補助事業)	北伊丹7丁目81	平成7年 6月5日～6月20日	162㎡	倉庫建設に伴う発掘調査。鎌倉時代から室町時代の遺物包含層を検出。	
南野遺跡 第1次	安堂寺町6丁目地内	平成7年 8月1日～8月11日	84㎡	土地区画整理事業に伴う発掘調査。中世の遺物包含層および土坑を検出	
柏木古墳 第1次 (国庫補助事業)	柏木町1丁目67	平成7年 8月21日～9月15日	220㎡	共同住宅建設に伴う発掘調査。古墳の周濠の調査。この調査により、古墳の規模が直径55mであることが判明した。	支援調査
山田遺跡 第4次	山田4丁目7番25号	平成7年 8月21日～9月4日	240㎡	倉庫建設に伴う発掘調査。鎌倉時代から室町時代の集落跡の調査。掘立柱建物跡等を検出。	

表1 震災復旧・復興関連発掘調査一覧表 平成7年度(1)

遺跡名	所在地	調査期間	面積	調査概要	備考
山田遺跡 第5次 (国庫補助事業)	山田4丁目7番17号	平成7年 11月13日～12月6日	192㎡	共同住宅建設に伴う発掘調査。鎌倉時代から室町時代の集落跡。掘立柱建物跡、井戸跡、集石遺構等を検出。	支援調査
北村遺跡 第1次	錦物師4.5丁目地内	平成7年 9月7日～12月27日	3,000㎡	土地区画整理事業に伴う発掘調査。弥生時代後期から古墳時代前期の溝、奈良時代の土坑、平安時代末から鎌倉時代の水田跡等を検出。	支援調査
荒牧遺跡 第23次	荒牧字西貝ノ内	平成7年 10月3日～11月16日	225㎡	社員寮建設に伴う発掘調査。弥生時代と奈良時代から平安時代の集落跡。掘立柱建物跡・井戸・溝跡等を検出。	
御願塚古墳 第6次 (国庫補助事業)	御願塚4丁目348-5	平成7年 12月1日～12月13日	75㎡	個人住宅建設に伴う発掘調査。御願塚古墳の二重周濠の外側周濠の調査。古墳時代中期の円筒埴輪片が出土。	

表2 震災復旧・復興関連発掘調査一覧表 平成7年度(2)

遺跡名	所在地	調査期間	面積	調査概要	備考
有岡城跡 第163次 (国庫補助事業)	伊丹3丁目1-31	平成8年 4月18日～6月13日	200㎡	共同住宅建設に伴う発掘調査。江戸時代の酒蔵跡を検出。	
有岡城跡 第169次 (国庫補助事業)	宮ノ前1丁目84-3他	平成8年 8月29日～10月23日	371㎡	共同住宅建設に伴う発掘調査。江戸時代中期以降の町屋跡を検出。	支援調査
有岡城跡 第170次 (国庫補助事業)	中央2丁目431-1他	平成8年 6月20日～8月12日	270㎡	法嚴寺の本堂建替に伴う発掘調査。有岡城期・江戸時代の遺構を検出。	

表3 震災復旧・復興関連発掘調査一覧表 平成8年度(1)

遺跡名	所在地	調査期間	面積	調査概要	備考
有岡城跡 第171次 (国庫補助事業)	伊丹6丁目765	平成8年 5月7日～7月12日	423㎡	共同住宅建設に伴う発掘調査。江戸時代後期の町屋跡を検出。	支援調査
有岡城跡 第176次 (国庫補助事業)	中央2丁目425-3	平成8年 5月13日～5月31日	115㎡	共同住宅建設に伴う発掘調査。江戸時代後期の町屋跡を検出。	支援調査
有岡城跡 第181次 (国庫補助事業)	宮ノ前3丁目58-1	平成8年 7月25日～9月27日	190㎡	共同住宅建設に伴う発掘調査。堀跡検出。堀跡は断面V字形をしていて、幅5m、深さ3mを測る。	支援調査
有岡城跡 第182次 (国庫補助事業)	中央3丁目382、383	平成8年 7月24日～9月4日	140㎡	共同住宅建設に伴う発掘調査。江戸時代の酒蔵跡を検出。	支援調査
有岡城跡 第184次 (国庫補助事業)	宮ノ前2丁目169-3、4	平成9年 1月20日～3月19日	350㎡	共同住宅建設に伴う発掘調査。江戸時代の埋桶等の遺構を数多く検出。奈良時代の掘立柱建物を検	支援調査
有岡城跡 第186次 (国庫補助事業)	宮ノ前1丁目85-1、 88-2	平成8年 12月3日～12月20日	50㎡	個人住宅建設に伴う発掘調査。江戸時代中期以降の町屋跡を調査。水琴窟等の遺構を検出。	
有岡城跡 第187次 (国庫補助事業)	中央6丁目507-4	平成8年11月20日～ 平成9年3月5日	300㎡	共同住宅建設に伴う発掘調査。江戸時代の酒蔵跡を検出。女郎塚古墳の埴輪出土。	支援調査
有岡城跡 第188次 (国庫補助事業)	中央3丁目403-5、7	平成9年 1月27日～3月27日	80㎡	共同住宅建設に伴う発掘調査。江戸時代の酒蔵跡を検出。酒造用の竈9基を検出。	
有岡城跡 第189次 (国庫補助事業)	伊丹3丁目603-9	平成9年 3月13日～3月31日	30㎡	共同住宅建設に伴う発掘調査。伊丹城から有岡城時代の井戸跡・遺構・礎石建物跡等を検出。	

表4 震災復旧・復興関連発掘調査一覧表 平成8年度(2)

遺跡名	所在地	調査期間	面積	調査概要	備考
山田遺跡 第6次 (国庫補助事業)	山田4丁目7番21号	平成8年 5月13日～6月14日	275㎡	共同住宅建設に伴う発掘調査。奈良時代から中世の集落跡。溝・集石遺構等を検出。	支援調査
西野遺跡 第5次 (国庫補助事業)	西野6丁目35-1、 36-1の一部	平成8年 6月20日～8月2日	231㎡	共同住宅建設に伴う発掘調査。弥生時代後期の竪穴住居跡を検出。	支援調査
南野古墳 第1次	安堂寺町6丁目地内	平成8年 5月31日～6月6日	36㎡	土地区画整理事業に伴う発掘調査。古墳の周濠と埴輪を検出。	
北園遺跡 第15次 (国庫補助事業)	北園3丁目19-1、 18-1、20-2	平成8年 10月22日～11月8日	116㎡	共同住宅建設に伴う発掘調査。中世の遺物包含層を検出。	支援調査
荒牧遺跡 第26次 (国庫補助事業)	荒牧字池ノ上10番地	平成9年 1月6日～2月21日	360㎡	共同住宅建設に伴う発掘調査。弥生時代後期の溝跡等を検出。	支援調査
荒牧長野 遺跡第2 次(国庫 補助事業)	荒牧字長野54他	平成8年 12月6日～12月9日	24㎡	共同住宅建設に伴う確認調査。中世の遺物包含層を検出。また、有舌尖頭器が出土した。	支援調査

表4 震災復旧・復興関連発掘調査一覧表 平成8年度(3)

遺跡名	所在地	調査期間	面積	調査概要	備考
有岡城跡 第192次 (国庫補助事業)	宮ノ前2丁目210-3、 210-4、210-5	平成9年 6月26日～9月25日	265㎡	共同住宅建設に伴う発掘調査。江戸時代後期の鋳造遺構、江戸時代後半の小規模な酒蔵跡、江戸時代中期の火災跡を検出。	支援調査
有岡城跡 第194次 (国庫補助事業)	中央2丁目444-2	平成9年 6月18日～7月25日	100㎡	個人住宅建設に伴う発掘調査。江戸時代後半の町屋跡を検出。	支援調査

表5 震災復旧・復興関連発掘調査一覧表 平成9年度(1)

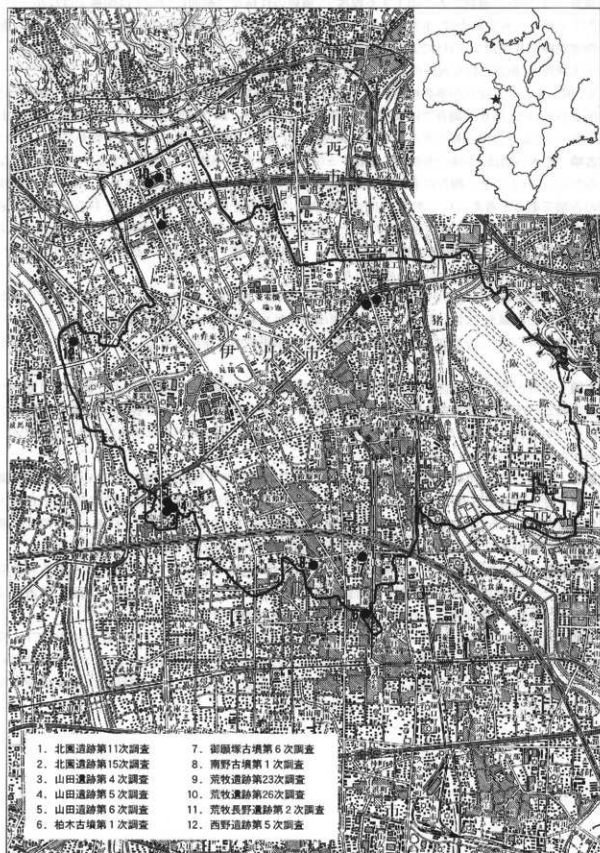
遺跡名	所在地	調査期間	面積	調査概要	備考
有岡城跡 第195次 (国庫補助事業)	伊丹4丁目724-14.15	平成9年 6月24日～6月30日	25㎡	店舗付個人住宅建設に伴う発掘調査。江戸時代中期以降の町屋跡を検出。	
有岡城跡 第197次 (国庫補助事業)	宮ノ前1丁目154-1 他	平成9年 8月28日～11月5日	420㎡	個人住宅建設に伴う発掘調査。江戸時代中期の町屋跡を検出。	支援調査
有岡城跡 第203次 (国庫補助事業)	伊丹1丁目5	平成10年 2月16日～3月31日	700㎡	共同住宅建設に伴う発掘調査。江戸時代後期以降の酒蔵跡と、有岡城期の侍町関連の遺構を検出。	
尾陽寺境内遺跡 第8次 (国庫補助事業)	寺本2丁目159	平成9年 4月30日～6月19日	316㎡	寺院建て替えに伴う発掘調査。中世の寺院跡を検出。根石をもつ柱穴や、瓦が多く出土したことから瓦葺の建物の存在が考えられる。	支援調査
緑ヶ丘遺跡 第12次 (国庫補助事業)	鋳物師2丁目7番地	平成9年 8月27日～9月19日	250㎡	共同住宅建設に伴う発掘調査。16世紀代の堀跡を検出。堀の中から羽子、鉄滓、炉壁等の製鉄関連の遺物が出土した。	支援調査

表5 震災復旧・復興関連発掘調査一覧表 平成9年度(2)

第2節 遺跡の概要

本書所載の調査成果は、北園遺跡第11次、同15次、山田遺跡第4～6次、柏木古墳第1次、御願塚古墳第6次、南野古墳第1次、荒牧遺跡第23次、同26次、荒牧長野遺跡第2次、西野遺跡第5次の12件である。北園遺跡 北園遺跡は、猪名川右岸に形成された沖積地に位置する遺跡で、主に古墳時代から中世にかけての遺跡である。これまでに実施された発掘調査では、昭和61年度、兵庫県教育委員会が実施した都市計画道路尾崎港川西線道路改良工事に伴う発掘調査(「北園遺跡発掘調査報告書」兵庫県教育委員会 1991)において、古墳時代後期の流路跡、平安時代後期から室町時代中頃の掘立柱建物跡と梵字瓦が出土している。この調査以降、本格的な発掘調査は実施されていないが、確認調査などでは瓦器やスラッグなどが包含層から出土しており、概ね鎌倉から室町時代にこの遺跡の中心があることが判ってきた。

今回報告する第11次調査では、僅かな遺構と遺物が検出されたが、遺物は包含層からの出土であり、遺跡の性格は明かにできていない。また、第15次調査でも同様に包含層から白磁碗片や羽釜片が出土した程度である。



第1図 調査箇所位置図(1/50,000「大阪西北部」)

山田遺跡 山田遺跡は、武庫川の左岸に形成された伊丹台地(洪積台地)の縁辺部に位置する。これまでの発掘調査では、中世の遺物が若干出土する程度で、遺跡の性格及び範囲については明確ではなかった。今回報告する第4～6次調査は、本遺跡における初めての本格的な発掘調査である。この調査により、掘立柱建物跡や井戸跡など具体的な遺構が検出され、また遺跡の時代を明かにする遺物が出土した。

第4次調査は、新設される倉庫の基礎の範囲を対象に発掘調査を実施したため、トレンチ調査となっているが、根石を有する柱穴が多数検出された。第5次調査では鎌倉時代の掘立柱建物跡2棟、井戸跡が検出されている。第6次調査では集石遺構・溝跡などが検出され、平安時代から鎌倉時代の遺物が出土している。このように今回報告する3カ所の調査成果により、具体的な遺跡の状況が明らかになってきた。

柏木古墳 柏木古墳は、市域の南端部に位置する中期古墳である。現状では墳丘の全面が共同墓地となっているため、これまで全く調査の手が入っていなかったが、墳丘上で埴輪が採集されることから古墳時代中期の古墳であると考えられてきた。今回の発掘調査は、墳丘そのものを対象にしたものではなく、墳丘西側を南北に通る道路のさらに西側で行った。調査の結果、柏木古墳の周濠と考えられる幅11m、深さ40cmの濠跡を検出した。周濠は墳丘を取り巻くように円弧を描いて延びていることから、円墳であれば直径が55mの規模であることが確かめられた。

御願塚古墳 御願塚古墳は帆立貝式の前方後円墳で、周囲に馬蹄形の周濠が巡っている。これまでに実施した外堤部の発掘調査では二重目の小規模な周濠が発見され、御願塚古墳が二重周濠を有する古墳であることが確かめられた。今回報告する第6次調査は、古墳東側の外堤部で実施し、二重目の周濠を検出した。

南野古墳 南野古墳は、土地区画整理事業に伴い実施した南野遺跡第1次調査により新たに発見された古墳跡である。今回の発掘調査では周濠の一部を調査したに過ぎないが、周濠内部から多数の埴輪片が出土したことから古墳と断定し、南野古墳と呼称することにした。墳丘の形状は明確にできなかったが、周濠の形状から方墳の可能性が高いと考えられる。

荒牧遺跡 市域の北部、伊丹台地の中央部に位置する。これまでから共同住宅建設に伴い多くの発掘調査が行われてきた遺跡である。これまでの発掘調査では、主に弥生時代後期から古墳時代初期、奈良時代の遺跡が確認されている。今回報告する第23次調査では、平安時代(10世紀中頃)の井戸跡と弥生時代後期の遺物包含層が検出されている。また、第26次調査では弥生時代前期の遺構が初めて確認された。

荒牧長野遺跡 荒牧長野遺跡第2次調査では、旧石器時代末期から縄文時代早期と考えられる有舌尖頭器が出土した。市内では、荒牧遺跡第16次調査地点に次いで2例目の発見である。この調査では遺構は発見できなかったが、周辺地域にこの時代の遺跡が存在する可能性が高い。

西野遺跡 西野遺跡は伊丹台地の西縁、武庫川を望む高台に位置する遺跡である。第3次調査では、弥生時代中期および古墳時代後期の集落跡が発見されている。今回の第5次調査地点は、第3次調査地点の北側で実施したものである。この調査で新たに弥生時代後期の竪穴住居跡1軒が発見され、西野遺跡の弥生時代後期の集落が北側に広がって入ることが確認できた。

第2章 発掘調査の成果

第1節 北園遺跡第11次調査

所在地 伊丹市北伊丹7丁目81
調査面積 162m²
調査期間 平成7年6月5日～6月20日
調査担当 小長谷正治 瀬川眞美子
調査概要

今回の発掘調査は阪神・淡路大震災の被災者が経営する会社の倉庫建設に伴うものである。当該地は埋蔵文化財分布地の範囲内にあるため事前に確認調査を実施した結果、敷地の西側に遺物包含層が存在し、東側には存在しないことが確かめられた。このため、発掘の対象範囲を敷地の西側に限定して調査を行った。

まず、表土を重機を用いて除去し、その後を人力によって掘削・精査するとともに、適宜写真撮影・実測等の記録作業を行った。また、遺構は全て地山上面で検出した。

遺跡概要

北園遺跡は伊丹台地東側の猪名川流域に広がる沖積地に位置している。本遺跡はこれまでに10回の確認・全面調査が行われており、古くは古墳時代後期の集落跡が発見されているが、遺跡の中心となるのは鎌倉時代から室町時代である。周辺の遺跡としては当遺跡の北側に弥生時代から鎌倉時代の遺構・遺物が確認されている北村遺跡や西側の伊丹台地上に伊丹廃寺・緑ヶ丘遺跡が位置している。

調査成果

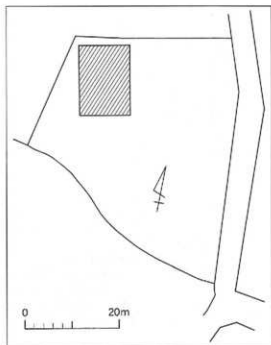
調査区の東側から西側にかけて緩やかに地形が落ち込んでおり、その落ち込みに遺物包含層が堆積していた。この包含層の厚みは約20cmで、瓦器・土師器・須恵器の破片が数多く出土するが、集中して出土することではなく、全体に平均的に出土している。遺構は土坑、ピットが調査区の南東側および北側において検出されたが、遺構内部から遺物は出土せず、明確な時期は不明である。

層序(第4図)

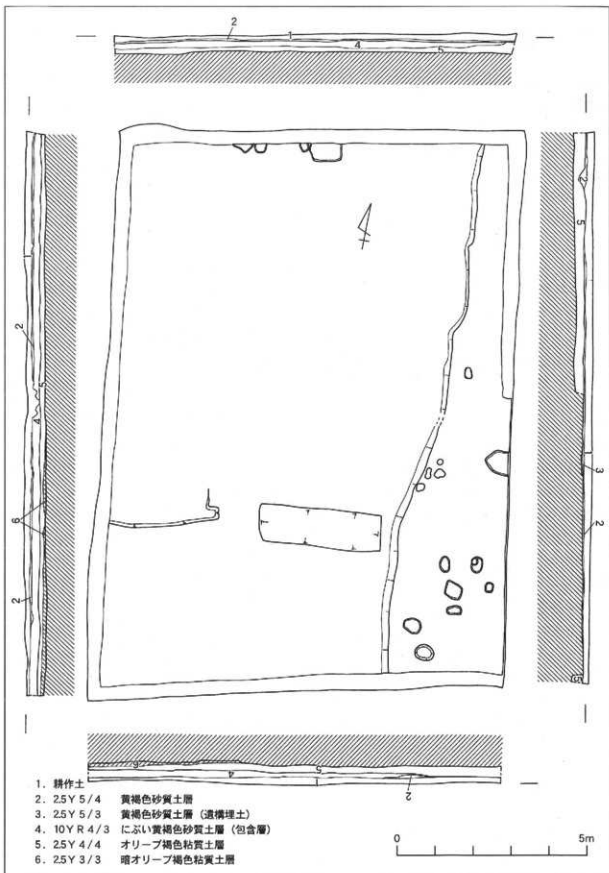
基本層序は耕作土である黒褐色砂質土層(1)の下に黄褐色砂質土層(2・3)が堆積し、その下に約20cmの厚さでいぶい黄褐色砂質土の遺物包含層(5)が堆積する。東壁にはこの5層の堆積が見られず、南北壁では東から西へ堆積している状態が観察できる。更にその下にオリーブ褐色粘質土層の地山(6)がつづく。



第2図 北園遺跡第11次調査区位置図(1/5,000)



第3図 調査区設定図(1/800)



第4図 平面図・土層断面図(1/100)

遺構と遺物(第5図、PL. 1b)

遺構としては土坑5基、ピット12基を検出した。遺構はいずれも黄褐色砂質土を埋土としている。遺構から遺物の出土は見られず、時期については不明である。調査区東側には西側に浅く落ち込んでいる遺構を南北方向に検出しているが、これは地形が東から西に緩やかに落ち込んでいるものである。この落ち込みには、にぶい黄褐色砂質土の遺物包含層が堆積していた。遺構は調査区の東側に集中していることから当遺跡の中心が東側に広がっていることが推測される。

包含層から中世の遺物がコンテナ2箱ほど出土しているもので、その中から図化できたものについて説明を行い、遺構のおおよその年代としたい。

1～4は土師器小皿である。1は口径8.6cmのヘソ皿である。外面には指頭圧痕がよく残っている。浅黄褐色を呈し、クサリ礫・砂粒を含む胎土である。

ヨコナゲのために底部と口縁部との境に稜がつく小皿には、口縁が僅かに立ち上がるもの2と外方に延びるもの3がある。浅黄褐色を呈し、胎土には砂粒・雲母を含む。4は口径9.0cm、高さ1.6cmを測る。口縁部は丁寧にヨコナゲして器壁を薄く仕上げている。灰黄色を呈し、砂粒を含んだ精良な胎土である。

5～7は瓦器小皿である。5は口径8.9cm、器高2.0cmを測る。口縁部内外面を粗くヘラミガキし、見込みにはジグザグ状ミガキを施す。

6・7は口径7.8～8.0cm、器高1.2～1.4cmを測り、5よりも小型化している。ヘラミガキも省略されていて内面周縁のみに粗く施される。黒灰色を呈し、砂粒を含む精良な胎土である。

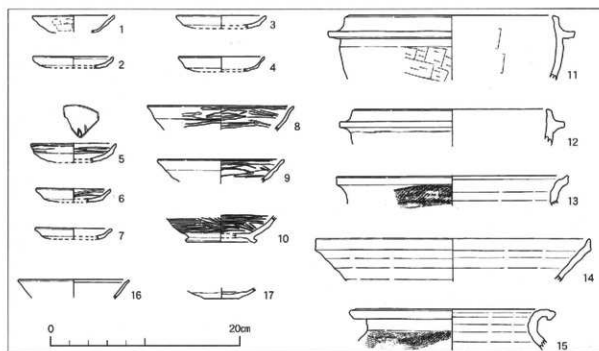
8～10は和泉型の瓦器椀である。8は口径15.7cmを測る。内外面には粗いヘラミガキを施している。

9は口径13.2cmを測る。ヘラミガキは内面のみに粗く施される。炭素の吸着が悪く灰白色を呈する。

10は径7.0cmを測る椀高台である。内面は密にヘラミガキされ、外面は分割してヘラミガキが施される。

11は土師質の羽釜である。口径21.6cmを測る。外面は口縁部付近をナデ調整し、体部はヘラケズリする。内面は刷毛目が施されていたようである。外面は黒色を呈し、鏝下方には煤の付着が見られよく使用されていたことが窺える。

12は瓦質の羽釜である。口径20.2cmを測る。短く立ち上がる口縁部と短い鏝を持つものである。三足釜で



第5図 出土遺物(1/4)

あろうか。褐色を呈し、雲母・砂粒を含む胎土である。

13は瓦質の甕である。口径24.4cmを測る。内外面はナデ調整するが、外面はその後タタキを施している。14・15は東播系須恵器である。14は口径28.8cmを測る片口鉢である。口縁端部は上方につまみ上げる。15は口径21.4cmを測る甕である。体部内外面にはタタキ痕が残る。

中国製磁器として白磁(16・17)が出土している。16は口縁端部が口禿になった皿である。灰白色の粗い胎土で、釉は青味がかった灰白色を呈している。17は皿の底部である。釉は黄色味を帯びた白色を呈するが、外面体部下位から底部にかけて施釉されていないものである。その他に内面に櫛で花文を描いている白磁椀や龍泉窯系青磁椀の体部片が出土している。これらの包含層の出土遺物から見ると、やや時期幅があるが遺構の年代は11世紀後半～13世紀中頃であると考えられる。

まとめ

本地点における遺跡の状況は、遺跡の中心部というより縁辺部の様相を呈している。包含層中の遺物も小片が多く、完形に近い遺物は皆無であり、また、遺構にも見るべきものはない。これまでの発掘調査から遺跡の中心は当該地の東側に存在すると考えられる。しかし、当遺跡の調査は本格的に実施された例が少なく、今後の調査により新たな事実が明らかとなる可能性を多く残している。

(瀬川)

第2節 北園遺跡第15次調査

所在地 伊丹市北園3丁目19-1,18-1,20-2

調査面積 116㎡

調査期間 平成8年10月22日～11月8日

調査担当 今村 道雄(大阪府)

町田 利幸(長崎県)

調査概要

今回の発掘調査は阪神・淡路大震災の復興事業に伴う共同住宅建設計画により実施されたものである。当該地は埋蔵文化財分布地の範囲内にあるため伊丹市教育委員会が確認調査を行った結果、古墳時代後期から中世にかけての遺物包含層が認められ、全面調査を行うこととなった。

調査に際しては、伊丹市教育委員会から兵庫県教育委員会に対して支援の依頼があり、兵庫県埋蔵文化財調査事務所復興調査班の職員が調査を担当した。

工事によって損壊をうける部分についてのみを掘削の対象とし、敷地の中央部に南北29m、東西4mの調査区を設定した。まず、盛土を重機によって剥ぎ取り、その後を人力によって掘削・精査するとともに、適宜写真撮影・実測等の記録作業を行った。



第6図 北園遺跡第15次調査区位置図(1/5,000)

遺跡概要

北園遺跡は標高14～15mの伊丹台地東側の猪名川流域に広がる沖積地に位置する古墳時代後期から江戸時代にかけての集落遺跡である。本遺跡はこれまでに14回の確認・全面調査が行われているが、遺跡の中心となるのは鎌倉時代から室町時代である。周辺の遺跡としては当遺跡の北側に広がる北村遺跡(弥生時代～鎌倉時代)、西側の伊丹台地上に伊丹廃寺、緑ヶ丘遺跡が位置している。

調査成果

遺構については確認調査と同様に検出されなかった。このため、東壁面に沿って北側端と南側端に2×5m、深さ約1mのトレンチを人力によって掘削し、ひきつづき精査を行ったが遺構・遺物ともに認められなかった。

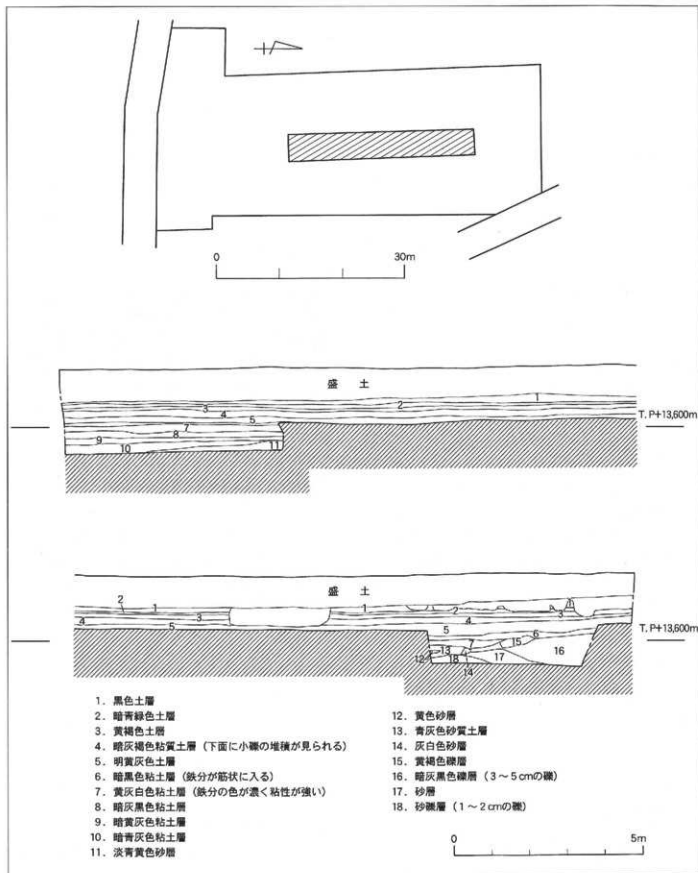
層序(第7図、PL, 2・3)

基本層序は1層が黒色土層、2層は暗青緑色土層、3層は黄褐色土層、4層は古墳時代後期から中世にかけての遺物包含層である。5層は地山の明黄灰色粘質土層である。盛土以下の土層堆積状況は、ほぼ成層状態であった。(今村・町田)

遺物(第8図、PL, 3)

4層から高杯・須恵器・土師器・黒色土器・瓦器・瓦質土器・中国製白磁等の古墳時代後期から中世にかけての遺物が混在した状態で出土した。いずれも磨耗が著しく、細片であるが、図化できたものについて説明したい。

1は瓦器小皿である。口径7.0cm、器高1.5cmを測る。器面が磨滅しているため、内外面ともに調整・暗文は



第7図 調査区設定図・土層断面図(1/600・1/100)

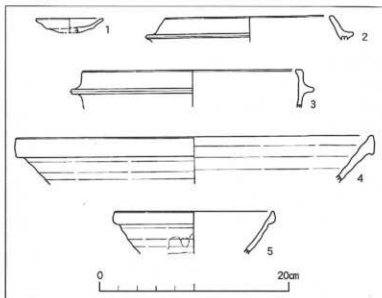
不明瞭である。

2・3は瓦質羽釜である。2は口径17.6cmを測る。口縁部は内傾し、端部を丸くおさめる。三足釜であると思われる。調整は磨滅のため不明瞭である。

3は口径23cm。口縁部は短く立ち上がり、端部は内側にやや拡張する。口縁部内外面をヨコナデ調整しているが、鏝以下は不明瞭である。

4は東播系須恵器である。口径37.6cmを測る大型の片口鉢で、口縁端部は上下に拡張する。

5は白磁碗IV類の口縁である。胎土中に黒色微粒が入り、釉は灰色を帯びた白色を呈している。
(瀬川)



第8図 出土遺物(1/4)

まとめ

調査の結果は、第4層に古墳時代から中世の遺物の出土を見る。遺物はローリングを受けた状態を呈していることから、猪名川の氾濫によって流れ込んで堆積したと考えられる。また、比較的大きな破片も出土しており、周辺からは瓦片の出土や集落跡が確認されていることから北村廃寺(10～15世紀)に関係した遺構等が存在する可能性を窺わせている。
(今村・町田)

註1 横田賢次郎・森田 勉 1978 「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』4。

第3節 山田遺跡第4次調査

所在地 伊丹市山田4丁目7番25号
調査面積 240㎡
調査期間 平成7年8月21日～9月4日
調査担当 小長谷正治 細川佳子
調査概要

今回の調査は、阪神・淡路大震災により被災した倉庫の建て替え工事に先がけて、平成7年8月8日に試掘調査を行った。敷地の中央部と南側に2×2mのトレンチ2箇所を設定した。その結果、根石をもつ柱穴をそれぞれ1基ずつ検出し、それ以外のものも合わせて3基ずつ、合計6基の柱穴を検出した。また、瓦器や土師器などの中世の遺物の小片が出土した。このため、発掘調査を実施することにした。発掘調査は震災復旧・復興事業であるため、工事による掘削が遺構を損壊する範囲の調査になる。このことから調査区は建物の基礎が遺構面に影響を及ぼすところのみに設定した。

調査区が建物の基礎の及ぶ範囲のみであるので、建物の外周と中央部分の東西一列とした。建物の規模は南北30m、東西24mであり、基礎の幅が1.8～1.9mであることからトレンチの幅は2mとし、長さは東側トレンチ、西側トレンチはそれぞれ30m、北側・中央・南側トレンチの長さは、東側・西側トレンチと重なる部分を除いてそれぞれ20mとした。

遺跡概要

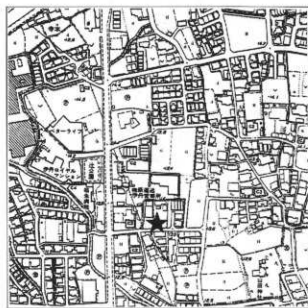
山田遺跡は、伊丹市城の南西部、伊丹台地の西端にあたる。遺跡の範囲は東西約700m、南北約300mに及ぶ。このあたりの標高は13～15mを測る。遺跡の南側は尼崎市域に広がると考えられる。遺跡の北へ約500mの地点には中世の寺院跡である昆陽寺境内遺跡がある。昭和61年度～63年度に実施した伊丹市内の遺跡分布調査では、この地域で広範囲に奈良時代から平安時代の遺物が採集された。その後、遺跡の西側の発掘調査では瓦器等の中世の遺物が出土した。当調査地点の周辺には田畑も残っているがしだいに共同住宅や個人住宅が建ち、宅地化が進んでいる。

調査成果

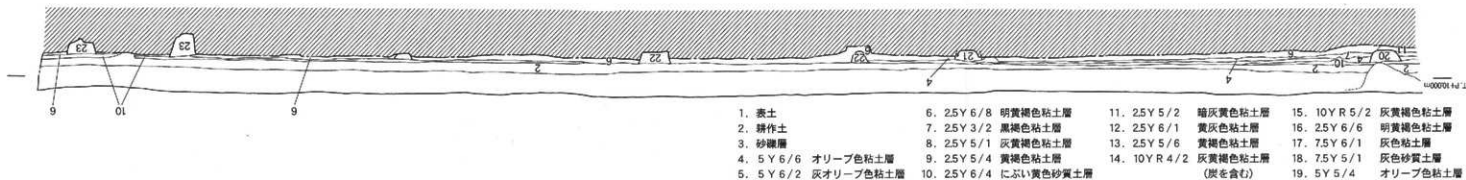
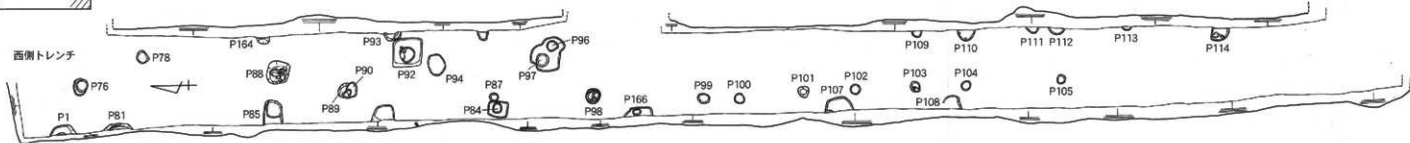
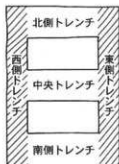
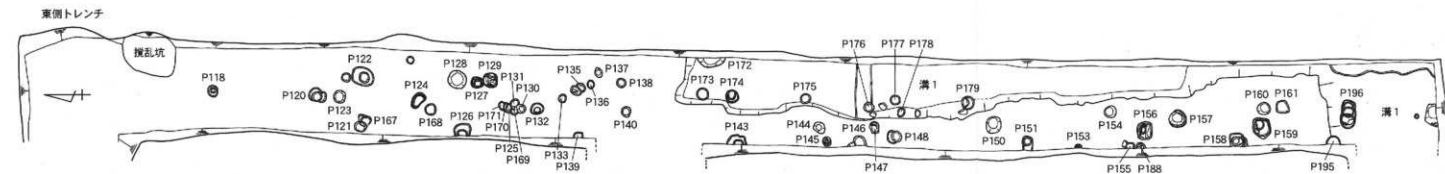
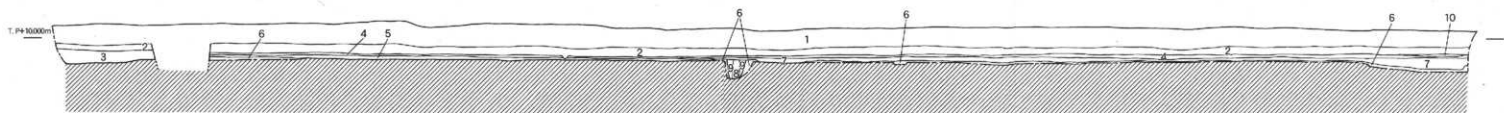
東側トレンチより掘削を開始した。表土は重機により除去し、試掘調査時に遺物包含層が検出されなかったため、明黄褐色粘土層の地山上で遺構検出を行った。遺構の埋土は黒褐色粘土と灰褐色粘土をしていて、地山の明黄褐色粘土とは明らかに違うので遺構検出しやすい状態であった。検出した遺構は、集石遺構1基、溝状遺構1基、落ち込み状遺構1基、柱穴196基である。遺物は瓦器や土師器や東播系須恵器、土師器などに混じって緑釉陶器や灰釉陶器などもわずかに出土した。奈良時代から平安時代、中世の土器などと共に格子目タタキのある瓦が若干出土した。

層序(第10・11回)

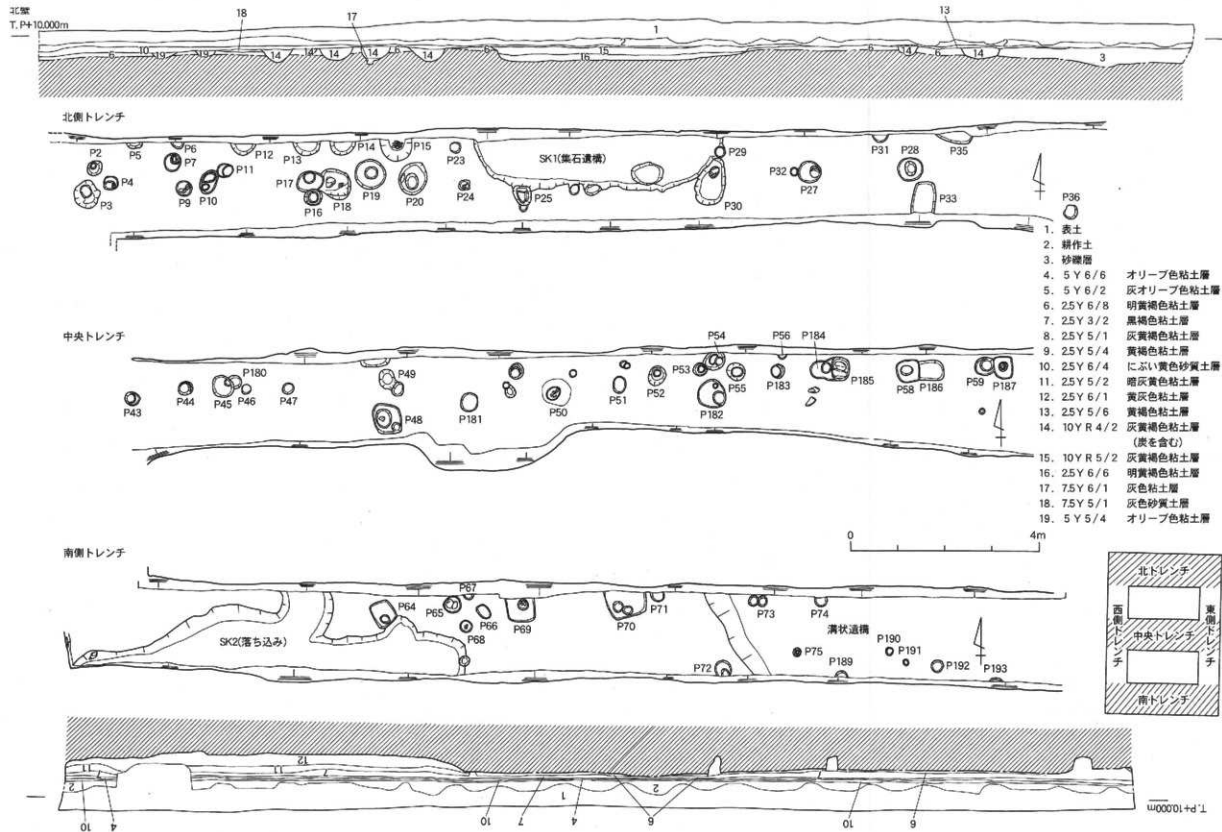
基本的層序は、上から表土(盛り土)が40～50cmの厚さで堆積し、その下に耕作土が10～20cmの厚さで堆積し、さらにその下には、東壁をみるとオリーブ色粘土層(4)、灰オリーブ色粘土層(5)が薄く堆積している。また、北壁をみると、東側には黄褐色粘土層(13)、にぶい黄色粘土層(10)が薄く堆積している。



第9回 山田遺跡第4次調査区位置図(1/5,000)



第10図 東側・西側トレンチ平面図・土層断面図(1/80)



第11図 北側・中央・南側トレンチ平面図・土層断面図(1/80)

これらの層を経て明黄褐色粘土層(6)の地山に達する。調査区の北東隅には砂礫層の地山がみられる。表土から地山までの厚さは46~80cmを測り、南側の方ほど厚くなっている。

遺構(第10・11図、PL, 4~6)

集石遺構

北側トレンチで検出した。遺構は北側の調査区外につづく。平面形は北側は不明であるが、検出された部分だけみると隅丸方形になると推定できる。掘り方の平面形は直線的ではなく僅かに入り組んだ状態である。埋土は上層が灰黄褐色粘土層、下層が明黄褐色粘土層をしていて地山によく似た土層である。遺構の内部には20~30cmの大きさの角がとれて丸みをおびた礫が隙間なく敷き詰められていた。これを取り除くと下段にも同じような礫が検出された。上段の礫が隙間なく敷き詰められていたのに対し、下段のは礫と礫との間隔をおいて据えられていた。礫を取り除くと底はほぼ平坦であった。遺物は瓦器碗や東播系須恵器片口鉢や須恵器や土師器皿などの中世の遺物が多量に出土した。

溝状遺構

溝状遺構は南側トレンチから東側トレンチにかけて検出された。南側トレンチでは中央より東側に広がり、東西に延びていく。溝の南北の幅はトレンチの2mの幅を超えていて、東西の検出長は9.3mを測り、深さは5cmを測る。東側トレンチでは中央より南側で検出し溝は南北に延びる。西側の掘り方のみを検出し、南北の検出長は8.4m、深さは5~7cmを測る。掘り方は直線的でなく、入り組んでいる。埋土は黒褐色粘土をしている。南西隅で深くなっている、深さは検出面から20cmを測る。この部分は別の遺構とも考えられる。遺物は当地点の遺構の中でいちばん多量に出土した。種類は瓦器碗、黒色土器碗、瓦質土器鉢、須恵器杯・壺・壺、東播系須恵器鉢・甕、土師器皿・高杯・鍋、緑釉陶器碗、灰釉陶器碗・壺、格子目タタキの瓦などがあり、弥生土器の小片も若干混じっていた。

柱穴

柱穴は調査区全域で196基検出した。掘り方の平面形は、円形あるいは円形に近いものと、方形をしているものがある。その中には柱痕の残るものや根石をもつものがある。

196基の柱穴のうち、柱痕の残る柱穴は18基、柱痕の径は12cm前後のものが多い。根石をもつものは21基である。各トレンチごとに分布状況をみると、東側65基、西側35基、北側41基、中央36基、南側19基である。調査区全域の東側と北側では密度が濃く、西側と南側では密度が薄いことがいえる。

各トレンチごとに柱穴の状況を詳しくみていくことにする。

東側トレンチでは65基検出し、その中に柱痕の残るものは4基、根石をもつものは5基である。南北に並ぶ柱穴列はP118・P120・P124・P169で、柱穴列は南北に6.6m、各柱穴間は2.2mの等間隔である。掘り方は円形で、径は20~30cmで、遺構検出面からの深さは、P118は8cm、それ以外は20cm前後を測る。P120からは瓦器や土師器の小片が出土した。また、P173・P174・P175・P178・P179も南北にならび、その距離は5.6mで等間隔ではない。掘り方は円形で、径は20~25cm、深さは14~19cmを測る。P173・P174・P175からは須恵器・土師器の細かい破片が出土した。

西側トレンチでは35基検出し、北半に多く、南半ほど数が少なくなっている。その中に柱痕の残るものは3基、根石の残るものは5基である。柱痕や根石をもつものや、方形の掘り方をしているものはトレンチの北半に集中していて、南半にはない。南北に並ぶ柱穴列はP99~P105とP109~P114とがあり、それぞれ円形の掘り方をしている、各柱穴間は等間隔ではない。P99~P105の距離は7.5m、埋土は灰色粘土。P109~P114はトレンチの東側へつづき、東壁に切られているので、不明瞭である。P109からP114までの距離は6.6mを測り、各柱穴間は等間隔ではない。埋土はP109とP110は灰褐色粘土をしていて、P111~P114は灰色粘土をしている。

北側トレンチでは41基検出し、柱痕の残るものは8基、根石の残るものは4基である。トレンチの全域

で偏らずに検出された。P 15は円形の掘り方をして、径70cm、深さ25cmを測る。埋土は炭を多く含んだ灰黄褐色粘土で、底から上方に向かってすり鉢状に開く。出土遺物は黒色土器A類、土師器杯・小皿などの平安時代後期のものである。P 15の形状から柱穴ではなく、土坑と考えられる。P 15の西側には円形の掘り方で同じ形状をしたP 12・P 13・P 14を並んで検出した。P 12～P 14は径55～60cm、深さ25～27cmを測り、P 15と形状・規模・埋土が似ているので、これらはP 15と同様に土坑と考えられる。トレンチの東側にあるP 26・P 27・P 28は方形の掘り方で、東西に並んでいる。東西の距離は4.2m、各柱穴間は2.1mの等間隔である。P 26とP 27は20cm大の根石をもつ。埋土は灰褐色粘土をしている。P 26からは土師器杯、緑釉陶器碗の小片が出土した。

中央トレンチでは36基の柱穴を検出し、柱痕の残るものは5基、根石をもつものは1基である。東西に並ぶ柱穴列は、P 48・P 181・P 50と、P 185・P 186・P 187である。いずれも方形の掘り方をしている。柱穴列は2列とも東西に3.6m、各柱穴間は1.8mの等間隔である。P 48・P 181・P 50からは柱痕が検出された。P 185からは25～30cm大の根石が2つ検出された。

南側トレンチでは21基の柱穴を検出し、柱痕の残るものは2基、根石をもつものは2基である。東側の溝1の中に直径20cm前後の円形の掘り方をした柱穴が検出された。中央では方形の掘り方をした柱穴が3基検出された。柱穴の数も少なく、柱穴列となるものは検出されなかった。

(細川)

遺物(第12図、PL、7)

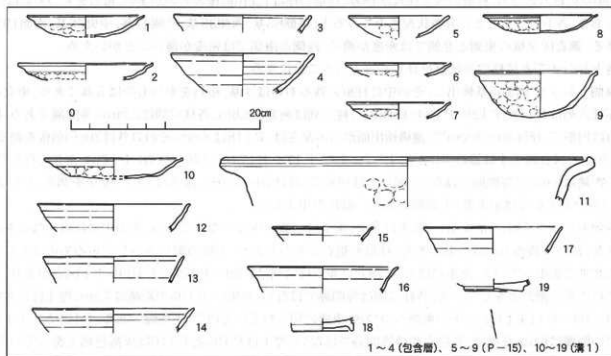
包含層

包含層からは土師器・須恵器・瓦器・瓦質土器・製塩土器・白磁などが出土しているが、何れも細片のため図示できるものはほとんどない。

1・2は土師器杯である。1は口径12.4cm、高さ2.3cm。2は口径14.2cm、高さ1.8cm。外面は指頭圧痕による凹凸が残るが、内面は丁寧にナデ調整する。

3は楠葉型の瓦器碗である。口縁端部内面に沈線が巡り、内外面にヘラミガキを施す。

4は須恵器碗である。口径15.0cm。口縁は丸みを持ってハの字状に広がる。



第12図 出土遺物(1/4)

ビット15

5～8は土師器杯である。8は口径12.0cm、器高1.9cm。外面体部は指頭圧痕による表面の凹凸がそのまま残っているが、内面は丁寧にナデ調整する。口縁部は外反して開き、端部を上方へ摘み上げる。浅黄橙色を呈し、胎土はクサリ礫・砂粒を含み粗い。

6・7は口径10.8～11cm、器高1.7～1.8cm。8に比べて一回り小さく、口縁の外反は緩い。浅黄橙色を呈し、胎土は精良である。

5は口径10.5cm、器高2.3cmを測る、深手の杯である。内外面の調整は前者と同様であるが、口縁部の外反は更に緩く、端部は丸くおさめられている。

9は土師器碗である。口径13.9cm、器高4.8cm。底部は丸みを持ち、やや内湾気味の体部が続く。口縁部は短く外反し、端部は強くヨコナデすることで凹線が巡る面をなしている。外面は指頭圧痕による凹凸が顕著であるが、内面は丁寧にナデ調整する。浅黄橙色を呈し、胎土は精良である。10世紀前半の所産であろう。

溝状遺構

10は土師器杯である。口径14.6cm、器高2.2cm。平らな底部から、稜を持って体部が外反しながら立ち上がる。口縁部は更に外反して、端部は巻き込んだようにおさめる。体部外面は指頭圧痕による凹凸がそのまま残っているが、内面は丁寧にナデを行う。また、器壁は薄手に仕上げられている。浅黄橙色を呈し、胎土はクサリ礫・砂粒を含み比較的精良である。

11は土師器甕である。口縁端部を内側に巻き込んでいる。表面の磨耗が著しく、内外面の調整は不明瞭である。浅黄橙色を呈し、胎土中に細かい砂粒を多く含む。

12は灰釉陶器碗である。口径16.0cm。口縁は内湾気味に立ち上がり、口縁部は僅かに外反して端部は尖り気味におさめる。内面に灰緑色の釉が掛かる。胎土は精良である。

13は須恵器杯、14は須恵器皿である。共に口縁は外方へハの字状に開く。

15～19は緑釉陶器である。15は口径10.6cm、内外面に淡黄緑色の釉が掛かる。16・17は口径14.6～15.8cm。口縁は外反しながら開く。16は内面に淡黄緑色釉が残り、17は内外面に淡緑色釉が施されている。何れも胎土は大変精良で、また、器壁は薄く作られている。18は輪高台である。内面と外面は高台付近まで施釉されている。19は円盤状高台で、内外面ににぶい黄緑色釉が僅かに残る。軟質である。10世紀前半頃の所産である。

(瀬川)

まとめ

今回はトレンチの調査であるので全容はわからない。出土遺物の年代は概ね奈良時代から平安時代と中世のものがある。柱穴の数は多く、当調査地点の東側の第5次調査や、北側の第6次調査よりも柱穴の数は多い。柱穴は方形の掘り方をしたものや、柱痕の残るもの、根石をもつものも多く検出され、規模の大きな掘立柱建物跡が数棟考えられる。検出された集石遺構は第5次・第6次調査でも発見されているが、遺構の性格は明らかではなく、今後の調査に期待する。

(細川)

<参考文献>

- 中世土器研究会 1995『概説 中世の土器・陶磁器』
- 古代の土器研究会編 1993『都城の土器集成Ⅱ—古代の土器2』
- 古代の土器研究会編 1994『都城の土器集成Ⅲ—古代の土器3』

第4節 山田遺跡第5次調査

所在地 伊丹市山田4丁目7番17号
調査面積 192㎡
調査期間 平成7年11月13日～12月6日
調査担当 神野 信(千葉県)
家塚 英詞(鳥取県)

調査概要

今回の調査は阪神・淡路大震災の被災地における民間集合住宅の建設に伴うものであり、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が伊丹市教育委員会からの依頼を受けて、損壊部分を対象とした全面調査を実施した。

遺跡概要

山田遺跡は伊丹市南西部の尼崎市との境界に広がる奈良時代から平安時代、中世にいたる複合遺跡で、本調査地点は山田神社の北西150mに位置する。周囲には田畑が広がっているが、宅地化が進んでいる。

調査成果

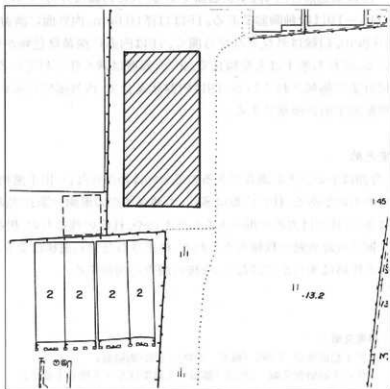
発掘調査の結果、集石遺構1基、溝2条、井戸1基、掘立柱建物2棟を検出した。これらの遺構は出土遺物から、おおむね13世紀の鎌倉時代に属するものである。この他、調査区北側において、南北方向の明灰褐色粗粒砂を覆土とする浅い溝が検出されており、その時期については明らかではないが、検出状況から耕作痕と考えられる。また調査区東側は、地山面に重機のバケットの爪跡が深く刻まれるなど著しい攪乱を受けている。

層序(第15図)

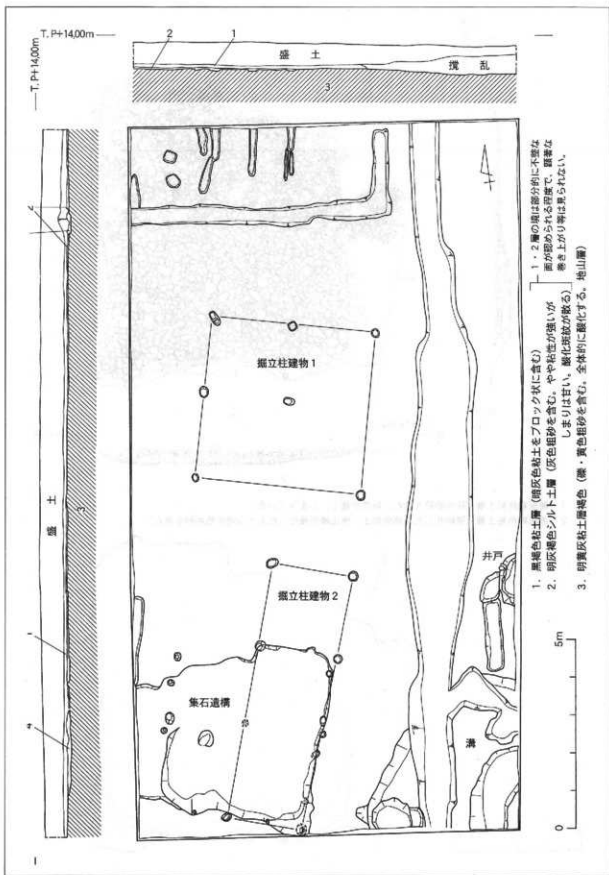
当調査地点は駐車場として使用されていたため、駐車場建設時の盛り土が約60cmの厚さで堆積していた。その下に旧耕作土である黒褐色粘土層が約10cmの厚さで堆積し、遺構覆土を経て地山面である伊丹礫層に達する。遺構は地山面でのみ検出された。



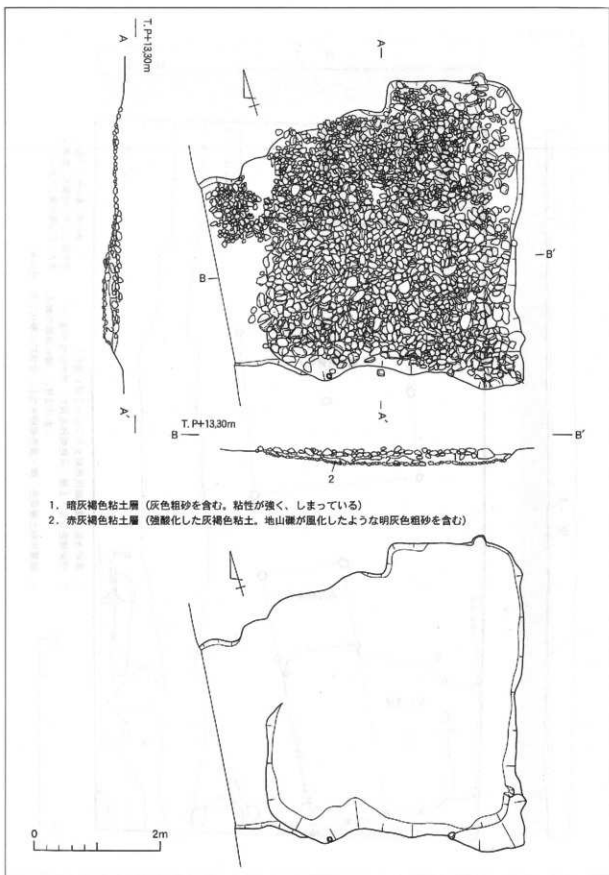
第13図 山田遺跡第5次調査区位置図(1/5,000)



第14図 調査区設定図(1/500)



第15図 平面図・土層断面図(1/100)



第16図 礫石遺構平面図・断面図(1/60)

遺構と遺物

集石遺構(第16・17図, PL, 8・9・12)

調査区南側で検出された、南北4.6m、東西4.0mの方形の集石遺構である。遺構の底面は北西から南東に向かって緩やかに傾斜しているため、検出面からの深さは、南東部が30cmで最も深い、北西に向かって浅くなり、北壁において検出面とつながる。その底面には、ほぼ全面を覆うように拳大の円礫が敷き詰められている。その上には灰褐色粘土層がほぼ水平に堆積し、その上にさらに人頭大の円礫が敷き詰められ、堅穴の南半分を覆っている。上層の礫はかなりしっかりと組むように敷かれており、礫敷きの上面を平坦に揃えようとした意図が伺える。そのためか下層の礫面が高くなる堅穴北壁沿いでは上層の礫敷きが途切れる。

集石南東隅からは溝状の掘り込みが南方向に伸びているようであるが、調査区外となるためにその詳細については明らかではない。また、西壁中央にも幅約3cmの浅い掘り込みを伴う礫敷きの突出部が認められた。遺構は伊丹礫層に掘り込まれており、底面の礫は露出した地山層中の礫の隙間を埋めるように敷かれているが、用いられている礫は地山層中の礫と同質のものである。

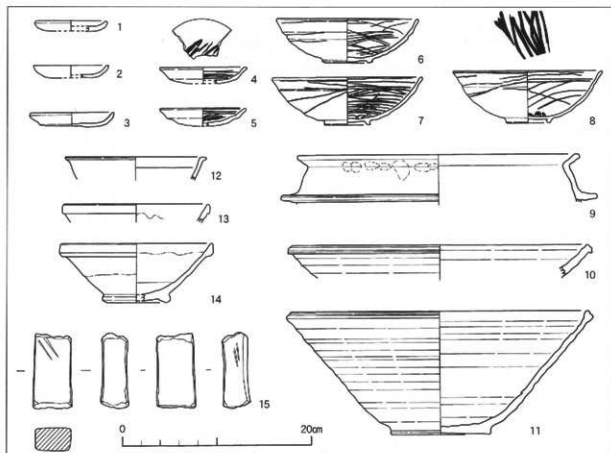
遺構の性格として構造及び堆積物から、遊水池ないし沈砂池のような働きをする施設と推測される。

遺物は、上層礫上と礫間層中より瓦器・須恵器・土師器が出土しているが、特に礫間層中は瓦器碗の占める比率が高い傾向がある。

(家塚)

1～3は土師器小皿である。口径7.7～8.0cm、器高1.1～1.3cmを測るものと、口径9.0cm、器高1.5cmを測るやや大きめのものがある。何れも精良な胎土で、浅黄橙色～黄灰色を呈する。

4・5は瓦器小皿である。4は口径9.2cm、器高1.7cm、5は口径9.0cm、器高1.9cmを測る。口縁部は強く



第17図 出土遺物(1/4)

ヨコナデされて、体部との境に稜ができています。ヘラミガキは内面のみに粗く施され、見込みにはジグザグ状ミガキあるいは平行線状ミガキが施される。

6～8は和泉型の瓦器碗である。6は口径14.8cm、器高5.0cm、底径5.4cm。内面は隙間の目立つヘラミガキを施し、見込みは不定方向にヘラミガキする。外面は体部上半に数条が認められるだけで、成形時の指頭圧痕がそのまま残っており、表面の凹凸が著しい。7は口径15.6cm、器高5.0cm、底径4.7cm。8は口径15.5cm、器高5.6cm、底径4.5cm。Ⅲ-1期であろう。

9は土師質の羽釜である。口縁がくの字状に外反し、端部は丸くおさめる。淡黄灰色を呈し、胎土に雲母・クサリ礫・長石・石英などを含む。

10・11は東播系須恵器の片口鉢である。10は丸みを帯びた体部に肥厚し、下方にやや拡張される口縁端部をもつ。12世紀前半頃のものか。11は口径31.4cm、器高13.0cm、底径10.2cmを測る。体部は直線気味に立ち上がり、口縁端部は肥厚し、丸みを帯びて上下に拡張する。

12～14は白磁碗である。12はV-4類、13・14はIV-1類。軸は灰白色を呈し、全体に薄く掛かる。

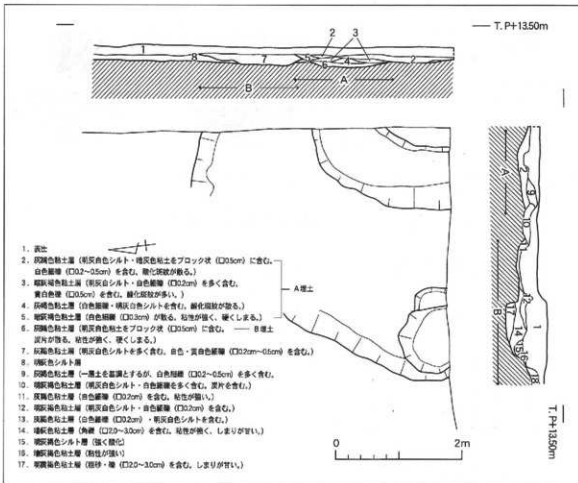
15は砥石である。両端は失われているが、よく使用されていたようで両面は弓状に反っている。

出土遺物の様相から遺構の年代を12世紀後半頃と比定する。

(瀬川)

溝(第18・19図、PL. 10)

調査区南東隅において検出された遺構であるが、現代の擾乱によって大きく破壊されているため、正確な遺構の形態については明らかではない。しかし、東壁セクションや部分的に依存していた弧状の底面の状況から、南北方向に平行して伸びる2条の溝が東にほぼ直角に屈曲するものと推定される。この2条に



第18図 溝平面図・断面図 (1/60)

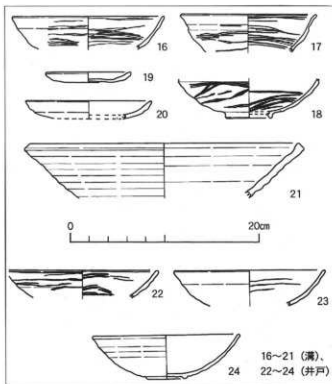
ついで、弧状に立ち上がりかけた底面が東壁および南壁下で一段落ち込むことから判断したが、断面観察では切り合い関係が明確でなく、「掘り直し」等によるものの可能性もある。遺構被覆土は白色細礫を含む灰褐色粘土層である。(家塚)

遺物は須恵器・土師器・瓦器を多く含む。16~18は和泉型の瓦器椀である。内外面に粗いヘラミガキを施し、器面には成形時の指頭圧痕が残って凹凸が著しい。18は外面のミガキが高台付近まで及んでいる。II-2期⁽³⁾。19は口径8.8cm、器高1.1cmの土師器小皿である。淡黄灰色を呈し、精良な胎土である。20は口径13.2cm、器高1.9cmを測る土師器皿である。口縁は強いヨコナデにより外方へ開く。灰黄色を呈し、雲母・砂粒を含む精良な胎土である。

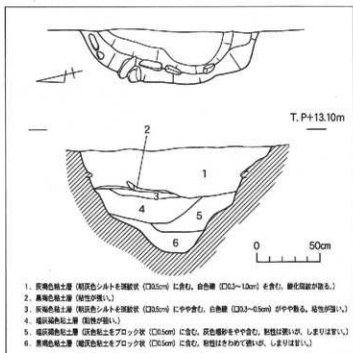
21は東播系須恵器の片口鉢である。口径28.4cmを測り、口縁部は肥厚して上方に拡張する。内面はロクロ成形の後、下から上にナデ調整を加えている。12世紀中葉頃の所産であろう。(瀬川)井戸(第19・20図, PL, 10・13)

調査区東壁下において、平面形が円形と思われる掘り込みの一部が検出されている。検出された部分で深さが約80cmあり、覆土下層には滞水性の暗灰褐色・黒褐色粘土層が堆積していたことから、井戸と考えられる。なお、井戸枠等の施設は確認されていない。(家塚)

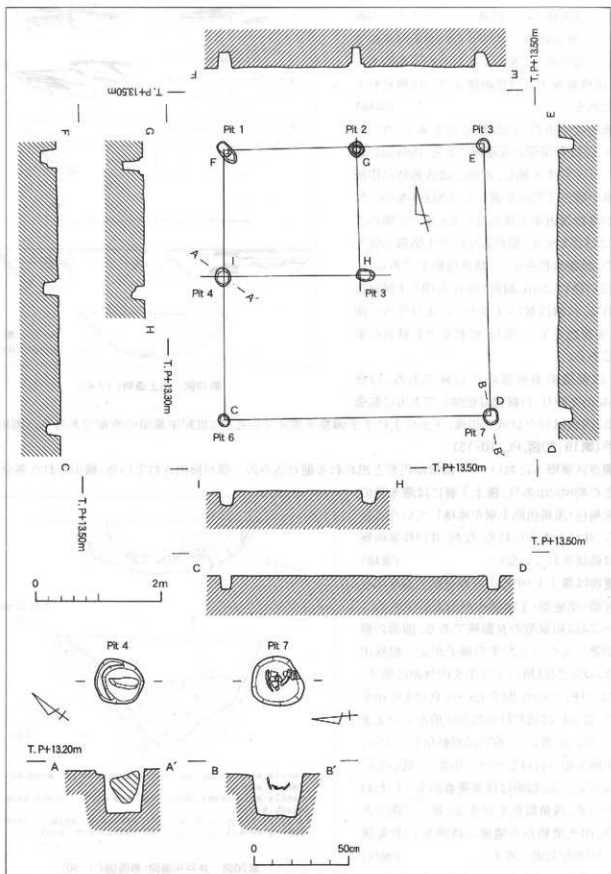
遺物は覆土上・中層の灰褐色粘土層を中心に瓦器・須恵器・土師器片が出土している。22~24は和泉型の瓦器椀である。器面の磨耗が著しくヘラミガキの様子がよく観察出来ないが、22は粗いミガキを内外面に施す。24は口径15.3cm、器高4.6cm、底径4.3cmを測る。器面には成形時の指頭圧痕がそのまま残り、凹凸が著しい。高台は形骸化しており、粘土紐を張り付けただけの小さく、低いものとなっている。器面は炭素吸着が全く行われておらず、浅黄橙色を呈する。III-2期⁽³⁾であろう。出土遺物から遺構の時期を12世紀後半~13世紀初頭と考える。(瀬川)



第19図 出土遺物(1/4)



第20図 井戸平面図・断面図(1/30)



第21圖 擬立柱建物1平面圖・断面圖(1/60·1/20)

掘立柱建物1(第21・22図, PL, 11・13)

調査区中央において検出された掘立柱建物跡である。調査当初は2間×3間の建物と考えていたが、南辺の2柱穴については、柱穴列の並びや掘り方の深さ等から隣接する集石遺構の礎敷き下より検出された掘立柱建物2のものである可能性が高い。

なお、本建物を2間×2間とした場合、南辺と東辺の中間の柱穴が欠ける。その場合の梁・桁行は、東西が4.3～4.4m、南北が4.3mである。柱穴内には明灰褐色シルトが堆積し、約20cm大の円礫や瓦器椀が伏せたような状態で出土している。
(家塚)

遺物としては土師器・瓦器・東播系須恵器が出土している。

27～29は土師器小皿である。口径7.4～8.2cm、器高1.2～1.5cm。黄灰色を呈し、胎土は精良。

25は口径10.8cm、器高1.5cmを測る土師器皿である。器形は小皿に似る。黄灰色を呈し、胎土は精良である。

30は瓦器小皿である。口径9.0cm、器高1.9cmを測る。口縁は強くヨコナデすることで外反気味に薄く仕上がりが、端部は尖り気味におさめる。器面の状態が悪いが、内面周縁から見込みにかけて不定方向のヘラミガキを施す。内面見込みはジグザグ状に施されていたものか。

31～33は和泉型の瓦器椀である。

31は口径15.0cmを測る。外面上方

に粗いヘラミガキを施す。内面は圏線状にヘラミガキしているが、見込みには平行線状ミガキを施こしていたと思われる。外面は成形時の指頭圧痕がよく目立つ。32は口径15.9cm、器高5.9cm、底径4.5cmを測る。外面のヘラミガキには僅かに分割性が残っているようだが、大変粗い。また、成形時の指頭圧痕がそのまま残っており、表面の凹凸が著しい。内面のヘラミガキも粗く、ミガキ間の隙間が広い。見込みは周縁から続く圏線状ミガキを施すようであるが、僅かに平行線状ミガキが観察できる。

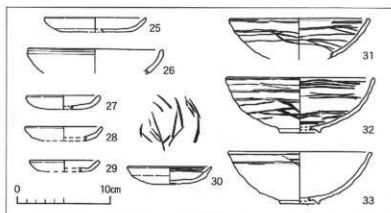
33は口径15.2cm、器高5.6cm、底径4.4cmを測る。器面の磨耗が著しく、外面口縁部にヘラミガキが残るだけである。32と同様の特徴を持つものと思われる。Ⅱ-3期か、遺構の時期を出土遺物から12世紀中葉頃(瀬川)

掘立柱建物2(第23図, PL, 11)

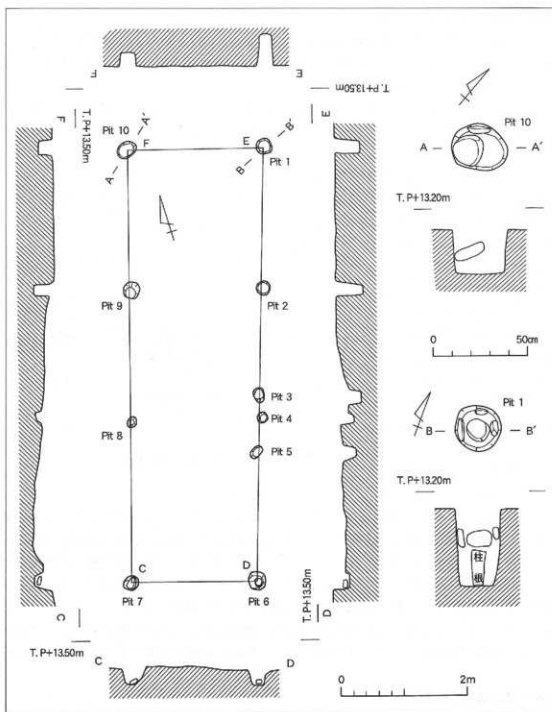
調査区南側において検出された掘立柱建物跡で、掘立柱建物1に隣接する。調査区内で確認できたのは1間×3間であるが、さらに南に伸びる可能性はある。主軸方向は、基本的には掘立柱建物1と同じくするが、やや東にずれる。梁行が2.0～2.15m、桁行が6.8～6.85mである。柱穴内には明灰褐色シルトが堆積する。

集石遺構と重複し、礎敷き下から柱穴が検出されていることから、本建物跡が掘立柱建物1に先行するものと判断された。

遺物としては土師器皿・瓦器椀・東播系須恵器・灰釉陶器などが少量出土しているが、何れも細片であり図化出来るものはなかった。遺構の前後関係から、この遺構の時期を12世紀前半頃と考える。



第22図 出土遺物(1/4)



第23図 掘立柱建物2 平面図・断面図 (1/60・1/20)

まとめ

今回検出された掘立柱建物跡・井戸・溝については、遺構覆土・出土遺物の様相から同時期のものと考えられ、遺構配置から見て同時存在の可能性が高い。これに対して集石遺構については、掘立柱建物2を切ると判断できる。しかし出土遺物はほかの遺構群のものとは差異が認められず、また集石遺構の主軸方位は掘立柱建物跡と同じで、互いに相関関係のある配置が見て取れる。従って、集石遺構も掘立柱建物跡・井戸・溝とは大きな時間差が認められないと考えられる。

本調査区の南西約50mの地点において第4次調査が行われており、今回調査された遺構群とほぼ同時期の柱穴、土坑、溝、集石遺構等がかなり高い密度で検出されている。これを今回の調査成果と比較すると、

遺構群の構成は共通するものの、遺構密度に差異が認められる。これは、本調査区の東に南北に伸びる谷状の地形が入ると推定される事(※)と関連があると考えられ、本調査区が遺構分布域の縁辺部に当たるものと考えられる。礫の詰まった集石遺構は平成8年度の第6次調査地点においても検出されており、こうした類例資料の増加によって、遺構の性格が明らかになるものとする。

(※)山田神社と当調査区との間に、南北に帯状に低い水田が残されている。周辺宅地の盛土を考慮に入れてもこの間はやや低いと考えられた。さらにこの低い場所で当時水道工事が行われており、その掘削状況をみると、黒い粘土層が深く出ており、伊丹礫層が見られなかったことによる。(家塚)

註1 尾上 実 1983「南河内の瓦器概観」『藤澤一夫先生古希記念古文化』。
森島康雄 1992「畿内産瓦器碗の並行関係と暦年代」『大和の中世土器』Ⅱ。

註2 横田賢次郎・森田 勉 1978「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』4。

註3～5は註1に同じ

<参考文献>

中世土器研究会 1995『概説 中世の土器・陶磁器』。

第5節 山田遺跡第6次調査

所在地 伊丹市山田4丁目7番21号
調査面積 275㎡
調査期間 平成8年5月13日～6月14日
調査担当 中山 浩彦(埼玉県)
白根 義久(千葉市)

調査概要

当概地において阪神・淡路大震災の復興に伴う共同住宅建設が計画された。この地点は周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲内にあたるため伊丹市教育委員会が確認調査を行った結果、中世の遺構、遺物などが検出されたため全面調査を実施することになった。それにより、伊丹市教育委員会と兵庫県教育委員会が協議を行い、兵庫県埋蔵文化財調査事務所復興調査班の職員が調査を担当することになった。

遺跡概要

山田遺跡は、武庫川左岸の伊丹台地上に位置する奈良・平安時代～中世にかけての集落跡である。本遺跡は、今回の調査までに5次の確認・全面調査が行われている。今回の第6次の調査は、遺跡の北西端に当たる箇所について行った。

武庫川左岸の周辺の遺跡には、伊丹市寺本猪名野神社境内遺跡(1、平安～鎌倉)、昆陽寺境内遺跡(2、奈良～平安)、寺本遺跡(3、奈良～平安)、昆陽黒田遺跡(4、奈良～平安)、山田有掘遺跡(5、弥生～奈良)、堀池遺跡(6、古墳～平安)、昆陽林田遺跡(7、奈良・平安)、尼崎市宮ノ北遺跡(8、弥生～古墳)、上カンド遺跡(9、古墳)、三良田遺跡(10、古墳)、北裏遺跡(11、弥生～奈良)、猫山古墳(12、古墳か?)、長ノ手遺跡(13、鎌倉)などが挙げられる。



第24図 山田遺跡第6次調査区位置図(1/5,000)



第25図 周辺の遺跡(1/25,000)

調査成果(第26図)

調査では、中世の集石遺構1、溝6条、土坑20基、ピット64基を検出した。土坑、ピットの中には奈良～平安時代まで遡る可能性のある遺構が幾つかあるが、出土遺物が少量であるため時期は断定できない。

集石遺構は、第5次調査の同様の遺構と比較すると、石の検出状況はやや乱雑な感じを受ける。遺物は、8～10世紀の須恵器甕、灰釉陶器と12～14世紀の瓦器椀、東播系須恵器、中国製の白磁、青磁などが出土しており、時期幅がかなり認められる。

溝は、溝4の1条を除いて全て走行方向は南北であった。溝1・溝3は、道路跡の側溝の可能性が考えられる。

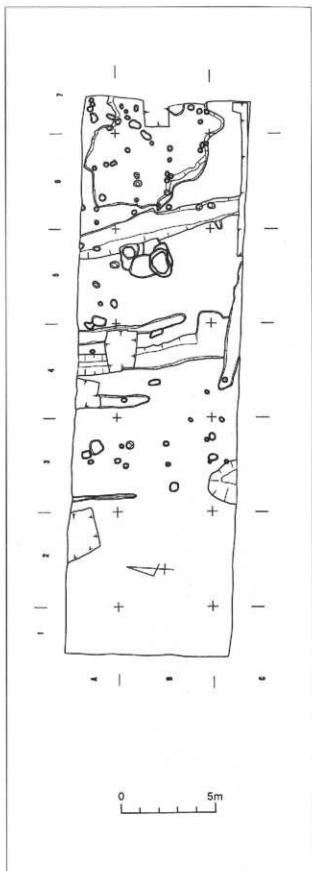
土坑・ピットは、調査区の西側にやや集中する傾向が認められる。底面に円礫を伴うものが数多く検出されたが、掘立柱建物跡になる遺構は確認できなかった。

調査区の西端では、自然の落ち込みになり、遺構は全く検出できなかった。トレンチを入れたが出土遺物は全く無かった。自然流路と考えられ、13～14世紀までには埋没したと思われる。このことから、本遺跡の西限の一部を確認できたことになる。

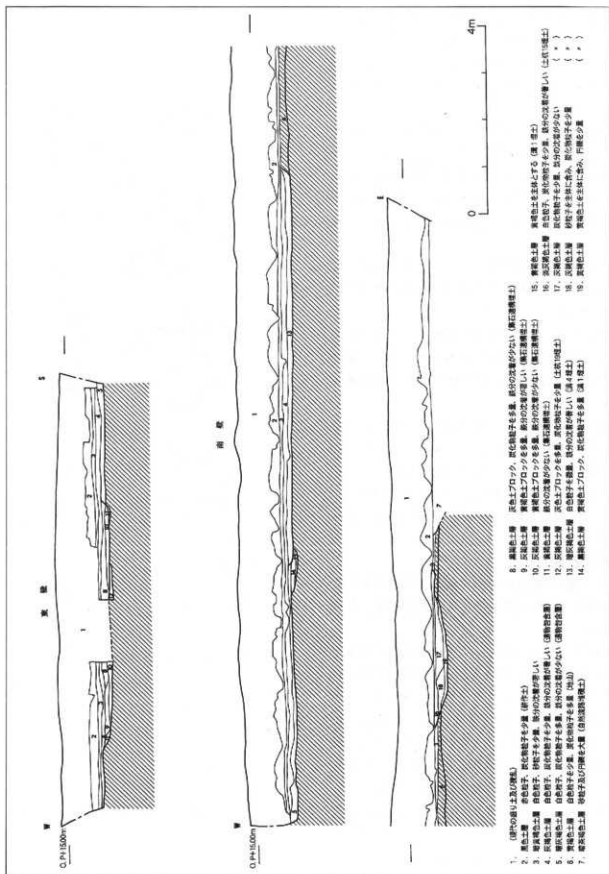
層序(第27図)

基本土層は、調査区の東壁面で良好に観察できた。西壁と北壁は、攪乱等により遺存状態が良好ではなかった。

1層は、現代の盛り土。2層は、現代の耕作土で、畝の状態が良く観察できる。3層は、耕作土の影響で鉄分が多量に沈殿した層である。4・5層は、中世の遺物包含層である。5層には少量の瓦器椀、須恵器などを含んでいた。6層が、地山の黄褐色粘質土層である。遺構確認面はこの1面のみであった。7層が自然流路の堆積土である。8～19層は、集石遺構、溝1・4、土坑15の埋土である。(中山)



第26図 平面図(1/200)



第27図 土層断面図(1/80)

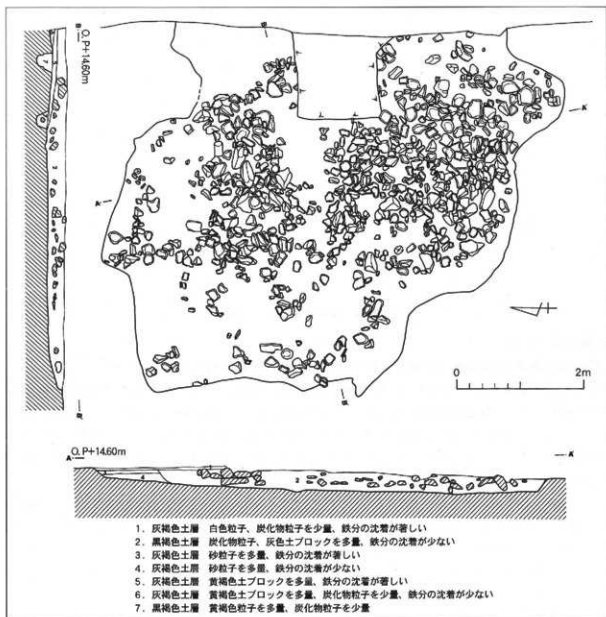
遺構と遺物

集石遺構(第28・29図、PL.14・15)

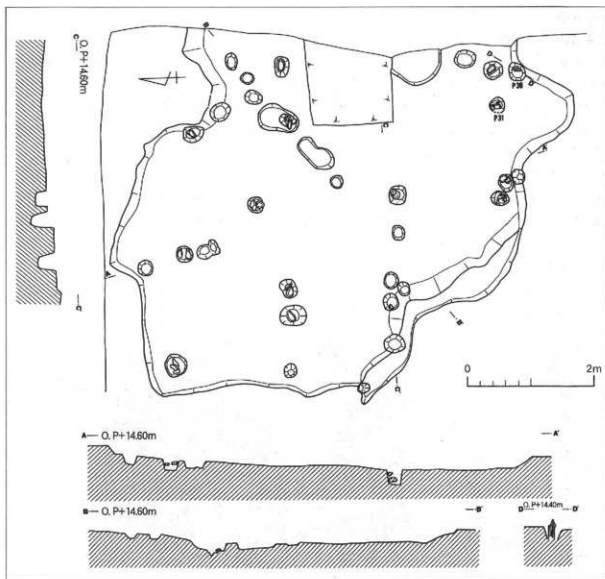
調査区東端のA～C-6～7グリッドで検出され、一部が前建築物の基礎で壊されている。東側の一部は調査区外に及んでおり、全体を調査することはできなかった。把握できた規模は、最大幅が南北6.56m、東西5.65m、深さは0.12～0.46mを測った。形状は不整形であり、南西部にテラス状の段をもっていた。集石は、5～30cm大の河原石(安山岩)が殆どであり、密にみられるが、石敷きというよりは石の面が凸凹であり、敷いたというよりは投棄されたものと考えられる。

また、石、埋土を除去したところ、掘り方の底面は、ほぼ平らで北から南に向かって緩やかに傾斜しており、底面からは多数のピットが検出された。土層断面で集石遺構との新旧関係を確認できたP59では、集石遺構よりピットの方が古いことが確認された。石が敷かれたものとは考えられないことから、底面で検出されたピットは集石遺構形成以前のものと考えられる。P30・31からは柱材が検出されたが、その性格については不明である。

(白根)



第28図 集石遺構(1)(1/60)



第29図 集石遺構(2)(1/60)

遺物(第30図、PL.16)

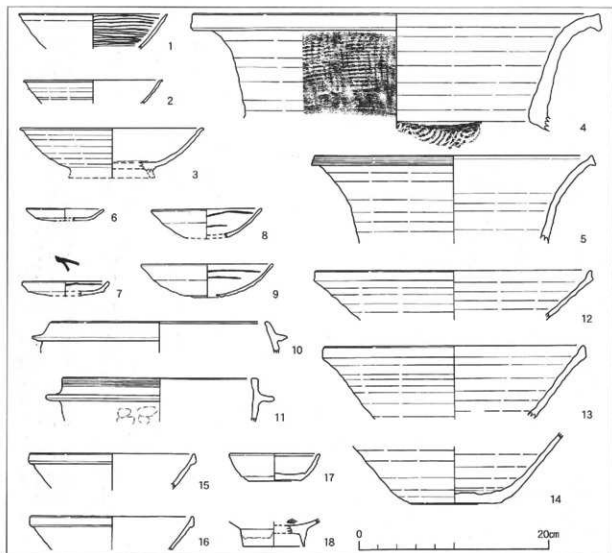
須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・土師器・瓦器・瓦質土器・中国製磁器等が出土している。

1は黒色土器A類碗である。口径15.8cmを測り、内面には丁寧なヘラミガキを施す。外面は器面の磨耗のため不明瞭である。2・3は灰釉陶器碗である。2は口径15.4cm、3は口径19.2cm測り、口縁口唇部を外側に擠みだしている。内面から外面口縁部にかけて灰緑色が珪質の釉が掛かる。4・5は須恵器甕である。4は口径42.8cmを測る大型品である。外反する長い口頸部を有し、口縁端部は上下に拡張する。頸部外面は格子目タタキを施し、内面は丁寧にロクロナデされる。体部内面には同心円タタキが残っている。5は口径29.2cmを測り、内外面共に丁寧にロクロナデされる。長い口頸部は上位で更に大きく広がる。口縁端部は上下に肥厚し、凹線が巡る。内面下位に黒色の自然釉が見られる。IV-2段階にあたる。^(G11)6・7は瓦器小皿である。6は口径8.2cm、器高1.3cmを測る。ナデ調整するが、ヘラミガキは不明瞭である。7は口径9.0cm、器高1.5cmを測る。内面周縁と見込みにはジグザグ状のヘラミガキを施す。6に比べて底部と口縁の境ははっきりしており、口縁は短く立ちあがる。

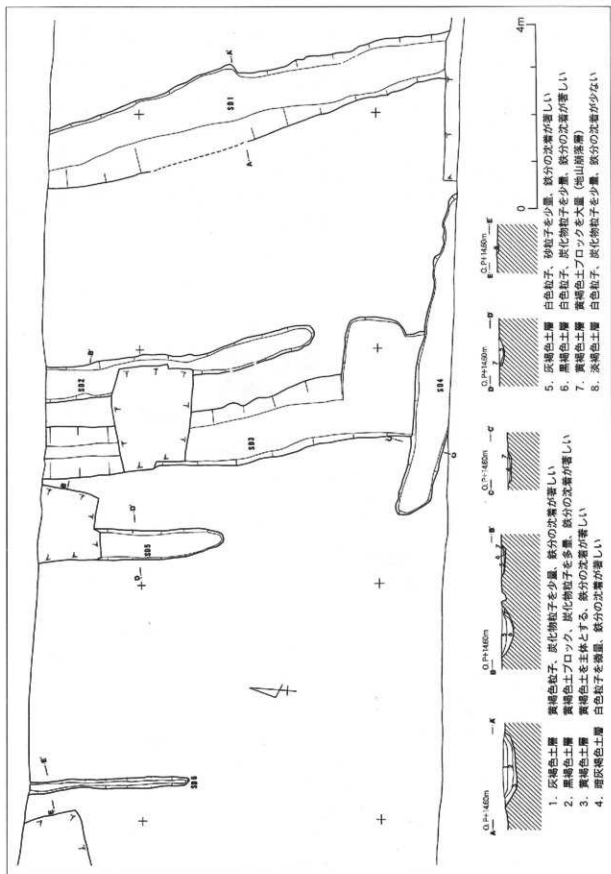
8・9は和泉型の瓦器碗である。8は口径11.6cm、器高3.0cmを測る。高台を伴わない丸底の碗形を呈すると思われ、内面に数条の螺旋状ミガキが巡る。IV-3期にあたる。9は口径13.9cm、器高3.5cmを測る。外

面は指頭圧痕による凹凸が目立ち、形骸化した高台を持つ。内面に数条の螺旋状ミガキを施す。^(R3) IV-2期にあたる。

10・11は瓦質の羽釜である。10は口径22.6cmを測り、内傾する口縁部に幅の狭い鋳が付く。内面は刷毛目調整する。黄白色を呈するが、炭素吸着の悪い瓦質三足であると思われる。11は口径20.4cmを測り、口縁は短く直立し凹線状の段を持つ。12～14は東播系須恵器の片口鉢である。12は口径29.0cmを測り、口縁端部は上方に拡張する。器壁はかなり薄い。13は口径27.2cmを測る。口縁は肥厚して立ち上がる。共に口縁端部外面に黒灰色の自然釉が掛かる。12世紀後半から13世紀初頭のものであろう。15・16は白磁碗^(R4) IV類である。釉は黄味がかった白色を呈し、胎土は黒色微粒を含んで粗い。17は白磁皿^(R5) X-2類である。口径9.4cm、器高2.9cm、底径5.6cmを測る。青味を帯びた白色釉が厚めに掛かり、外面体部下位から底部にかけては施釉されていない。灰白色の粗い胎土である。18は白磁碗^(R5) V-4・b類である。内面に櫛描文を入れている。釉色は黄色味を帯びた白色を呈す。出土物にはかなり時期幅がみられるが、量的に多く見られるのは12世紀後半から13世紀末にかけての土器・陶磁器類である。^(瀬川)



第30図 出土遺物(1/4)



第31圖 溝(1/80)

溝1(第31図、PL,15)

A・B-5・6、C-6グリッドにかけて検出された。土坑4・5・16を切っており、調査区外に延びていた。幅0.96~1.50m、深さが0.07~0.27mであった。走行方向は南-北で、溝2・3・5・6に並行していた。遺物は、瓦器碗、土師器皿などが多量に出土した。(中山)

遺物(第32図、PL,16・17)

19~21は土師器皿である。19は口径12.0cm、器高2.2cmを測る。口縁端部内面に暗文が見られる。20は口径19.2cm、高さ2.5cmを測る。器面の磨耗の為、暗文の様子は不明瞭である。

22・23は土師器杯である。22は口径12.6cm、器高3.0cm。体部中位にヨコナデによる稜ができる。23は口径17.8cm、器高3.3cmを測る。体部下位に凹線が巡る。口縁部は内湾気味に立ち上がり、端部は丸くおさめめる。茶褐色を呈し、胎土は長石・石英など砂粒を含んで粗い。底部外面に墨書が見られるが、意味は不明である。

24~27は土師器碗である。24は口径14.8cm。丸底の杯であろうか。26は口径16.2cm、器高3.1cm、底径7.6cmを測り、浅い碗形を呈する。体部は直線的に開いて、口縁端部は先細りに終わる。黄褐色を呈し、長石・石英・砂粒を含んだ胎土は粗い。27は口径16.0cm、器高4.6cm、底径8.0cmを測る。体部は外反気味に開いて立ち上がり、口縁部は更に外反して終わる。浅黄褐色を呈し、胎土は粗い。28は土師器甕である。口唇部外面に煤の付着が見られる。浅黄褐色を呈し、粗い胎土である。29は口径31.4cmの土師器盤である。内面中位と口唇部に沈線状の段が巡る。内面調整は刷毛状工具によりナデあるいは刷毛目が施される。浅黄褐色を呈し、粗い胎土である。30~33は緑軸陶器である。30は口径12.2cmを測る。内外面に暗緑色の軸が掛かる。胎土は暗灰色を呈し、とても精緻で、良く焼き締まっている。31は平高台の内側に圈線状に列り込んで蛇の目高台状にしている。底部は糸切り未調整である。高台は露胎であるが、内外面に暗緑色の軸が僅かに観察できる。胎土・焼成は(30)と同様。32は平高台である。軸は殆ど残っていない。橙白色を呈し、軟質である。33は皿の輪高台である。暗緑色~黄緑色の釉で全面施釉される。胎土は灰色を呈し、精緻で硬質である。34は須恵器杯の平高台である。内面に文字らしいヘラ記号を有する。底部外面には糸切り痕が残る。胎土はにぶい赤褐色を呈し、白色粒を含み精良である。35は口径8.0cmの須恵器壺である。内湾して延びる口頸部は端部で水平に広がり、斜め上下に拡張する。36はミニチュアの灰軸陶器短頸壺である。口径2.5cm、器高4.0cm、底径2.6cmを測る。肩の張った体部に短く外反する口縁部が続く。成形時のロクロ調整は大変丁寧に成されている。内面底部と外面口縁から肩部にかけて暗緑色ガラス質の自然釉を掛ける。37は黒色土器A類碗である。内面を密にヘラミガキする。

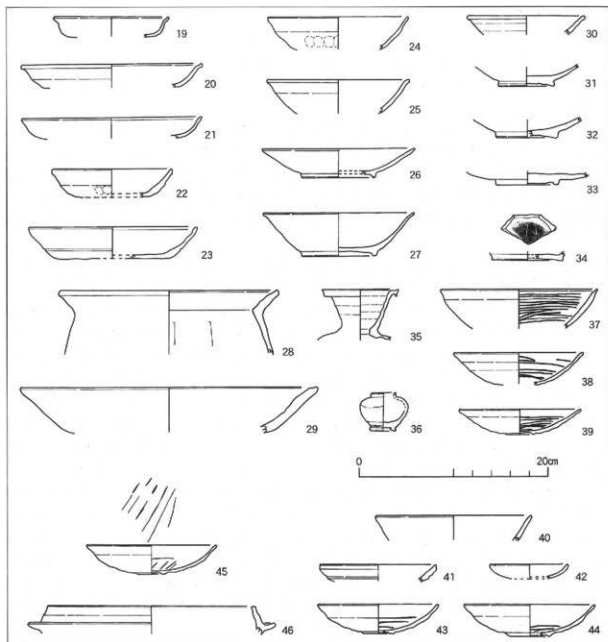
38・39は和泉型の瓦器碗である。38は口径13.6cmを測り、内面に圈線状ミガキを施す。外面口縁は2段にヨコナデする。IV-1期にあたる。39は口径12.8cm、器高2.7cmを測る。底径2.8cmの全く形骸化した高台を持つ。内面に圈線状ミガキ施され、外面は指頭圧痕による凹凸が目立つ。IV-2期にあたる。出土遺物にかなり時期幅があるが、13世紀後半には既に溝の機能を失っていたと考えられる。(瀬川)

溝2(第31図)

A-4、B-4・5グリッドにかけて検出され、土坑13を切っていた。最大幅0.74m、深さが0.04~0.13mであった。走行方向は南-北で、溝1・3に並行していた。遺物は、瓦器碗、土師器皿、東播系須恵器、須恵器片などが少量出土した。(中山)

遺物(第32図、PL,17)

40は龍泉窯系青磁碗I類⁽⁴⁰⁾である。釉は緑色を帯びた胎色を呈する。41・42は土師器皿である。41は口径12.2cmを測る。口縁は外方に開き、端部は上方に拡張しておわる。白橙色を呈し、精良な胎土である。42は小皿で口径8.2cm、器高1.5cmを測る。淡黄褐色を呈し、胎土は精良である。43・44は和泉型の瓦器碗である。43は口径12.8cm、器高3.1cm、底径3.1cmを測る。44は口径13.6cm、器高3.5cm、底径4.1cmを測る。共

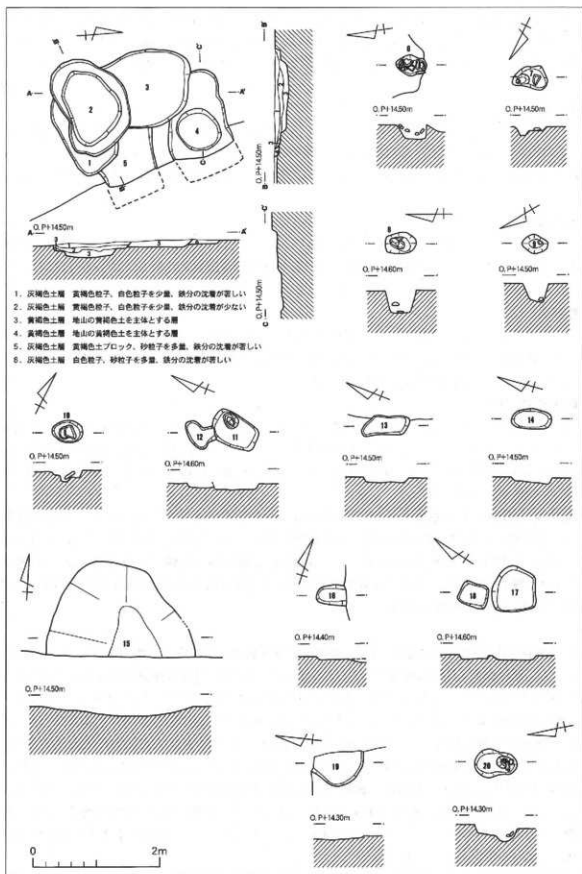


第32図 出土遺物(1/4)

に口縁部はヨコナデシ、体部外面には指頭圧痕による凹凸が残る。高台は断面三角形に小さく突出したものととなっている。内面には数条の螺旋状ミガキを施す。IV-1期にあたる。これらの遺物から遺構の年代を13世紀中頃と考える。
(瀬川)

溝3(第31図、PL.15)

A-4、B・C-4・5グリッドにかけて検出され、溝4に切られていた。幅1.03~2.55m、深さが0.04~0.26mであった。走行方向は南-北で、溝1・2に並行していた。溝1と規模・走行方向・時期が同様であることから、道路跡の側溝である可能性も考えられた。しかし、耕作により上面が削平されているためか硬化面が検出できなかったことから、道路跡としての確証は得られなかった。遺物は、瓦器碗、緑釉陶器、白磁碗片などが少量出土した。
(中山)



第33図 土坑(1/60)

遺物(第32図、PL. 17)

45は和泉型の瓦器碗である。口径13.6cm、器高3.1cmを測り、底径2.8cmの形骸化した高台を持つ、外面は成形時の指頭圧痕が目立つ。内面は器面の磨耗の為、圏線状ミガキが殆ど観察できないが、見込みには平行線状ミガキが見られる。46は和泉型の土師質の羽釜である。口径21.8cmを測る。13世紀中頃の所産であろう。(瀬川)

溝4(第31図)

C-4・5グリッドにかけて検出された。溝3を切っており、調査区外に延びていた。最大幅0.74m、深さが0.03~0.07mであった。走行方向は南東-北西で、溝4だけが他の5条の溝と走行方向が異なっていた。遺物は瓦器碗、土師器片が少量出土したが、図示できる土器は無かった。溝の時期は、中世と考えられる。

溝5(第31図)

A・B-4グリッドにかけて検出された。最大幅0.65m、深さが0.05~0.08mであった。走行方向は南-北で、溝3・6に並行していた。遺物は瓦器碗、土師器、東播系須恵器製の小片などが少量出土したが、図示できるものは無かった。溝の時期は、中世と考えられる。

溝6(第31図)

A・B-3グリッドにかけて検出された。最大幅0.21m、深さが0.02~0.04mであった。走行方向は南-北であった。遺物は全く出土しなかったため、詳細な時期は不明である。しかし、他の溝との埋土の比較、走行方向の一致などから中世であると考えられる。

土坑(第33図、PL.15)

土坑は計20基検出された。土坑1~5は複雑に切り合っており、土坑4・5は溝1に切られていた。新旧関係は古いものから土坑4・5→3→1→2の順であった。土坑6~11・20は、底面または底面から若干浮いた所に安山岩の円礫を伴う土坑である。土坑6・20以外は底面に円礫が伴うが、土層断面には柱痕が確認できず、その性格は不明である。

出土遺物は、瓦器碗片や土師器片がどの土坑も少量或いは全く出土していないために、詳細な時期を決定することは困難である。唯一時期が決定できる遺物が出土しているのは、土坑13だけである。土坑13は、B-4グリッドで検出され、溝2に切られていた。規模は、長軸78cm×短軸27cm×深さ8cmで、形態は長方形をしていた。埋土からはIV-1期^(9,13)の和泉型の瓦器碗が2点出土しており、時期は13世紀中葉である。他の土坑もほぼ同時期の可能性が高い。

ビット

ビットは調査区内に計64基が確認された。調査区のほぼ東寄りに集中する傾向がある。P15・26の2基のビットでは、土層断面で柱痕が確認できた。その他のビットでは、柱痕は確認できなかった。P15の柱痕は、径17cm、深さ6cmと小さく浅い。P26の柱痕は、径13cm、深さ17cmであった。何れのビットも深さが浅いのは、地山面が削られているためと考えられる。P26の柱痕の底面には径8cmの円礫が伴っていた。それ以外にも底面に円礫を伴うビットが数多く認められた。そのため掘立柱建物跡の可能性も考えられ、ビットそれぞれの形態や配置を検討したが、掘立柱建物跡になるものは1棟も検出できなかった。

遺物は、約半数のビットから須恵器、土師器、瓦器の破片が少量出土したが、図示できるものは1点も無かった。P11からは、須恵器蓋の破片が出土しており、平安時代の遺構である可能性が考えられる。出土遺物が皆無のため時期不明のビットが多いが、その他のビットの大半は、瓦器碗や東播系須恵器などが出土していることから、中世と考えられる。

まとめ

今回の第6次調査では調査区東端で集石遺構が検出された。集石遺構は第4・5次調査でも同様の遺構が検出されたように本遺跡で普遍的に認められる遺構と言え、周辺の遺跡では集石遺構と類似した遺構は検出されていない。今回検出された遺構を第5次調査で検出された集石遺構と比較すると、やや礫の状態が乱雑に置かれており、円礫の密度も少ない。形状も第5次のものは方形に近く、円礫は上面を平坦に揃えようとした意図的なものが見受けられるが、第6次のものは不整形の形態をとり、円礫の上面は凹凸が激しい。以上の結果から前述では、第5次調査で検出された集石遺構と今回検出された集石遺構は異質のものであると判断した。しかし、第4・5次調査の成果を踏まえた結果、今回検出された遺構が人為的に礫を敷いた可能性も捨てきれない。第4・5次調査の遺構と異なる点は、時期差と考えれば3基の遺構が同一のものである可能性も考えられる。そのことから現状では、第4・5次調査と同様に遊水池あるいは沈水池であると考えた方が妥当であると思われる。出土遺物は、9～10世紀代の黒色土器、灰軸陶器や12世紀後半～13世紀末の瓦器、須恵器、東播系須恵器、白磁などがあり時期的幅が認められる。時期は出土遺物の幅があるため断定はできないが、主体となる遺物から12世紀後半から13世紀初頭と考えられる。

溝は溝4を除き、他の5条は全て走行方向が南―北で規則性をもっていた。今回の調査では部分的にしか検出できなかったが、溝1と溝3は南北に平行して走行すること、形態の相似や、出土遺物もほぼ同一時期であることから道路跡である可能性も考えられる。もし道路跡であるとするなら、心心距離が約7mとなる。しかし、硬化面は削平されているのか調査では検出できなかったことから確証は得られず、可能性を指摘するに留めたい。

土坑・ピットには底面およびそれよりやや浮いた状態で円礫を伴う遺構が数多く検出された。数棟の独立柱建物跡の存在が予測されたが、今回の調査区内では柱穴が並ぶ建物跡は検出できなかった。隣接地において数棟の独立柱建物跡が存在することが推測される。(中山)

- 註1 中村 浩 1978「陶邑Ⅲ」『大阪府文化財調査報告第30』。
註2 尾上 実 1983「南河内の瓦器概観」『藤澤一夫先生古希記念古文化論』。
森島康雄 1992「畿内産瓦器概観の並行関係と暦年代」『大和の中世土器Ⅱ』。
註3 同上
註4 横田賢次郎・森田 勉 1978「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』4。
註5 同上
註6 同上
註7 註2に同じ
註8 註2に同じ
註9 註4に同じ
註10 註2に同じ
註11 註2に同じ

<参考文献>

- 中世土器研究会 1995『概説 中世の土器・陶磁器』。

第6節 柏木古墳第1次調査

所在地 伊丹市柏木町1丁目67-1・2

調査面積 220㎡

調査期間 平成7年8月21日～9月15日

調査担当 森 正(京都府)

柏原 正民(兵庫県)

調査概要

平成7年1月17日に発生した阪神・淡路大震災において伊丹市では、市南部を中心に大きな被害があった。駅舎全体が崩落した阪急伊丹駅をはじめ、全壊家屋1052件(平成7年3月8日現在)を数えるなど、市民生活は大きな打撃をうけた。今回の調査地も震災によって被害を受けた地域の一つであり、被災住宅の復興事業にともなって、調査を実施している。

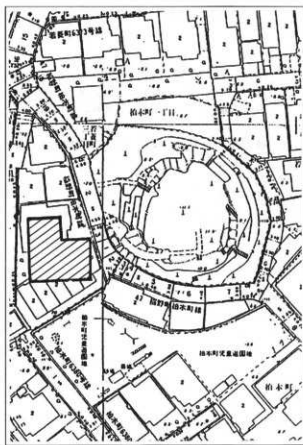
被災地における埋蔵文化財の取扱いについては地震発生当初からの大きな問題であった。復旧作業の本格化に向けて、まず最初に市民生活の復旧に直接関わる事業については、緊急性を重視して「平成7年5月末日までの期間、文化財保護法による届け出などを要しない」とする対応がなされた。一方で、長期的視野での対応が必要な復興事業については「被災地の置かれた状況に鑑み、早急な復興が急務であるとの認識を基本とし、復旧・復興事業の円滑な推進と埋蔵文化財の保護の整合を図るものとする。」という文化庁の基本方針のもと、兵庫県と災害救助法が適応された10市10町、および関係機関によって協議を重ねて、取扱いを実施することとなった。

調査を実施した柏木町は市の南部に位置し、町の中心を阪急伊丹線が貫く。周辺は尼崎市との境界が複雑に入り組み、低層住宅を中心とする住宅地である。柏木古墳は町内の南部に位置し、市街地に存在する猪名野古墳群のなかでは、その姿が視認できる数少ない存在である。

今回、古墳の南西に隣接する住宅が被災をうけて、当該地に鉄筋コンクリート造の共同住宅建築が計画されたが、従前建物とは規模・構造を大きく異にするため、地下への影響が考えられた。古墳とは市道「稲野町柏木町線」を挟んで5mの至近距離に当たるほか、古墳に隣接する地割には古墳に沿って巡る箇所があり、関連する遺構の埋没も指摘されてきた。



第34図 柏木古墳第1次調査区位置図(1/5,000)



第35図 調査区設定図(1/1,000)

この事業地において、古墳もしくは外周施設の検出される可能性を考えた伊丹市教育委員会は、平成7年7月10日に確認調査を実施した。その結果、埋蔵文化財の存在がはっきりとなり、全面調査を行うことになった。調査に際しては、伊丹市教育委員会から兵庫県教育委員会に対して、8月17日付で発掘調査支援の依頼文書が提出され、埋蔵文化財調査事務所の職員が調査を担当した。

震災復興事業における取扱いに従って、直接工事によって損壊を受ける基礎部分についてのみ掘削の対象とした。事前に現地では、関係者による調査区の設定ならびに具体的な打ち合わせが行われ、現地調査は8月21日から開始した。

まず重機によって現代の盛り土及び旧耕土と見られる土層を除去した。その後は、人力によって掘削・遺構を検出するとともに、適宜写真撮影等の記録作成を行った。掘削作業は9月7日にほぼ完了し、引き続き断面図・平面図の実測作業を順次実施、9月13日をもって現地での実質的な作業を完了した。

また、9月15日に現地説明会を開催、市民の方々に調査成果を見ていただく機会を得た。参加者は280名を数え、盛況に終わった。

遺跡概要

柏木古墳は、猪名野古墳群を構成する古墳の一つとして古くから知られている。古墳はこれまで地元の共同墓地として利用されてきた。墳丘は階段状に造成され、墓標で埋め尽くされた現状から、築造当時の様子を伺うことは困難である。ただ約6mを測る高まりだけが、古墳としての面影をとどめる。

現在は一帯が市街地と化している周辺も、近世末の景観を伝える明治13年の陸軍仮製陸地測量図では一面に出畑の広がる様子が表され、その中に古墳の墳丘が小さな山として記録されている。猪名野古墳群のうち規模の大きな古墳は、起伏の少ない平野部におけるランドマークとしての役割を十分に果たすものであり、後世の転用も顕著である。神社の境内地となった伊居太古墳・南清水古墳・御願塚古墳や、柏木古墳と同様に墓地として転用された御園古墳などは、古墳としての意識が薄れても、人々のあいだに何らかの「意味を持つ空間」として認識されつづけてきた結果といえよう。もちろん一方で、後世の開発によって消滅を余儀なくされたものも少なくはない。

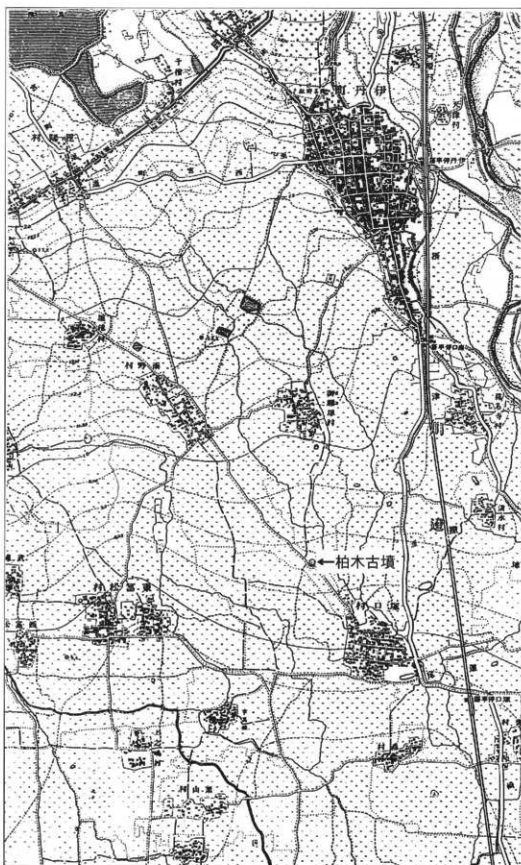
柏木町は近世の川辺郡南野村にあたり、近世の地誌に通称「三味一之辺墓所」と呼ばれ、墓地と化した柏木古墳に関する記述が認められる。

「一野辺墓所 同郡南野村にあり。行基菩薩毘盧寺建立の時、始て此の墓所を造しめて、自ら供養の処也。土俗墓所。第一とするを以て、三味一野辺と称す。此外村々郷々墓所多と云へとも、死を葬る耳。(以下略)」
※岡田侯志「摂陽群談」巻第九 塚の部 元禄14年より

上記の記述からは、江戸時代から柏木古墳が南野村の墓地として利用されていたことがわかる。また行基がその開基に関わったとする伝説も記載されているが、実際に墓地への転用がいつ頃から開始されたかについては判然としなない。

墓地として利用されてきたこの高まりを古墳として認識したのは、管見の限り戦後になってからのことである。昭和43(1968)年刊行の『伊丹市史』第4巻資料編のなかに、当時の状況を示す記述と測量図が掲載された。この段階では、墓地として大きく改変を受けており形状認識が困難な点や、遺物が未採集であったことなどから「古墳であるのかどうか確証はない」としながらも、盛り土の状況や地形の状況から古墳である可能性が高いことを指摘している。

その後、墳丘上において埴輪が採集されるに至り、古墳時代中期の古墳としての認識が確定した。しかし、内容そのものについては不明な点が多く、なおいくつかの疑問が持たれてきた。墳形に関しては円墳として認識されているが、墳丘や周辺の景観が後世の改変を著しくうけている状況から、決して確定的なものではない。墳丘規模が帆立貝式古墳である御願塚古墳の後円部とほぼ同じである指摘も含めて、前方



第36図 明治初年の柏木古墳周辺(明治18年 陸軍陸地測量部製 1/20,000仮製測量図 伊丹町)

後円墳の可能性が考えられてきた。また古墳の主体部や墳丘の外表施設、周濠などの外部施設についても、現状を観察するだけで考察するには限界があり、本格的な発掘調査を待たれる状況にあった。

今回の事業地は古墳である墓地の西部に隣接していることから、初めて柏木古墳に本格的な調査のメスを入れることとなった。

層序(第37図)

試掘調査の結果および、今回の全面調査で把握した土層は、表土(従前建物の造成・解体に起因する客土層)、旧耕作土に続いて淡茶褐色シルト質細砂・淡黄灰色シルト・暗茶褐色シルト・黄灰色シルト層の順で堆積する。最下層の黄灰色シルト層が地山(無遺物の洪積層)にあたり、上面で遺構を検出した。遺構面よりも上層の生成時期は、それぞれ手がかりとなる遺物の出土がなく、判断が困難である。

周濠の埋土は上下2層に大別でき、暗灰色シルト～シルト質細砂層に続いて灰褐色細砂混じりシルト層が堆積する。いずれも粘性が強く、局部に細～中砂のラミネーションが認められるなど、水成層の特徴を備えていた。埴輪片は上層に多く見られ、瓦質土器を中心とする中世の遺物は底部付近から出土している。周濠が中世までなんらかの形で機能していた証左といえよう。

遺構

発掘調査の結果、調査区内において周濠・不定形土坑などの遺構を、単一の遺構面で検出した。遺構面は、従前建物を撤去する際の攪乱が部分的に深く及んでいるものの、全体には大きな起伏が見られず、ほぼ平坦な状態であった。

1. 周濠(第37図、PL.18)

調査区のほぼ中央で、柏木古墳の周濠を検出した。周濠は、古墳に沿うように緩やかな弧を描き、検出面での幅は約11m、深さは最深部で40cm程度が残存していた。周濠の外縁は16.2m、内縁は4.8mである。

断面形状は逆台形である。底面がほぼ平坦で、肩部は斜め上方へと直線状にのびる。外側の肩部分では、部分的に2段に掘られている痕跡を確認した。幅0.35mの小規模な平坦面をはさみ、上下2段に別れるが、上段は明瞭に検出できた箇所でも高さ0.15mを測るにすぎない。1段として検出した部分はレベルから見て下段の肩部に対応しており、また遺構の検出面が後世の削平をかなり受けている点から考えて、本来は肩部全体が2段掘りを呈していた可能性が高い。

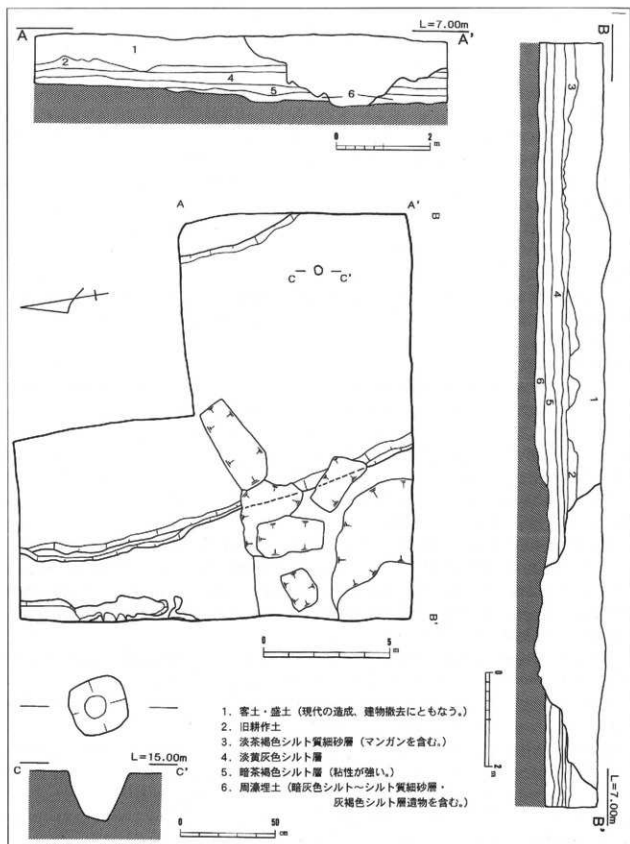
出土遺物は埴輪が大半を占め、埋土から小片化した状態で検出された。いずれも周濠の底からは遊離しており、樹立の状態や原位置を類推できる状況ではない。円筒埴輪に加えて、若干の形象埴輪が出土している。それぞれの埴輪については、次項で触れるが、全容を復元できる個体は存在しない上に、器面の摩滅・剥落が顕著にみられる。埋土は粘性で水成層の特徴を有することから、これらの器面にみられる現象も、周濠の滞水によるものと考えられる。

さらに周濠の埋土からは、埴輪と混在する形で数点の土器が出土した。時期を明確に出来るものは中世の瓦質土器にかぎられる。いずれも周濠の底部直上から検出され、埋没の下限を示すとともに、この時期まで溝状に機能していた可能性が考えられる。埴輪が溝底から遊離する一方で瓦質土器が底部付近で検出されたことから、後世に周濠内の波深などが実施されたと判断される。

周濠の内側における墳丘の遺存状況について、断面観察等も併用しながら状況把握に努めた。墳丘裾部は完全に削平されたと考えられ、詳細はつかめなかった。周濠の両肩はほぼ同一のレベルで検出され、墳丘の立ち上がりなどは遺存していない。葺石や埴輪列についても、その痕跡は把握できなかった。

注目できるものとして、ごく少数であるが周濠内で検出された人頭大の礫があげられる。これらの礫は墳丘側の周濠肩部から底部にかけて、限定的に見られた。どの時期に帰属するかは明らかに出来なかったが、墳丘から転落した葺石が、部分的に遺存した可能性も考えられる。

なお、外堤など周濠以外の外部施設は、痕跡も含めて確認できなかった。周濠の外側縁辺部はほぼ平坦



第37図 平面図・土層断面図(1/20・1/80・1/150)

に削平され、地形からは存在を判定できない。また外堤に伴う葺石・埴輪列などについても、痕跡は確認できなかった。周濠に落ち込んだ遺物の出土状況からも、類推は難しい。

2. 周濠内ピット(第37図)

周濠の北側底部において、1基のピットを検出した。調査区の北東隅から西へ2.2m・北へ3.6mの箇所に位置する。断面は直径0.32mを測る隅丸方形で、深さは0.27mである。底部にむけて少しづつ径を減じ、台形状の断面を呈する。底部は平坦であった。埋土は淡黒褐色シルト質細砂のみが堆積する。半裁して堆積状況を確認したが、内部に柱穴などの痕跡は確認できなかった。また遺物も出土していない。検出したピットはこの1基だけであり、性格を特定するまでには至らなかった。しかし周濠底部検出時に確認していることから、古墳の周濠に伴う施設と考えられる。

3. 不定形土坑(第37図)

調査区の北東において、不定形の土坑を1基検出した。土坑の北端部は調査区北西隅に接し、調査区の周壁に沿って延びる。

外形は不整形ながら直線のび、全長は5.9m・最大幅は北端から南へ1.5mでそれぞれ測る。底面は凹凸が激しく安定しない。最大深度は0.22mである。

遺構の埋土から遺物は出土せず、形態などからも遺構の性格は判断で出来なかった。

遺物

周濠を中心にコンテナケース5箱程度と、調査区の面積と比較して遺物の出土量はかなり寡少であった。周濠内からは、古墳に伴うと考えられる埴輪片のほか、土師器や瓦器などの土器類も若干出土した。遺物の中心を占める円筒埴輪は、土師質の焼成が主体であるが、わずかに須恵質のものも含まれる。一方、包含層など遺構以外からの出土遺物はほとんど見られなかった。

以下、種別ごとに出土遺物の概要を記す。

1. 円筒埴輪(第38・39図、PL19)

大半が突帯周辺のみ遺存する小破片の状態で出土した。また形態の特徴から、朝顔形埴輪の一部と見られるものもある。

1 円筒埴輪の口縁部付近とみられる破片。周濠の埋土から出土した。器壁最大厚は0.7cmと、かなり薄い。無黒斑で土師質だが、焼成は硬性。色調は外面が茶灰色、内面は茶褐色を呈する。胎土には0.2mm大の砂粒が僅かに含まれるが、全体に精良である。器面調整は内外とも横ナデによる調整と思われる。

口縁部は外方に屈曲し、端面は横ナデを施して明瞭に形作る。突帯ならびに円孔部分は遺存していなかった。

2 円筒埴輪の口縁部付近が僅かに遺存する。器壁最大厚は1.1cmである。また口縁部に沿って突帯が1条巡らされ、器壁からの高さは0.3cmを測る。

無黒斑で土師質だが、焼成は硬性で須恵質に近い。外面が淡茶褐色、内面は茶褐色をそれぞれ呈する。胎土中には0.5mm大の砂粒が少量含まれているものの、全体には精良である。突帯より下方は、右下から左上への斜めハケで調整する。また突帯から口縁については、横ナデによる調整を施す。内面は器面の剥落が著しい。口縁付近は横ナデ、体部付近は斜めハケとみられる痕跡が見られるが、調整の細部は不明瞭。端面はナデで整形を施す。

突帯の断面は、かなり偏平なM字形である。突帯幅も他の個体に比べて小さく、端面も押さえつけられたように変形し、歪曲が著しい。

3 突帯付近のみが遺存する。墳丘上で表面採集したものである。器壁最大厚は1.0cm、突帯高さは0.7cmを測る。器壁の薄さなどから、上端に近い部位と考えられる。

無黒斑だが、焼成は土師質。内外とも淡茶褐色を呈する。胎土には、0.5mm大の砂粒をまばらに含む。器

面の摩滅が著しく、器面調整は内外ともに不明。突帯に沿って、貼り付け時の横ナデが認められる。

突帯は上面を強くナデつけており、端面は下方へ傾斜する。一方下端は平坦で、基面では突帯沿いに沈線状の調整痕が認められる。断面は三角形に近い。

4 突帯付近の破片。器壁最大厚1.9cm、突帯高さ1.0cmをそれぞれ測る。無黒斑で土師質だが、硬性の良い焼成である。色調は内外ともに茶褐色で、胎土には1～2mm大の砂粒を含む。器面調整については、残存部位が突帯付近に限られるため不明。内面では突帯の裏面で指オサエの痕跡が見られるが、突帯貼り付け時に起因すると考えられる。

突帯は突出度が高い。上面に強い横ナデが加えられる事で屈曲し、爪痕が遺存する。一方下面は緩やかなナデが見られる。端面は平坦に横ナデされ、上下端は鋭く稜をなす。

5 突帯付近の破片で、周濠の埋土から出土した。器壁最大厚は1.0cm、突帯高さは0.9cmをそれぞれ測る。無黒斑で土師質、焼成は軟性である。色調は外面が淡赤褐色、内面が淡黄褐色をそれぞれ呈する。胎土には2～3mm大の砂粒が含まれる。外・内面ともに剥落が激しいが、一部器面調整は遺存する。外面は右下から左上に斜めハケの調整を施す。また内面も外面と同方向の斜めハケが見られる。

突帯の断面は、三角形に近い台形を呈する。端面は丸く、摩滅により鈍化した可能性もある。接合があまりためか、一部剥離し欠損している。突帯下面のナデも比較的弱い。

6 突帯付近にあたり、墳丘上で表面採集した。器壁最大厚は1.2cm、突帯高さは1.4cmを測る。無黒斑だが、焼成は土師質。内外とも淡茶灰色を呈する。胎土には1.0～2.0mm大の砂粒を含む。採集品のため、器面は内外ともに剥落が著しい。外面ならびに内面の器面調整は不明。内外とも赤褐色に変化する部分が認められ、塗布物の可能性が考えられる。

突帯の断面形は長方形に近い台形を呈する。幅厚で突出度も高い。器面との境界付近において、貼り付け時の粗いナデ調整が認められる。突帯端面の上下端部は摩滅して鈍化する。

7 突帯付近の破片で、周濠の埋土から出土した。器壁最大厚は0.8cm、突帯高さは0.8cmをそれぞれ測る。遺存する器壁の上部において、断面から外面にかけて黒化した部分がある。土師質でやや軟質な焼成である。内外ともに茶灰色を呈し、胎土中には2～4mm大の砂粒を含む。突帯付近のみをとどめており、器面そのものの調整は不明。内面も突帯の裏面よりやや上に縦方向の指オサエ痕が見られるほかは、調整不明。

突帯は突出度は高いものの、端面の幅は狭い。断面は台形を呈し、上面ならびに下面から器壁にかけては接合時のナデ痕跡が明瞭に遺存する。

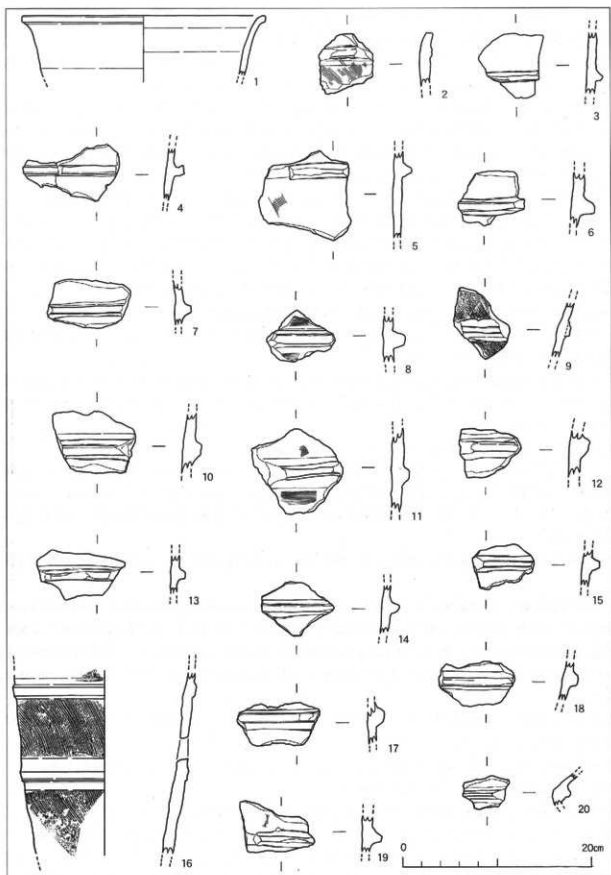
8 突帯付近の破片。周濠の埋土から出土した。器壁の最大厚は1.2cm、突帯高さは1.2cmをそれぞれ測る。無黒斑で土師質、焼成はやや軟質である。外面は暗茶褐色、内面は茶褐色を呈する。胎土は比較的精良で、0.5mm大の砂粒を含む。外面は剥落が激しいが、一部で器面調整が遺存する。突帯の上下に沿って、横方向のハケ目が認められる。内面は突帯の下側において横ナデの痕跡がある。

突帯は断面台形だが方形に近く、しっかりした印象を与える。接合時の調整痕も明瞭で、粗雑な印象を与えるものが多い中において、この個体については丁寧な印象を与える。

9 突帯付近のみが遺存する。周濠の埋土から出土した。器壁最大厚は0.8cm、突帯高さは0.5cmをそれぞれ測る。無黒斑で須恵質の硬質な焼成である。内外ともに茶褐色を呈するが、内面には黒色の付着物が認められる。胎土には0.3mm大の砂粒が僅かに含まれるが、全体に精良。外面には、右下から左上に向かって施される斜めハケ調整が明瞭に認められる。刷毛の幅は最大でも1.3cmと、あまり大きな原体は想定できない。内面は突帯の裏面を中心に、縦方向の指オサエ痕が認められる。

突帯は断面M字形で突出度は低い。貼り付け後、器面へのナデ付けは行わず、突帯の上下面には段差が残る。また器面調整への影響も少なく、無造作に貼り付けたような印象を受ける。

10 突帯付近のみが遺存する。周濠の精査中に出土。器壁最大厚は1.1cm、突帯高さは0.7cmをそれぞれ測る。



第38図 出土埴輪(1) 円筒埴輪(1/4)

る。無黒斑だが土師質で、焼成はよくない。色調は外面は茶褐色、内面は淡赤褐色をそれぞれ呈する。胎土中に、0.1~0.3mm大の砂粒が含まれる。焼成が軟性なうえ、器面の剥落が著しい。

突帯接合に伴うナデ調整以外に、器面調整はみとめられなかった。

突帯は上面がしっかり突出するものの、下面はナデつけており器壁との境界は不明瞭。端面はナデ調整が施されていると思われるが、調整痕は器面の剥落により見当たらなかった。

11 突帯付近の破片。周濠の埋土から出土した。器壁最大厚1.3cm、突帯高さは0.7cmをそれぞれ測る。無黒斑で土師質、焼成は不良でかなり軟質である。内外とも淡茶褐色、胎土中に2.0mm大の砂粒を多く含む。器面は剥落が著しいが、外面で斜め気味の横ハケの痕跡が認められる。一方内面は突帯の裏面に指オサ工痕と見られる凹みを確認したのみで、他の調整については不明。

突帯の断面形は台形だが、摩滅をうけて丸みを帯びている。器面への貼り付け調整も不明瞭。

12 突帯付近の破片である。周濠の埋土から出土した。器壁最大厚1.3cm、突帯高さは0.7cmをそれぞれ測る。無黒斑で、土師質、焼成は極めて軟質で、器壁の荒れが目立つ。色調は内外とも赤褐色を呈する。胎土には最大4mm大の砂粒が含まれている。残存部位が限定されているため、外面の器壁における調整は不明。内面は突帯の下部に横方向のナデ調整が見られるが、これも突帯接合時に起因する調整痕であろう。

突帯は断面が台形で、上下とも接合時の横ナデ調整が明瞭に遺存している。

13 突帯付近の破片。周濠の埋土から出土した。器壁最大厚は0.8cm、突帯高さは0.8cmをそれぞれ測る。器壁、突帯ともに華奢な印象を与える。

無黒斑で土師質焼成だが、焼成はきわめて軟質である。内外ともに茶褐色を呈する。胎土は0.5mm大の砂粒を少量含むものの、精良である。内面で指オサ工調整が認められるが、外面は器壁の摩滅により調整痕はみとめられなかった。

突帯部分は大半が剥がれ落ち、一部が遺存しているに過ぎない。

14 突帯付近のみが遺存する。器壁最大厚は1.0cm、突帯高さは1.0cmをそれぞれ測る。無黒斑の土師質で、焼成はかなり軟質で器面の状態は悪い。内外ともに淡茶褐色を呈する。胎土中には0.5mm~1.0mm大の砂粒が含まれている。遺存部位が突帯付近に限られている上に、器面の剥落・摩滅が著しいため、内外とも調整は不明。

突帯は断面が台形で、上面が上にせり出す。突帯付近における接合時の横ナデ調整は僅かながら遺存する。

15 突帯付近の破片で、周濠埋土からの出土である。器壁最大厚は0.9cm、突帯高さは0.8cmをそれぞれ測る。無黒斑で土師質、焼成はやや軟性である。外面は一部茶褐色気味の箇所のみみられるが、全体には茶褐色を、内面は淡黒褐色を呈する。胎土には5mm大の比較的大きな砂粒を部分的に含む。突帯付近の極めてかぎられた範囲のみが遺存するため、全体の器面調整は不明。内面は突帯裏面の下部で指オサ工の痕跡が認められる。

突帯は突出度が高く、断面は精美的な台形である。しかし、器壁同様に薄い印象を受ける。突帯端面は横ナデによって整形、平坦化する。

16 円筒埴輪の体部、突帯2段分が遺存する。今回出土した埴輪の中ではもっとも規模が大きいの。器壁最大厚は1.4cm、突帯高さは0.4cmを測る。

無黒斑の須恵質で、硬質の良好な焼成である。色調は外面が淡茶褐色、内面が淡青褐色をそれぞれ呈する。胎土には0.5mm大の砂粒が僅かに含まれる程度で、精良である。器面調整は内外とも良好に遺存する。外面は右下から左上への斜めハケ調整を施した後、突帯を貼り付ける。さらに突帯下面を横ナデ調整を施し、部分的には器壁に押し付けるような強いナデを施す。内面は縦方向の指オサ工痕が顕著に認められる。下段の突帯より下については、途中から内外ともに器面調整痕が消滅し、板状の工具による押圧痕が

認められる。外面ではハケ調整が消滅している事から、上部と同じ調整の後に押圧を加えた状況が看守できる。また内面も対応する範囲において長方形の押圧痕がある。

突帯は断面台形であるが、偏平で突出度は低い。上下面に施された強い横ナデのためであろう。端面は同方向の横ナデが施される。円孔については断面に一部が遺存するが、全容について明らかにできなかった。

17 突帯付近の破片である。墳丘上で表面採集した。器壁最大厚は0.9cm、突帯高さは0.8cmを測る。無黒斑だが、焼成は土師質。内外とも淡茶灰色を呈する。胎土は精良だが、0.5mm大の砂粒を少量含む。器面は、内外ともに剥落が著しい。内面は突帯の裏面下側で横ナデ痕跡が認められるが、貼り付け時の局所的な調整の可能性がある。他の内面ならびに外面については調整不明。

突帯は断面台形で、底辺が広く分厚い印象を受ける。上面ならびに下面には貼り付け時に起因する粗いナデ調整が認められる。端面はわずかに横ナデ調整が認められるが、大半が剥落している。

18 円筒埴輪の突帯付近の破片。器壁最大厚は0.9cm、突帯高さは0.8cmをそれぞれ測る。無黒斑で土師質。焼成は不良で軟性のため、全体に摩滅が著しい。色調は内外とも淡赤褐色、胎土中には2mm大の砂粒が多く含まれる。器面の剝離・摩滅が顕著で、調整痕はほとんど遺存していない。

突帯はもともと台形の断面と思われるが、端部が激しく摩滅している。突出度は比較的高い。

19 突帯付近の破片。周濠の底部を検出中に出土した。器壁最大厚は1.2cm、突帯高さは1.0cmをそれぞれ測る。無黒斑だが、焼成は土師質でやや軟性。色調は内外ともに茶褐色を呈する。胎土には1.0~2.0mm大の砂粒を含む。特に外面は器壁の剥落が著しく、明瞭な調整痕は遺存していない。部分的に横ハケと見られる砂粒の動きがあるが、遺存状況はよくない。内面は突帯の裏面を中心に、縦方向の指オサエ痕が認められる。

突帯は断面台形で、突出度は高いが、華奢な印象を受ける。特に上面において顕著な横ナデが認められる。

20 円筒埴輪の突帯付近の破片。器壁が突帯を境にして屈曲していることから、朝顔形埴輪の頸部と考えられる。器壁の最大厚は口縁部側で0.7cm、突帯部分の高さは0.5cmをそれぞれ測る。無黒斑で土師質、焼成は悪く極めて軟質。外面は淡茶褐色、内面は茶褐色を呈する。胎土は0.5mm大の砂粒を少量含むものの、精良である。突帯付近が僅かに遺存する程度のため、外面の調整は不明。内面は屈曲の外側で横ナデ調整がみられる。

突帯の上下は接合時に起因する横ナデ痕が見られる。端面はナデにより比較的平坦に作られる。

21 底部付近のみが遺存する。周濠内埋土中より出土した。底部の復元径は12.6cm、器壁最大厚は1.2cmを測る。無黒斑で土師質焼成だが、比較的硬質である。色調は外面が茶褐色、内面が淡茶褐色をそれぞれ呈する。胎土中には0.2~0.3mmの砂粒が含まれる。

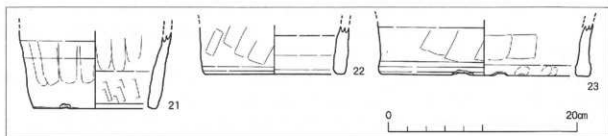
内外ともに器面調整の痕跡は明瞭ではないが、底部付近において顕著な押圧痕がある。本来の器面調整が、板ナデなど底部付近の押圧調整で失われた可能性が考えられる。内面では底部付近は工具による押圧、体部付近は縦方向の指オサエ痕がある。

底部の接地面は比較的平坦に形作られている。

22 底部付近のみが遺存する。底部の復元径は14.6cmと比較的小さいが、器壁の最大厚は1.5cmを測り厚手の印象を受ける。無黒斑の土師質であるが、焼成は比較的良好。外面は淡黒褐色、内面は赤褐色を呈する。胎土には2~3mm大の砂粒が多く含まれる。遺存部位が限られるため、全体の器面調整についてはわからない。底部付近の調整は、内外とも良好に遺存する。外面は右斜め上方向へ方形の押圧痕が見られる。内面も同様の押圧痕跡が見られ、端部付近は肥厚する。底部接地面は平坦で、遺存する砂粒の動きから、端面上を工具等で平滑に調整したと考えられる。

23 円筒部の底部付近のみが遺存する。周濠の埋土から出土した。底部の復元径は21.6cm、器壁最大厚は1.6cmを測る。無黒斑で土師質、焼成はかなり軟性でもろい。色調は淡黄褐色、胎土には2.0~5.0mm大の砂粒を含む。

底部のみが遺存するため、体部以上の器面調整は不明。底部付近は内外とも強い押圧が施され、端部は肥厚する。外面は斜め方向、内面は横方向に、板状工具による押圧が施され、端部の内面については肥厚した部分を指オサエで調整する。底部の接地面はナデを施して平坦に形作る。



第39図 出土埴輪(2) 円筒埴輪(1/4)

2. 形象埴輪(第40図、PL.20)

家・盾・蓋などが出土した。いずれも一部が遺存しただけで、全容の判る個体は出土していない。

24 盾形埴輪における、円筒部と盾部の接合部分付近の破片。両者の接合部には、指オサエによる接合痕跡が明瞭に残る。

焼成は軟性で土師質、断面の黒化部分が部分的に表面に及ぶ。器面の摩滅および剥離が著しく、細部の調整は不明瞭。盾面の表面には盾の文様を表現した線刻が遺存する。綾杉文と平行の沈線による界線と、それに直行する形の平行線が認められる。調整痕と同様、線刻も消滅しかかっているが、綾杉文の右半分だけは著しく深く刻まれており、刺突に近い印象を受ける。

器壁最大厚は、接合部分で2.7cmを測る。周濠の埋土から出土した。

25 周濠の埋土から出土した。表面に線刻が施され、直弧文状の文様が認められる。ただ部分的な遺存である上に、器面の摩滅が著しいことから、観察を加えるには限界がある。裏面に線刻は認められない。

外周部では方形コーナー状の部分が遺存する。断面は板状であるが、遺存する端部の一辺は、裏面に欠損した突帯の基部があり、外円に沿って裏面へ屈曲していたと考えられる。板状の外形や表面の線刻から、盾形埴輪の盾部にあたる可能性が考えられるが、遺存が部分的なため詳細については不明な点が多い。

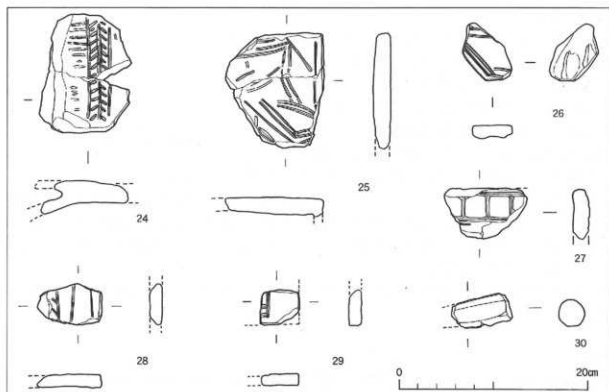
26 蓋形埴輪の十字立ち飾り部と見られる。遺存する端面は鈍角に屈曲する2辺で、線刻の特徴などから、鱗部の内面先端付近の破片と考えられる。周濠の埋土から出土した。表面には線刻が認められ、遺存する端面に沿って平行に2条、また欠損部分にも2条の線刻が施される。裏面には線刻が認められないが、端面側ではV字状の削り込みが認められ、波上の浮彫りが施される。

表面は摩滅が著しく、線刻はかなり消滅している。無黒斑で土師質焼成。

27 蓋形埴輪の笠部分にあたる破片。周濠の埋土から出土した。一辺だけ端部が遺存しており、短部に平行する形で、表面に格子文が線刻されている。焼成は土師質でかなりもろく、断面の黒化部分が表面に及んでいる個所がある。器面の摩滅および剥離が著しく、内外ともに調整は不明瞭である。器壁最大厚は1.7cmを測る。

28 盾形埴輪の鱗部分と見られる破片。周濠の埋土から出土した。一部で端面が遺存する。断面形は板状で、ほぼ平坦。

表面には端面と平行方向に3条の線刻が認められる。端面に最も近い条線は端面と平行に刻まれ、中央



第40図 出土埴輪(3) 形象埴輪(1/4)

のものはわずかに端面と反対方向へ延びる。もっとも外側の条線はわずかに端面方向へ延び、支線が平行に2本刻まれる。焼成はかなりもろく、表面は部分的に剥落が認められる。

端部付近がナデによってわずかに肥厚する以外は、板状の断面形を呈する。最大厚は端面付近で1.3cmを測る。

29 盾形埴輪の鱗部分と見られる。周濠の埋土から出土した。裏面に欠損した突帯の基部があり、隅部分に該当する破片で、端面は直交する2辺がわずかに遺存する。断面形は板状で平坦。

表面には端面に沿って直行する3条の線刻を認めた。端面に沿って延びると考えられるが、いずれの面も大半は欠損しており、全容については分からない。

焼成は軟性、土師質で黒斑は見られなかった。

30 家形埴輪における、簋木の部分。周濠の埋土から出土した。端面付近で最大径3.2cmを測り、円錐状に少しづつ径を減じる。断面は正円形に近い。片側が欠損するため全体の形状は不明だが、欠損部分付近で再び径を増し、対象形を成すと思われる。遺存部分の残存長は6.5cm。

下腹部には、ヘラ状工具による平坦面ならびに溝状の窪みが認められ、屋根との接合部を形作る。他は全体に手ツクネで整形され、内部に芯などの痕跡は確認できない。

無黒斑であるが、焼成はかなり軟らかい。

3. 土器類(第41図)

図化できた2点は中世の瓦質土器である。土師器とみられる破片がごく少数出土しているものの、遺存状態は悪く、実測不可能の小片が大半を占める。いずれも周濠底部を検出中に出土した。

31 瓦質の三足釜の脚部にあたる。先端付近のみが遺存、上部の状況についてはわからない。円柱の粘土棒をヘラ状工具で削りながら整形するが、摩擦が進んでおり、削り痕の稜線は丸みを帯びる。最大径は割れ口部分で、1.9cmを測る。先端に行くに連れて徐々に径を減じる。破片の全長は6.5cmである。焼成はやや軟質で、表面の炭素は剥落が顕著。色調は淡黒褐色で、剥落した地の部分は灰褐色を呈する。胎土には1～

3mm大の砂粒が見られる。

器形の大半を欠損しており、時期の比定については困難である。周濠底部で瓦器椀と近接した箇所から出土したが、両者の関連についても判然としなない。

32 瓦器椀の一部で、底部外面の高台付近のみが遺存する。全体の形態ならびに体部の器面調整については不明。硬質の良好な焼成を呈する。内外ともに暗青灰色を呈する。胎土には0.5mm大の砂粒が僅かに含まれるものの、精良であった。

高台は断面が平行四辺形で、外方へとしっかりふんばる。復元径は6.3cm、外面での高さは0.7cmを測り、比較的足高である。高台付近の外面には貼り付けの強い回転ナデが施される。また内面も貼り付けに伴うナデはあるものの、底部はヘラ切り痕を明瞭にとどめる。また底部の内面は平滑だが、遺存している範囲においては暗文等は認められない。

限定的な出土状況で、所産・時期の比定には限界がある。高台の形態から、13世紀前半の所産と考えておきたい。

まとめ

今回の調査では、これまで不明な点の多かった柏木古墳の実態を知るいくつかの手がかりを得ることが出来た。以下、調査の結果得られた成果について簡単にまとめておく。

(1) 遺構 墓地として遺存する柏木古墳の、西隣接部を調査した。その結果、古墳に伴う周濠の存在が明らかとなった。周辺が完全に市街化した当古墳について、外部施設の存在はこれまでに知られておらず、古墳の内容や規模に関しても再検討を迫る材料を提供した。検出した周濠は、幅約11mの緩やかな円弧を描く。調査区内では完全な円弧であり、全円を復元した直径は内法で約55mとなる。これまで直径38mと推定されてきたが、一回り大きな規模をもつことが明らかとなった。

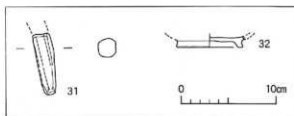
墳丘については、基底部付近が、完全に削平を受けているため状況については明らかにできなかった。周濠内に落ち込んだ遺物から埴輪列・葦石が外表施設として想定されるが、遺存状況が断片的であり存在を指摘するとどめておきたい。なお、周濠以外の外部施設も確認できなかったが、調査区全体が削平を受けている状況では、存在が完全に否定されたわけではない。

(2) 遺物 周濠内部からは、墳丘に樹立していたとみられる埴輪が出土した。ただ出土状況は悪く、完全に器形を復元できた個体はなかった。

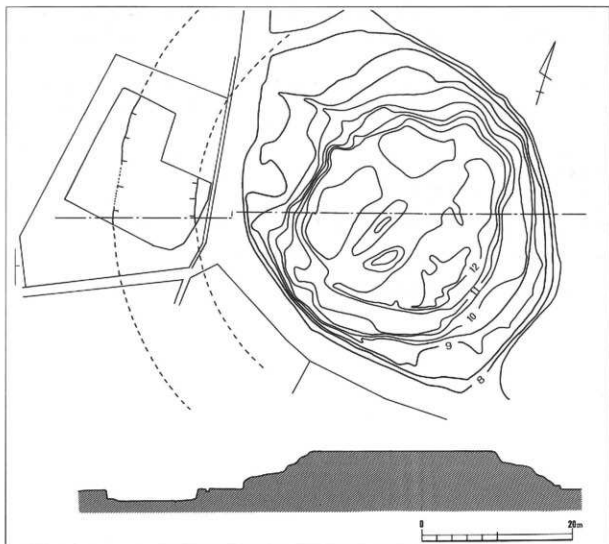
出土した埴輪の焼成を見ると、土師質で軟性なものが大半を占め、須恵質の硬質な物も3点出土している。土師質の個体は器面の摩滅・剥落が顕著なうえ、突帯付近のみ遺存する破片が多いため、細部の調整については不明な点が多く残った。焼成については非常に軟弱なうえ、断面の黒化が器面に及ぶ破片が存在するなど、比較的古い要素を保持していると思われる。突帯の突出度は高く、断面は台形もしくは上面がせり出す形態のものが多い。

細部の調整が不明瞭なため厳密な時期比定は困難であるが、焼成や突帯の状況から、中期前半の所産と位置づけておきたい。ただし器壁は平均1.5～1.8cmとかなり薄く、本来の規模はかなり小さいものであった可能性がある。柏木古墳の埴輪が有する特徴として、今後の検証を待ちたい。

一方わずかに出土した須恵質の埴輪は、外部調整や器形の特徴などから6世紀の所産と考えられ、両者の時代的な開きは大きい。周濠は底部付近にまで中世の遺物が混入し、後世の攪拌が考えられることから、混入の可能性がある。出土点数からも当古墳に用いられた埴輪の中心とは考えにくく、むしろ近隣に新しい時期の古墳が存在することを示唆するのかもしれない。



第41図 出土土器(1/4)



第42図 柏木古墳周濠復元図(1/500『伊丹市史』資料編1第4巻 伊丹市(1968)所収図と合成)

柏木古墳は内容に不明な点が多く、これまで古墳としての位置づけが未確定な状態にあった。今回の調査では、周濠の存在や出土埴輪から、直径約55mの規模を持つ5世紀中葉の古墳であることが明らかとなった。

このことから、北方50mにある御願塚古墳よりも先行し、また墳丘規模も御願塚古墳の後円部を上回る。猪名野古墳群の中心を占める古墳の一つとして、位置づける事が可能であろう。

猪名川を挟んで対峙する豊中市桜塚古墳群では、中心をなす大型古墳について、古墳時代中期の豊中大塚古墳のみが円墳で、他は前方後円墳の系譜が形成される。残念ながら今回の調査では墳形を決定付けることはできなかったが、仮に柏木古墳が円墳とすれば、猪名野古墳群においても同様の現象が看取できる。5世紀前～中葉の猪名川流域に点在する首長墓群に共通した変異が認められる点は、その背景に共通した政治的現象の表出が考えられ、当地周辺の古墳時代における政治的動向を考える上で興味深い。とくに猪名野古墳群では、これまで前・中期古墳の実態については該当するデータが少なく、検討を深化させる上で制約があった。柏木古墳の規模や内容がある程度具体的になったことで、古墳群のもつ特質についても多角的な検討を進める必要がある。

平成7年1月17日。起こったのは一瞬の出来事でありながら、その影響はあまりにも大きかった。年月をいくら重ねようと、人々の心に刻まれた傷は簡単に癒されるものではない。

しかし事実を受け入れつつ、明日への希望と生活を取り戻す努力も、この3年間積み重ねられてきた。復興への足跡は、また一方で市街地に眠っていた遺跡を呼び起こし、地下からの新しい情報が蓄積されている。

この柏木古墳周辺でも、従来知られる事のなかった古墳が新たにその存在を現わしている。戦前の早い段階で市街化が進み、従来不明な点が多かった猪名野古墳群の新たなイメージを再構築する必要がある、近い将来われわれに与えられた課題となるであろう。

(柏原)

<参考文献>

伊丹市 1968『伊丹市史』資料編1第4巻

森岡秀人・田中晋作 1990「摂津の円墳」『古代学研究』123号

芦屋市立美術博物館 1993『特別展 古墳と伝承—移りゆく“塚”へのまなざし—』

伊丹市教育委員会 1995『伊丹の文化財』

第7節 御願塚古墳第6次調査

所在地 伊丹市御願塚4丁目348-5
調査面積 75㎡
調査期間 平成7年12月1日～12月13日
調査担当 小長谷正治 細川佳子
調査の概要

今回の調査は、阪神・淡路大震災の個人被災者自らが使用する住宅の再建に伴う発掘調査であるため、国庫補助事業とし、建物の基礎により壊される部分を対象に全面調査を実施した。

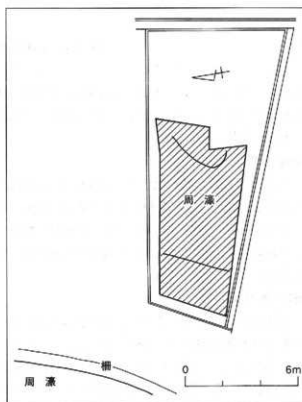
遺跡の概要

御願塚古墳は、伊丹市南郊に位置し、尼崎市城北半から広がる古墳時代中期に形成された猪名野古墳群の1基である。御願塚古墳は西側に短い前方部をもつ帆立貝式の前方後円墳である。墳丘の規模は、全長52m、後円部径39m、後円部高さ7m、前方部長13m、前方部幅19m、前方部高さ2mを測る。墳丘の周囲には幅7～11m、深さ1m程度の馬蹄形の周濠が巡っている。

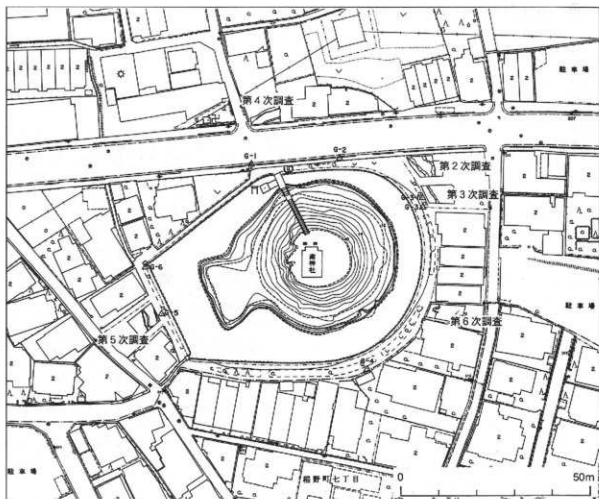
御願塚古墳は、墳丘・周濠ともに残る中期の帆立貝式の前方後円墳として、昭和41年に兵庫県の史跡指定を受けた。昭和44年には周濠復元を目的として実施した環境整備事業に伴い、周濠の規模を確認するために周濠の外側に沿ってトレンチが入れられた。これが第1次調査(昭和44年8月25日～昭和45年3月31日)で、その結果、外堤部に埴輪が樹立されていた可能性があることがわかった。第2次調査(昭和62年12月14日～同年12月26日)は古墳の東側の外堤部の調査で幅3.5～4mの二重目の周濠を発見したが、この地点のみでは周濠と断定できなかった。第3次調査(平成4年1月20日～同年1月25日)は第2次調査地点の南隣に位置し、幅5.7mの周濠を発見した。第4次調査(平成4年12月11日～同年12月16日)は古墳の北側で、周濠の底が二段に落ちる構造であることがわかった。また、第5次調査(平成5年4月22日～同年4月29日)は古墳の西側で、周濠の幅は3.4～3.8mで第4次調査と同じように周濠の底が二段に落ちる構造であることがわかった。これまでの第2次～第5次調査で二重目の周濠が古墳の東から北・西側を巡ることがわかり、二重周濠であること



第43図 御願塚古墳第6次調査区位置図(1/5,000)



第44図 調査区設定図(1/200)



第45図 御願塚古墳現況平面図(1/1,000)

がわかった。また、どの地点でも埴輪は周濠の内側から多く出土した。このことから外堤部に埴輪列の存在が考えられる。しかし、これまでの調査では周濠や外堤部の調査にとどまっていた、墳丘の調査は全くされていない。

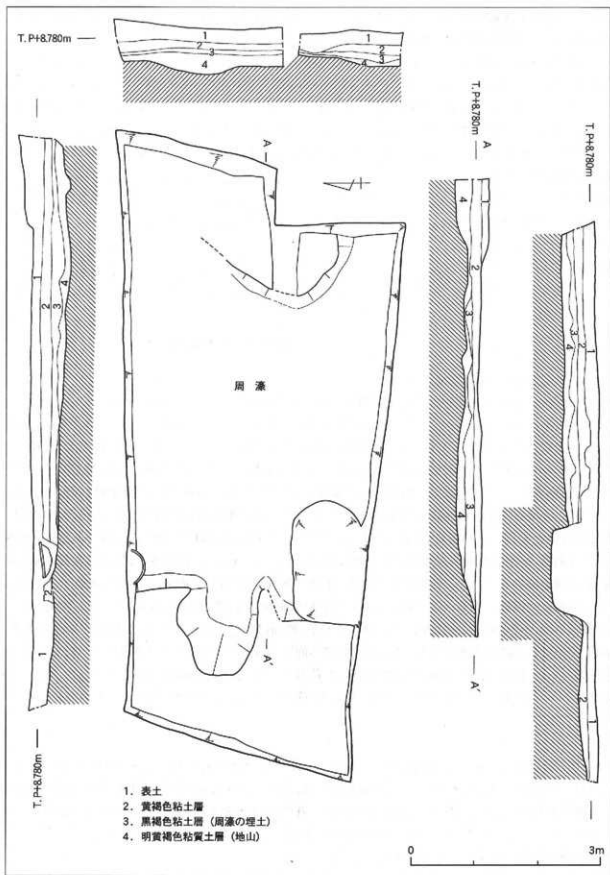
調査成果

今回の調査した場所は古墳の東側の後円部側にあたり、二重目の周濠が巡ることは第2次・第3次調査でも確認したが、この南側にあたるため、周濠の推定地を中心に調査区を設定した。

重機によって調査区西側より表土掘削を始めた。埴輪の破片を含む黒褐色粘土層を確認した段階から人力掘削に切り替えた。最初に周濠の内側を確認した。しかし、外側の立上りを検出できず、東側に調査区を拡張した。

層序(第46図)

当調査地点は宅地であり、調査以前は木造2階建ての建物が建っていた。建物の基礎によって地面の下はあまり影響は受けていなかった。しかし、表土から地山までの深さが周濠のないところで25~35cmで浅く、壊されている部分もあった。表土(1)は調査区の西端と東端で25~35cm、中央で18~22cmの厚さで堆積している。その下の黄褐色粘土層(2)が10~18cm堆積している。さらにその下に周濠の埋土の黒褐色粘土層(3)を経て、10cm大の礫を多く含む明黄褐色粘質土層の地山に達する。



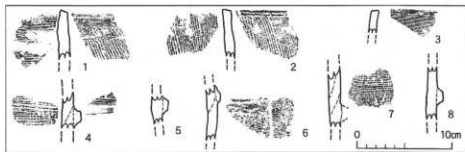
第46図 平面図・土層断面図(1/60)

遺構(第46図、PL. 21a)

検出した遺構は周濠のみである。幅は狭いところで5.4m、深さは最深部で30cmを測る。周濠の外側の立上りのラインは、調査区中央部で狭くなり、北側と南側で広がり、不整形をしているため、周濠の幅が一定しない。二重目の周濠の内側のラインから、一重目の周濠の外側のラインまでの距離は7.2~7.4mを測る。この距離は第2次・第3次調査とほぼ同様である。内側の周濠の立上りはやや急な感じで、外側の立上りはなだらからで、立上りの終わりはあまり明確ではない。外側のラインが一定しないことは、第2次・第3次調査の結果をみてもわかる。周濠の幅は、第2次調査では3.5~4mで、第3次調査では5.7mであった。内側のラインは古墳に沿って弧を描いているように延びているのに対し外側のラインは入り組んでいる。(細川)

遺物(第47図、PL. 21b)

周濠内からは少量の埴輪片が出土したが、他の遺物は全く出土していない。埴輪の出土状況を見てみると、埴輪側から比較的多く出土し、外側にいくにつれ少なくなる。こうした傾向は、これまでに実施した



第47図 出土埴輪(1/4)

他地点での二重目の周濠の調査でも認められる。

1は口縁部。口縁端部は僅かに外側に傾斜する。調整は外面がタテハケの後に口縁部のみヨコナデを施している。内面は粗いヨコハケの後、口縁部のみヨコナデを施している。焼成は良好。色調は外面がにぶい橙色、内面が橙色を呈するが、断面をみると内面は灰色の須恵質となっている。2は口縁部。口縁端部は平坦であるが、やや外側に傾斜する。調整は内外面ともにタテハケであるが、外面は口縁端部下5mmほどにヨコナデが施されている。色調は内外面ともに橙色を呈しているが、断面をみると内面は灰色の須恵質となっている。3は口縁部。口縁端部は平坦な造りとなっている。調整は外面がヨコハケ、内面がナデである。色調は内外面ともににぶい橙色、断面は灰色を呈している。焼成は良好で、胎土は堅緻な須恵質の埴輪である。4は胴部。突帯は断面が台形を呈す。調整は内外面ともにヨコハケが施され、外面は突帯を貼り付けた後、その周辺部のみヨコナデが行われている。色調は外面が浅黄橙色、内面は橙色で、断面は灰色を呈している。須恵質の埴輪である。5は胴部。突帯の断面は台形を呈す。突帯の周辺部はヨコナデが施されている。色調は外面が浅黄橙色、内面がにぶい橙色を呈し、断面は灰色となっている。須恵質の埴輪である。6は胴部。突帯は低い断面台形を呈している。調整は外面はヨコハケ、内面はナデ調整が行われている。色調は内外面ともに浅黄橙色。7は胴部。突帯は剥がれ落ちている。調整は外面が明瞭なヨコハケ、突帯の周辺部はヨコナデ、内面はナデが行われている。色調は内外面ともににぶい黄褐色を呈している。

まとめ

昭和62年に実施した第2次調査において、初めて二重目の周濠が発見され、以来今回の発掘調査まで5カ所において外側の周濠を確認している。調査地点は、第2・3・6次調査が古墳東側、第4次調査が北側、第5次調査が西側であり、これまでの調査成果から、外側の周濠は前方部側から古墳の北側を回り後円部側へ延びていることがわかってきた。外側周濠の形状は、内側の周濠と同様に馬蹄形を呈しており、おそらく未調査の南側へも巡っていると推定される。

現在、外堤部には個人住宅が建ち並んでいる。住宅の建て替えが発生すれば、今回の発掘調査のように周濠の位置を確認していく必要がある。

第8節 南野古墳第1次調査

所在地 伊丹市安堂寺町6丁目地内

調査面積 36㎡

調査期間 平成8年5月31日～6月6日

調査担当 小長谷正治 細川佳子

調査概要

今回の調査は、土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査として実施した。土地区画整理事業は震災復旧・復興事業に該当する。事業地内で幅6mで南北25mと、幅6mで東西70mの新しい道路をつける工事に先立って、平成8年5月29日に試掘調査を行った。試掘調査では幅2m、長さ3mのトレンチを5箇所設定した。南北道路の南端にトレンチを設定し、その北側の東西道路の西側から東側へ一直線上に17mの間隔でトレンチを4箇所、合計5箇所のトレンチを設定した。最も東側のトレンチで表土を除去したところ、西端で暗褐色粘土の埋土をした浅い落ち込みを検出した。この落ち込みから須恵質や土師質の埴輪片が出土した。このことからこの落ち込みが古墳の周濠になる可能性が考えられ、範囲を広げて発掘調査を実施することにした。

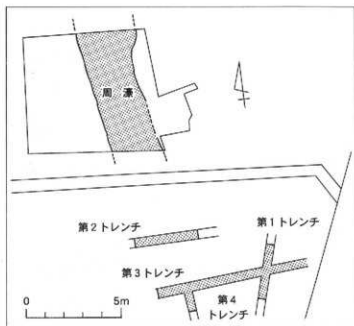
この調査地点は土地区画整理事業地内にあり、この地区の北側を東西に走る一般県道富松・御願線と調査地点との距離は90mを測る。調査地点は東西道路予定地の東端である。調査区の南北の長さは道路幅の6mとし、東西は試掘調査の結果、東端のトレンチの西端で古墳の周濠になる可能性のある落ち込みを検出したため、調査区をトレンチの西側に拡張し、東西の長さを6mとした。検出した遺構は南北方向に延びる周濠で、中からは土師質や須恵質の埴輪片が多量に出土した。

遺跡の概要

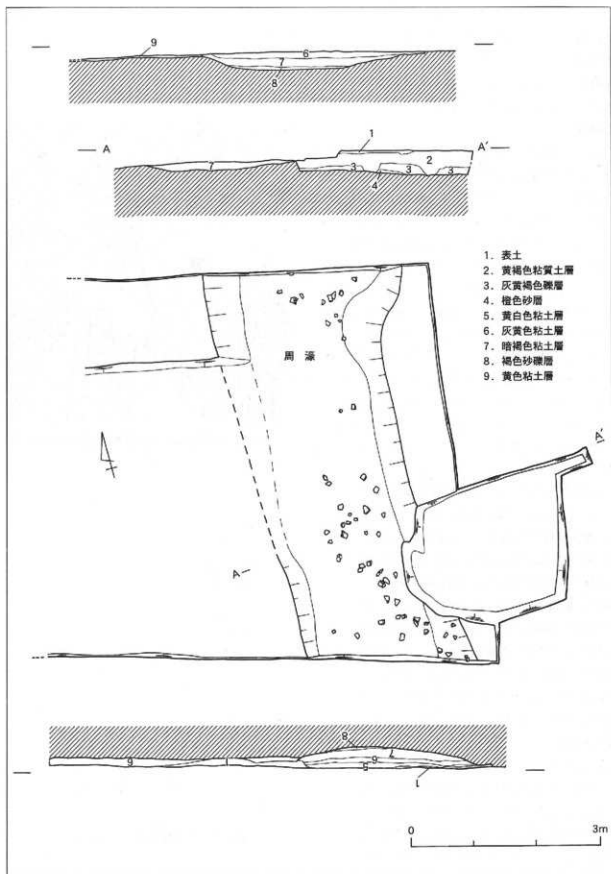
南野遺跡は伊丹市城南郊に位置する。遺跡の西側と南側は尼崎市との市境に近い。遺跡の範囲は東西350m、南北220mに及ぶ。このあたりの標高は9～10mを測り、伊丹台地の南端にあたる。昭和61年度～63年度に実施した伊丹市内の遺跡分布調査では、古墳時代から平安時代の須恵器や土師器などの遺物が採集された。当時はこの地域には田畑が広がっていた。平成7年度から土地区画整理事業に伴い確認調査を実施したと



第48図 南野古墳第1次調査区位置図(1/5,000)



第49図 調査区設定図(1/200)



第50圖 平面圖·土層断面圖(1/60)

ころ、埴輪片や中世の遺物が出土した。当調査地点の北側へ40mの地点で、平成7年8月1日～11日に実施した南野遺跡第1次調査では、中世の溝跡が発見され、瓦器や青磁碗等の中世の遺物のほかに、古墳時代中期の埴輪が出土した。また、当調査地点より南西へ110mの地点に平塚古墳がある。平塚古墳は一辺が16mの方墳で、高さは3mである。これまでの南野遺跡の確認調査で発見された埴輪が平塚古墳に関連するものかどうかはわかっていない。今後、平成11年度まで土地区画整理事業は続けられ、また、これから宅地化が進み、共同住宅や個人住宅等の建設に伴い発掘調査を実施し、南野遺跡の全容を明らかにしていく必要がある。

調査成果

古墳の周濠の一部が検出され、周濠の中からは須恵質や土師質の埴輪片が多量に出土した。これらの埴輪は古墳時代中期のものであることがわかった。

層序(第50図)

上層は掘削され、取り除かれている。中央畔の東側をみると、表土(1)の下には、黄褐色粘土層(2)、礫を多く含む灰黄褐色粘土層(3)、橙色砂層(4)が堆積している。第2層から第4層は遺物を全く含まず、しまりがよい。南壁の土層をみると、表土の下に黄灰色粘土層(5)、灰黄色粘土層(6)が5～8cmずつ堆積し、その下に周濠の埋土になる暗褐色粘土層(7)が10～15cm、褐色砂礫層(8)が約5cmの厚さで堆積している。これらの層を経て地山に達する。周濠が確認されている部分を除いて、土層は表土の下はほとんど地山、あるいは地山に近い層と考えられる。

遺構(第50図、PL.22・23)

検出した周濠の規模は、調査区北側の周濠の幅が広がっているところで3.2m、調査区の中央部の周濠の幅が狭くなっているところで2.4m、調査区南側では2.7mを測り、周濠の幅は一定しない。深さは上面が削られているため、最深部で20cmを測る。平面形をみると西側の周濠の立ち上がりは南北にほぼ直線的に延びているが、東側の立ち上がりは調査区の北側で弧を描いているようにみえるため周濠の内側は東側で、周濠の外側は西側であると推定できる。立ち上りの状況については周濠が浅いため明確にはわからないが、西側の立ち上がりはなだらかで、東側の立ち上がりは西側に比べるとやや急な感じがする。

周濠の埋土は上層が暗褐色粘土層(7)、下層が褐色砂礫層(8)で、上層のみが検出されるところもあった。遺物の出土状況をみてみると、下層の第8層にはみられず、上層の第7層の暗褐色粘土層から多量に出土した。また、周濠の底からは遺物は出土していない。平面的にみると、遺物はすべて周濠のなかから出土した。周濠の西側よりも東側(周濠の内側)から圧倒的に多くの遺物が出土した。遺物には須恵質や土師質の埴輪に混じて、須恵器の杯等もみられる。埴輪は円筒埴輪がほとんどで、破片は須恵質のものの方が大きい。土師質の埴輪は破片が細かく割れているものも多い。

周濠の形状を確かめるために調査区の南側に幅50cmのサブトレンチを入れた。最初に南北方向のNo.1トレンチをあげた。当初、調査区寄り(北側)に周濠が検出できると想定したが検出できなかったため、このトレンチの西側、調査区の南側で東西方向のNo.2トレンチを設定した。周濠の埋土が確認でき、西側と東側の立ち上りを検出した。このことから、周濠は南側へ延びていくことがわかった。さらにNo.2トレンチの南側で東西方向のNo.3トレンチをあげてみた。周濠の西側の立ち上がりは検出できたが、No.2トレンチで検出した周濠の幅よりも東側に掘り進めていっても、東側の立ち上がりは検出できなかった。No.3トレンチをさらに東側へ延長した。最初のNo.1トレンチも南側へ延長し、周濠の埋土を検出した。ここが周濠の北側の立ち上がりで、南側に掘り進めると南側の立ち上がりも検出できた。No.3トレンチは周濠内を東に進んでいるので東側の立ち上がりは検出できないことがわかった。No.3トレンチの南側に南北方向のNo.4トレンチをあげ、周濠の南側の立ち上りを確認した。

以上のことにより、周濠は北から南へ直線的に延び、No.3トレンチとNo.4トレンチの間で東側へ折れ

て、東側へ延びていくことがわかった。サブトレンチの数が少ないので、東へ折れる箇所は直角的に折れるのか、やや弧を描くように曲がるのかはわからないが、間違いなくこの個所で急に折れることがいえる。サブトレンチで検出した周濠の幅は、東西は3.2m、南北は2.6mを測り、北側の調査区で検出した幅とほぼ同じ規模である。また、周濠の内側は調査区の東側で、周濠の外側は調査区の西側であることが考えられる。

(細川)

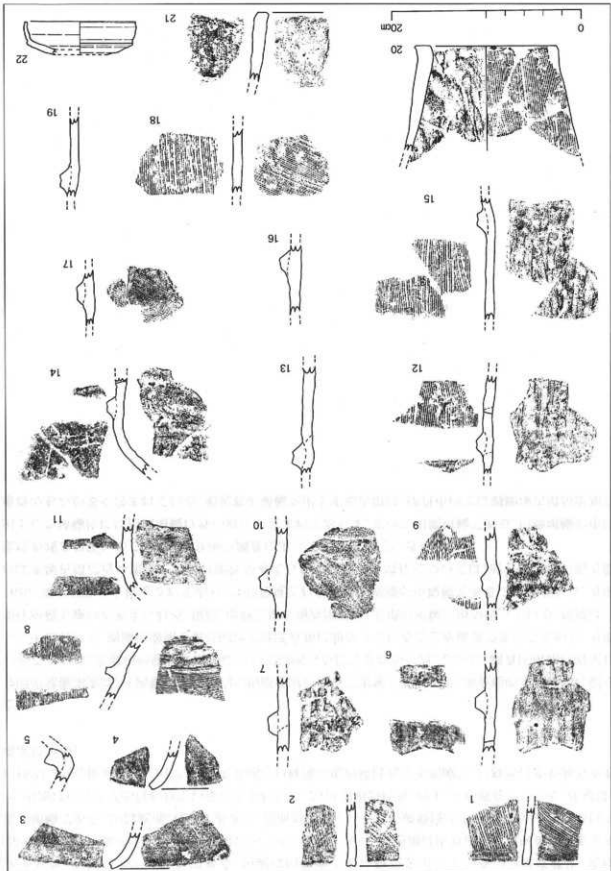
遺物(第51図、PL. 24)

遺物の大半が埴輪片であるが、中には須恵器の破片もかなり含まれていた。遺物の出土状況をみても、周濠内だけから出土し、それ以外の場所からは全く出土しなかった。周濠内部では主に東側に集中して出土する傾向が強く、埴輪などが東側から流れ込んで堆積した様子が窺われた。このことから、埴輪の元位置は周濠の東側と考えられ、こちらに墳丘が存在していたものと推定される。

埴輪片の出土数は多いが、接合関係のある破片は少ない。図示した埴輪は、各部位の特徴のあるものを中心に選んでいる。

1～4は口縁部。1と2は、口縁部がほぼ垂直に立ち上がり、口縁端部は平坦な造りとなっている。調整は、外面はタテハケが行われ、口縁端部付近のみヨコナデされている。内面はナメハケが行われている。色調は内外面ともに橙色を呈すが、それは器表面だけで内部は灰色となる。須恵質の埴輪である。3と4は朝顔型円筒埴輪の口縁部。口縁部は強く外反する。口縁端部は平坦で外方に傾斜する。調整は、外面はヘラナデを行った後口縁端部付近のみヨコナデを施している。内面はヨコナデ。5は朝顔型円筒埴輪のくびれ部と考えられる。突帯の断面は三角形を呈している。色調は外面がにぶい橙色、内面は灰色となる。須恵質の埴輪である。6は円形スカシのある胴部片。突帯は断面台形を呈す。調整は、外面が縦方向のヘラナデ、内面は粗い縦方向のヘラナデを行っている。突帯部分は突帯を貼り付けた後、上側のみヨコナデを行っている。色調は外面がにぶい橙色、内面が灰色を呈す須恵質の埴輪である。7は突帯のある胴部片。突帯の断面は台形を呈し、調整は外面が縦方向のヘラナデ、内面が粗いヘラナデを行っている。色調は外面が橙色、内面が灰色を呈している。須恵質の埴輪である。8は朝顔型円筒埴輪の口縁部。突帯の上側からやや外反気味に立ち上がる。突帯の断面は台形を成し、上面は平坦に仕上げられている。調整は外面がタテハケ、突帯の周囲のみ突帯貼り付け後ヨコナデを行っている。内面はヨコハケ。色調は外面がにぶい褐色、内面が灰色を呈している。須恵質の埴輪である。9は突帯のある胴部片。突帯の断面は台形。調整は外面がタテハケ、突帯の周辺部のみヨコナデを行っている。内面はヘラナデ。色調は外面が灰黄褐色、内面がにぶい橙色を呈す須恵質の埴輪である。10は突帯のある胴部片。突帯の断面は台形。調整は外面がヘラナデ、突帯の周辺部のみヨコナデ、内面はヘラナデを行っている。色調は、内外面ともににぶい橙色を呈す須恵質の埴輪である。11は朝顔型円筒埴輪の肩部。突帯の上部から強く内湾する。突帯の断面は台形。調整は外面が縦方向のヘラナデ、突帯の周辺部のみヨコナデ、内面はヘラナデを行っている。色調は外面が橙色、内面がにぶい褐色を呈す。須恵質の埴輪である。12は突帯のある胴部片。突帯は低く、断面は台形を成している。調整は外面がタテハケ突帯の周辺部のみヨコナデ、内面はヘラナデを行っている。色調は外面が橙色、内面が灰褐色を呈す須恵質の埴輪である。13は突帯のある胴部片。突帯は断面台形を成している。調整は内外面ともにヘラナデ、突帯の周辺部のみヨコナデを行っている。色調は内外面ともに灰褐色を呈す須恵質の埴輪である。14は朝顔型円筒埴輪の肩部。突帯の上部から強く内湾する。突帯は断面台形で、調整は内外面ともにヘラナデを行っている。色調は外面がにぶい赤褐色、内面が橙色を呈している。15は突帯のある胴部片。突帯の断面は台形。調整は外面タテハケ、突帯の周辺部のみヨコナデ、内面はヘラナデにより平滑に仕上げられている。色調は外面が灰黄褐色、内面がにぶい橙色の須恵質の埴輪である。16は突帯のある胴部片。突帯は断面台形。調整は外面ヘラナデ、突帯の周辺部のみヨコナデ、内面は丁寧なヘラナデを行っている。色調は外面明褐色、内面は橙色、断面は灰色を呈す須恵質の埴輪である。17は突帯のある胴部片。突帯

第51圖 出土陶器(1/4)



は低い断面台形。調整は内面に斜め方向のハケメが残る。色調は外面橙色、内面は灰黄色。18は胴部片。外面タテハケ、内面がナナメハケである。色調は内外面ともに橙色を呈している。19は底部片。底径は14.5cm。調整は外面タテハケ、内面は粗いヘラナデを行っている。色調は内外面ともに灰黄褐色を呈す須恵質の埴輪である。20は底部。焼成があまく、器面が荒れているため調整技法不明瞭であるが、外面はタテハケ、内面はヘラナデが行われていることがわかる。21は須恵器杯蓋。約1/4が遺存している。法量は、推定口径21.2cm、推定高6.8cmである。天井部と口縁部の境の稜は丸く不明瞭で、口縁部はやや丸みをもって端部に至る。

まとめ

今回の発掘調査は、区画整理事業地内の街路建設に伴って実施したもので、調査範囲が道路幅に限られていることから、古墳の形態及び規模については明らかにできなかった。しかし、調査区南側に設定したトレンチにおいて、周濠は南側で東に向けてほぼ直角に曲がっていることが確認できたことから、方墳の可能性が最も強いと考えられる。現在、南野古墳の南西部には、方墳の平塚古墳が残っている。規模は一辺が16m、高さが3mと推定されており、今回発見された古墳も周濠が小規模であることなどから、方墳であれば平塚古墳に近い規模である可能性が考えられる。しかし、墳丘については、前方後円墳の前方部の可能性も残されていることから、今後の調査によって明かにしていきたい。

出土した埴輪片には円筒埴輪以外の破片が含まれておらず、すべて円筒埴輪である。円筒埴輪の中には須恵質のものが多く含まれている。須恵質の埴輪を出土する古墳は、伊丹市内では御願塚古墳が知られている。

第9節 荒牧遺跡第23次調査

所在地 伊丹市荒牧字西貝ノ内20-1

調査面積 225m²

調査期間 平成7年10月3日～11月16日

調査担当 小長谷正治 細川佳子

調査概要

今回の調査は、阪神・淡路大震災により被災した社員寮の建て替え工事に先がけて、平成7年9月5日に試掘調査を行った。その結果、北側に設定したトレンチより土師器や須恵器などの遺物の破片を含む包含層を検出したため、発掘調査を実施することにした。

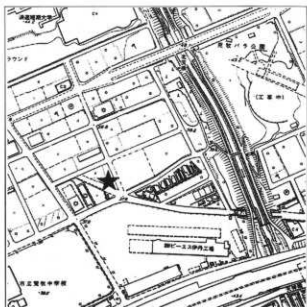
試掘調査で南側に設定したトレンチは区画整理時に大きく攪乱をうけていることがわかり、調査は不可能であるため、敷地の北側に東西15m、南北15mの調査区を設定した。

なお、この埋蔵文化財発掘の届出者である株式会社ピーエスが大企業にあたるので、震災復旧・復興事業ではあるが、発掘調査の費用は全額株式会社ピーエスが負担した。

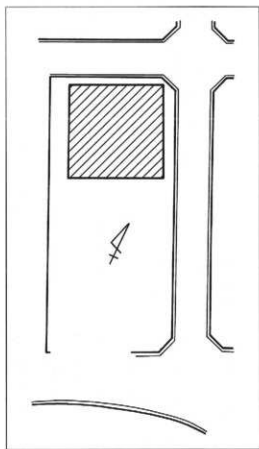
遺跡の概要

荒牧遺跡は、伊丹市域の最も北側に位置し、地形的には伊丹台地の最奥部にあたる。天神川の兩岸にまたがり、東西900m、南北400mの範囲となっている。標高は35～40mを測り、伊丹市内では最も高いところである。これまでの調査により、弥生時代後期と奈良時代から平安時代の二時期の集落跡であることが確認されている。弥生時代後期の遺跡は、天神川の西側にある。奈良時代から平安時代の遺跡は天神川の兩岸にわたっている。また、伊丹市史によると、荒牧は古代の摂津国の牧(為奈野牧)の名を残していたといわれる。

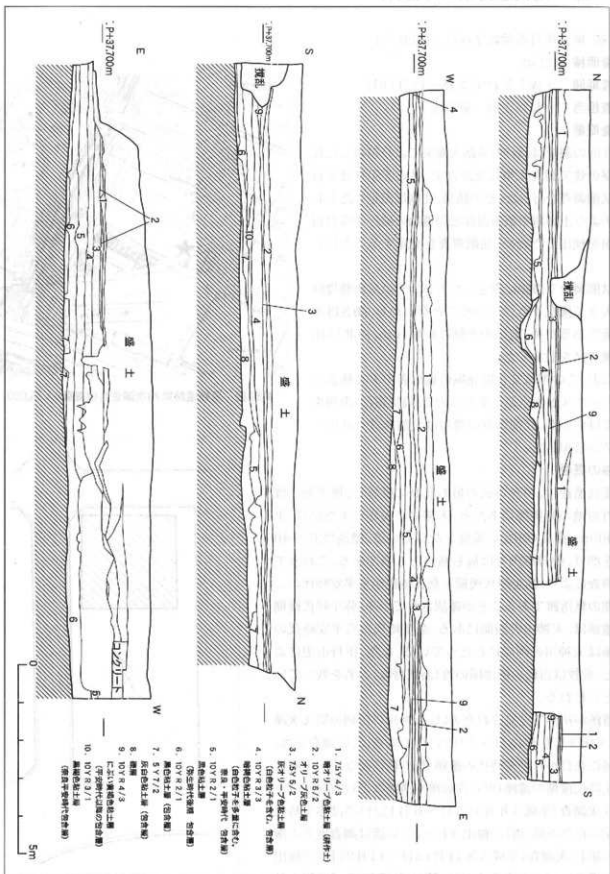
遺跡が初めて発見されたのは、天神川の西側の第4次調査(平成3年6月13日～7月27日)である。この調査では、上層に奈良から平安時代の遺跡(畑の耕作跡など)、下層に弥生時代後期の遺跡(竈穴住居跡や溝跡など)が存在した。第5次調査(平成4年6月5日～6月15日)では弥生時代後期の自然流路(溝)が検出された。この溝は調査地点の南側の第15次調査(平成5年11月12日～11月21日)で検出した溝につづくと考えられる。第16次調査(平成6年1月26日～3月31日)では溝の中から弥生土器に混じて先



第52図 荒牧遺跡第23次調査区位置図(1/5,000)



第53図 調査区設定図(1/600)



第54圖 土層断面圖(1/100)

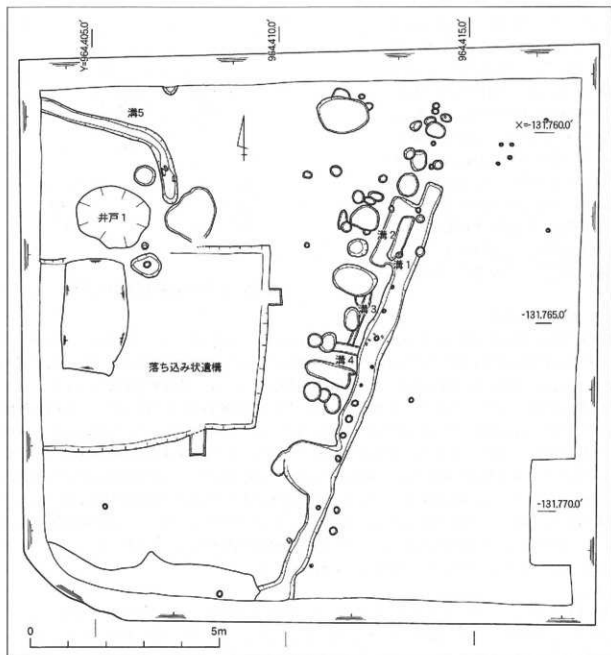
土器時代から縄文時代早期の尖頭器(石槍)が出土し、遺跡の時代が少なくとも縄文時代にまで遡ることがわかった。天神川の東側での第12次調査(平成5年4月20日～5月27日)では、奈良時代から平安時代の掘立柱建物跡が5棟発見された。

調査成果

当調査地点の南北道路を挟んで東側には、第4次調査地点がある。この調査では、上層に奈良時代から平安時代、下層に弥生時代後期の遺跡が存在し、当地点でも同様に2時期の遺跡を発見した。

層序(第54図)

基本層序は、盛土が40～60cmの厚さで、その下には耕作土層(1)、オリーブ灰色土層(2)、灰オリーブ色粘土層(3)、暗褐色粘土層(4)、黒色粘土層(5・6)、灰色粘土層(7)と礫層(8)の地山へとつづく。南壁を除く土層は、(3)と(4)の間に、にぶい黄色粘土層(9)が存在する。暗褐色粘土層(4)と、にぶい黄色



第55図 第1遺構面平面図(1/100)

粘土層(9)は奈良時代から平安時代の遺物包含層である。また、黒色粘土層(5)は弥生時代の土器を多く含む包含層で、(6)は弥生土器をわずかに含む。表土から地山までの厚さは、調査区の北側では90~100cm、南側では140~180cmを測る。南西隅は大きく攪乱されている。地山は北側から南側へと緩やかに傾斜している。

遺構

奈良時代から平安時代(第55図)

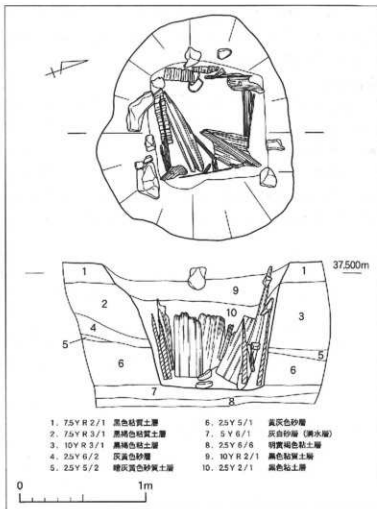
奈良時代から平安時代の遺物は、第4層の暗褐色粘土層に含まれている。第4層から土師器や須恵器に混じって緑釉陶器が出土した。いずれも小片である。表土から第4層までの厚さは、調査区北側では55cm、南側では120cmを測る。重機により第3層までは除去し、第4層以降手掘りに切り換えた。第4層の暗褐色粘土層の厚さは10~18cmを測る。第4層を掘削し、第5層の黒色粘土層上面で遺構検出を行った。遺構には、井戸1基・溝5条・落ち込み状遺構1基等がある。

井戸1(第56図、PL.25)

掘り方の平面の形はほぼ円形で、東西1.8m、南北1.55m、深さ1mを測る。上面には掘り方の内側に10~30cm程度の自然石が間をあけて並んでいる。その内側に80cmの方形の掘り方があり、その中に一辺が約70cmの正方形の木製の井戸側がすえてある。四隅に丸柱が立っていて、横棧木で側板をおさええている。横棧木は隅柱のホゾ穴に差し込んでいる。四隅の丸柱のうち、北東隅柱は内側に倒れていた。隅柱の規模は長さ90~100cm、直径5~11cmを測り、上部は細くなっている、中央部に長方形のホゾ穴がある。側板はそれぞれ3枚に分かれていて、長さ55~60cm、幅22~23cm、厚さ2cmを測る。北側の側板の下には長さ83cm、幅8cmの横木がすえられている。横棧木は南側と東側で確認でき、南側は残存長64cm、幅5cm、両端が細くなっている。東側は残存長22cm、幅3cmを測る。埋土は上から灰黄褐色粘質土層が25cm、黒褐色粘質土層が10cm、黒色粘土層が70cmが堆積している。この時代(奈良時代~平安時代)の地面より約1m下で灰色砂層(7)の湧水層がみられる。この井戸は縦板組隅柱横棧木どめの井戸といい、このような井戸は奈良時代から平安時代、中世の遺跡からの検出例が多い。

溝1~5

溝1は北東方向から南西方向に走る。溝の底のレベルは北の方が高く、南の方に向かって低くなっている。検出長12m、幅50~70cm、深さ5~10cm、埋土は白色粒子を多く含む黒褐色粘土層である。溝の底からは杭跡が検出され、木杭が残っているところもある。木杭の直径は5~10cmを測る。このような杭跡は溝の周辺でも検出されている。



第56図 井戸1平面図・断面図(1/30)

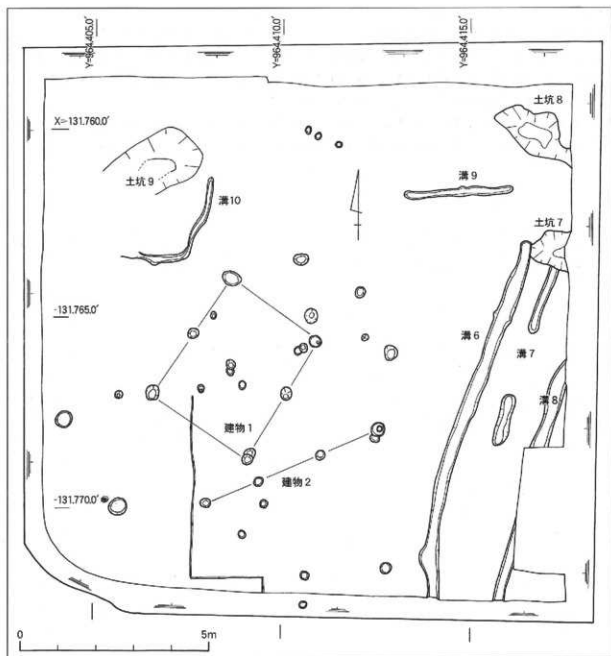
- | | | | |
|--------------|----------|--------------|-----------|
| 1. 75Y R 2/1 | 黒色粘質土層 | 6. 25Y 5/1 | 灰灰色砂層 |
| 2. 75Y R 3/1 | 黒褐色粘質土層 | 7. 5Y 6/1 | 灰白砂層(湧水層) |
| 3. 10Y R 3/1 | 黒褐色粘土層 | 8. 25Y 6/6 | 特異褐色粘土層 |
| 4. 25Y 6/2 | 灰黄色砂層 | 9. 10Y R 2/1 | 黒色粘質土層 |
| 5. 25Y 5/2 | 暗灰黄色砂質土層 | 10. 25Y 2/1 | 黒色粘土層 |

0 1m

溝2・3は、溝1の西側にあり、溝1と平行するように走る。溝4は溝1の西側にあり、溝1と直行するように東西に走る。いずれも深さは5～6cmで浅く、埋土は溝1と同じように黒褐色粘質土層で白色粒子を多く含む。溝1～4の周囲には多数の土坑や小穴がみられるが、深さは5～10cmで浅く、柱穴と考えられるものはなかった。

弥生時代後期(第57図)

調査区北側では表土から75～90cm下、南側では110～140cm下の第5層の黒色粘土層には、弥生土器が多く含まれている。この層の厚さは10～18cmを測る。この層を手掘りし、調査区の北側では第7層の灰白色粘土層の上面で、南側では第6層の黒色粘土層(遺物をほとんど含まない層)の上面で遺構検出を行った。遺構には、建物跡2棟、柱穴30基、溝5条、土坑3基等がある。



第57図 第2遺構面平面図(1/100)

建物 1. 2 (PL, 27)

円形あるいは円形に近い形状の掘り方をもつ柱穴を多数検出したが、その柱穴の並び方から建物跡 2 棟 (うち 1 棟は東西の 1 列だけ検出) が考えられる。

建物 1 は、2 間×1 間の掘立柱建物跡である。建物跡の規模は南北が 3.7m (柱間距離は 1.9m)、東西が 1.9m である。柱穴の掘り方は直径が 25~45cm、深さが遺構検出面より 25~52cm を測る。

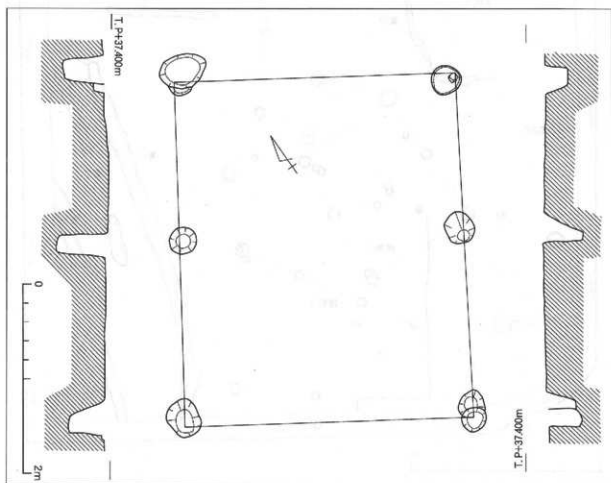
建物 2 は東西 3 間 (5.1m)、南北の規模は不明の掘立柱建物跡である。柱間は 1.7m の等間隔である。柱穴の掘り方は直径が 25~35cm、深さは遺構検出面より 32~45cm を測る。

溝 6~11 (PL, 26)

溝は 5 条検出した。埋土は白色粒子を多く含む黒褐色粘土層である。調査区東側で検出した溝 6・7・8 は上面で検出した溝 1 と同じ方向の北東から南西方向にほぼ平行に走る。底のレベルは北の方が高く、南の方に向かって低くなっている。

溝 6 は検出長約 9m、幅 35~53cm、深さ 5~10cm を測る。溝の南の端で弥生土器が集中して出土した。この土器は比較的大きな破片である。溝 7 は溝 6 の東側にあり、検出長は途切れている部分も入れると約 5m、幅 25~30cm、深さ 5cm 程度である。溝 8 は溝 7 の東側にあり、一部試掘坑によって壊されている部分もあるが検出長 6.5m、幅 30~40cm、深さ 10cm を測る。

溝 9・10 の底のレベルはほぼ一定である。溝 9 は東西方向に走る溝で、長さ 2.9m、幅 20cm、深さ 10cm を測る。溝 10 は上面の溝 5 とは反対向きの半円形をしている。幅 15cm、深さ 5cm を測る。



第58図 建物 1 平面図・断面図 (1/40)

土坑7・8・9

平面形はいずれも不整形で、埋土は遺物を全く含まないしまりのよい黒色粘土である。底は小さく、上部に向かって広がるすり鉢状の土坑である。それぞれの土坑の規模は、土坑7は南北1m、東西検出長1m、深さ37cm、土坑8は東西2.3m、南北1.2m、深さ55cm、土坑9は南北1.2m、東西2mを測る。
(細川)

遺物(第59図、PL.28)

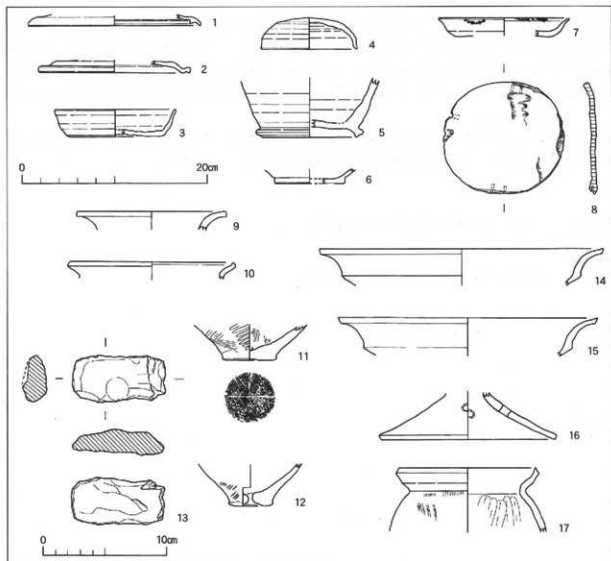
井戸1

7は土師器皿である。口径14.0cm、器高1.8cmを測る。口縁内外面に煤が付着し、灯明皿として使用されていたようである。

8は円形曲物桶の底板である。法量は13×12×0.8cmで磨耗の為にやや楕円形を呈している。側面5ヶ所に釘穴を持ち、木釘が残っている箇所もある。スギ材である。10世紀中頃の所産であろう。

溝6

14～16は高杯である。口径28～30cmを測る。口縁は大きく外反し、端部は面を持って尖り気味におさめる。16は脚裾部であるが、他に中空の脚部片も出土している。何れも表面の磨耗が著しく調整は不明瞭である。赤褐色を呈し、胎土は白色砂粒を多く含み粗い。



第59図 出土遺物(1/4・1/3)

(17)は甕である。口径14.5cm。体部外面はタテハケ調整をし、内面はヘラケズりする。口縁は強くヨコナデして口縁端部を上方に摘み上げる。黄橙色を呈し、胎土は粗い。弥生時代後期後半(第V様式)のものである。

包含層

1～6は第4層からの出土である。須臾器杯蓋は返りのあるもの(1)とないもの(2)が見られる。

4は口径10.3cm、器高3.4cm。天井が丸みを持ち、稜もなだらかである。天井部の回転ヘラ切りは未調整である。口縁は外反して内側に面を持つ。II-6段階である。3は須臾器杯である。口径13.0cm、器高2.9cm。口縁部はハの字形に緩やかに外反して立ち上がる。底部は上げ底気味で回転ヘラ切りは未調整である。8世紀中頃のものか。他に壺の高台(5)、緑釉陶器(6)などが出土している。

9～13は第5層からの出土である。9は高杯、10は甕の口縁である。11・12は底部片である。11は底部外面に木葉痕が残っている。外面は右上がりのタタキを施し、内面はハケ目調整をする。12は底部中央に両側から穿たれた孔をもつ。外面には右上がりのタタキを施す。弥生時代後期後半(第V様式)のものであろう。13は鉄斧である。基部が欠損しており、表面全体が錆に覆われているため細部は不明瞭である。現存長7.5cm、幅3.9cm、厚さ1.9cm、重さ92gを測る。(瀬川)

まとめ

当調査地点では、道路を挟んで東側の第4次調査地点と同様に、奈良時代から平安時代と、弥生時代後期の二時期の遺構面が存在することがわかった。第4次調査地点では、同時代の畑の耕作跡と考えられる溝が検出された。当調査地点では奈良時代から平安時代の遺構は井戸と溝が検出された。この井戸は、周囲に建物跡が検出されなかったことや、東側の第4次調査地点で畑の耕作跡が検出されたことから、農業用の井戸とも考えられる。

当調査地点で発見した弥生時代後期の掘立柱建物跡は、調査区の北西へ70mの第8次調査地点で検出されている。このあたりには弥生時代後期に集落跡が存在すると考えられる。(細川)

註1 中村 浩 1978「陶器Ⅲ」『大阪府文化財調査報告第30』。

<参考文献>

宇野隆夫 1989「考古資料にみる古代と中世の歴史と社会」

第10節 荒牧遺跡第26次調査

所在地 伊丹市荒牧字池ノ上10番地

調査面積 360㎡

調査期間 平成9年1月16日～2月21日

調査担当 深谷 憲二(茨城県)

石崎 善久(京都府)

今回の調査は阪神・淡路大震災の災害復興事業に伴う共同住宅建設計画により実施されたものである。当該地は埋蔵文化財分布地の範囲内にあたることから、調査に先立ち伊丹市教育委員会の支援依頼を受けた兵庫県埋蔵文化財調査事務所復興調査班が確認調査を実施した結果、弥生時代前期から中世にかけての遺物と遺構を確認し、全面調査を行うこととなった。

調査に際しては確認調査同様、伊丹市教育委員会の支援依頼を受けた兵庫県埋蔵文化財調査事務所復興調査班の職員が調査を担当した。

調査は新築建物建設予定範囲に調査区を設定し、建造物相当部分にあたる南北8m、東西45mの工事によって損壊をうける部分を掘削の対象とした。表土は重機を用いて除去し、その後を人力によって掘削・精査するとともに順次、遺構検出・遺構掘削を行い、適宜写真撮影・作図等の記録作業を行った。

なお、全ての遺構は地山面上で検出した。土地区画整理事業に伴う遺跡内の攪乱の進捗は、調査区全域に及び、基本となる土層が僅かな部分に残存している程度であった。遺構は調査区の中央部から東側にかけて残存しており、地山直上まで攪乱が及んでいるものの遺構の残りは比較的よかった。

遺跡概要

荒牧遺跡第26次地点は、武庫川と猪名川に挟まれた伊丹台地の北西、猪名川の支流である天神川と天王川に挟まれた洪積段丘上に位置する。遺跡の位置する荒牧周辺は猪名川や武庫川がつくった古い時期の氾濫原(安倉面)に属するものである。

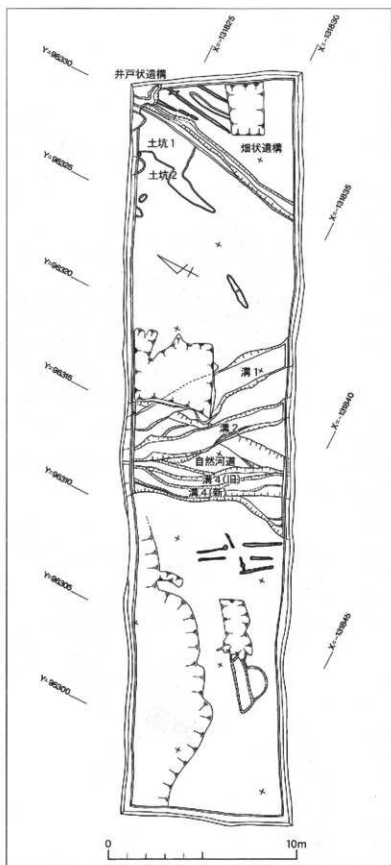
この荒牧遺跡の周辺地域には川西市加茂遺跡(直線距離で約3km)が拠点的な集落を形成し、南方には尼崎市武庫庄遺跡が拠点的な集落として存在している。



第60図 荒牧遺跡第26次調査位置図(1/5,000)



第61図 調査区設定図(1/1,000)



第62図 平面図 (1/200)

荒牧地区の調査は、昭和62年の遺跡分布調査で弥生時代の土器片が発見され、これまでの遺跡の広がりが古墳時代からさらに弥生時代まで遡ることが確認された。その後、平成3年の第4次調査では弥生時代後期の竪穴住居跡が確認され、また、荒牧遺跡の推定範囲の西部で実施された第5次調査では弥生時代の溝が同15次調査でもその延長部が検出されている。平成5年には天神川の第16次調査として行われた確認調査及び翌年2月の本調査でも弥生時代後期の流路と溝が検出されている。この時の調査は弥生時代の土器片に混じて旧石器時代末期から縄文時代早期と考えられる有舌尖頭器も出土している。これらにより周辺地域は旧石器時代の生活の営みも予想されているが、概ね弥生時代後期の集落としての遺跡の概観と併せてそれ以前の泥炭層が形成される湿地帯としての荒牧地区の自然形成が推測されていた。

調査成果

土地区画整理事業による攪乱が地山面直上にまで及んではいたが、辛うじて損壊を免れた部分の現代盛土と遺構面の間に遺物包含層が認められ、奈良時代の須恵器・土師器や弥生土器等が細片化した状態で出土した。

遺構は全て調査区東側から中央部で検出し、弥生中期・後期、奈良時代から平安時代にかけての各時期の遺構を検出した。調査区東側では耕作痕を残す水田あるいは畑状遺構と考えられる遺構が南東方向に広がり、調査区北東隅からは井戸状遺構の可能性のある土坑が検出されている。調査区の東から中央部にかけて大小3条の溝及び自然河道が共に南北方向に調査区を最短に横切る形で検出され、何れ

の遺構からも時期を考察させる遺物が少数出土している。特に自然河道からは流域期間を考察させる3時期の流れが確認され弥生前期から中期に跨がる土器の出土が確認された。なお、調査区西側の部分は攪乱を免れ比較的安定した遺構面を確認していたが、この部分では顕著な遺構は検出されず、僅かに中央部からやや西側付近で耕作痕とも思われる畝状の掘り方を検出したが遺構と特定できうる根拠が乏しかった。

層序

基本的な層序は第1層が現代耕作土、第2層が現代盛土、第3層が旧耕作土、第4層が灰褐色シルト(遺構)の順である。調査区の西側に見る盛土以下の土層堆積状況はやや緩い傾斜をもつものの、ほぼ成層状態での堆積状況が認められた。調査区の中央部から東側についてはいたる所に攪乱が認められ、包含層及び遺構面まで達する攪乱により削平されていた。

遺構と遺物

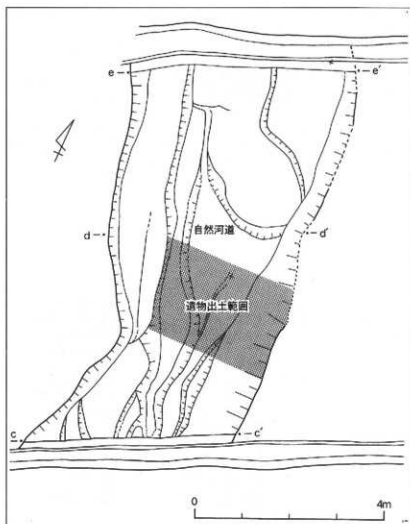
今回の調査で確認した遺構の中には、出土遺物を伴わないため時期や性格を特定できないものも検出される。ここでは主要な遺構・遺物について、年代順に報告していくことにする。

自然河道(第63図、PL.29・31)

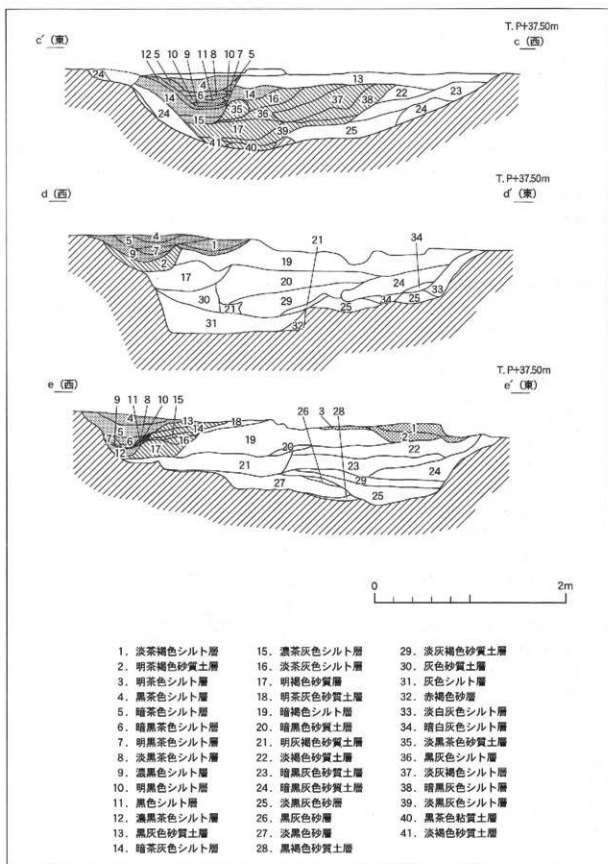
調査区中央部で検出した幅約4m、深さ0.8mを測る南北方向の自然河道である。埋土は概ね上層に黒褐色シルト、下層に砂礫層が比較的厚く堆積しておりかなりの水量と時間の経過があったものと推測され、第64図cに見る2期にわたる堆積層が確認された。なお、自然河道であるため流れの方向については特定できなかった。この河道埋土からは弥生中期(Ⅲ・Ⅳ様式)、弥生前期(I様式)、さらに僅かではあるが弥生後期(V様式)の壺・壺等の土器や流木等も出土している。ここでは、壺・甕・広口壺・小型丸底壺を図示した。

第66図1は頸部に貼り付け突帯をもつ壺の口縁部である。頸部から口唇部にかけて内・外面ともナデ調整が施されている。胎土は粗く礫を含み、色調は淡白茶色である。

2は体部上位に2条の凹線をもつ甕の口縁部である。口縁端部に刻み目があり、内・外面ともナデ調整が施され、口縁端部に炭化物が付着している。胎土に礫を含み、色調は褐色である。何れも下層の砂礫層から出土、I様式(新)と考え



第63図 自然河道平面図(1/80)



第64図 自然河道土層断面図(1/40)

られる。

3は口縁端面に四条の凹線がある壺の口縁部で、凹線はナデ消しとも考えられる。頸部内・外面ともナデ調整が施されている。胎土は密で、色調は淡褐色である。

4は口縁端部に3条の凹線文を有する壺の口縁部である。胎土は粗く礫を含み、色調は淡茶褐色である。残存値が低く調整は不明である。

5は口縁端面に数条の凹線と棒状浮文をもつ壺の口縁部である。口縁部内面を櫛描波状文で飾る。胎土は密で、色調は淡褐色である。

6は緩く外反する頸部から口縁部にいたる広口壺である。口縁部は無文で、端面に煤が付着している。胎土はやや密で、色調は淡褐色である。

7は短く開く頸部を断面三角形形状に拡張する口縁部をもつ甕である。頸部下端には1条の指頭圧痕文突起が巡る。胎土は密で、色調は淡茶褐色である。

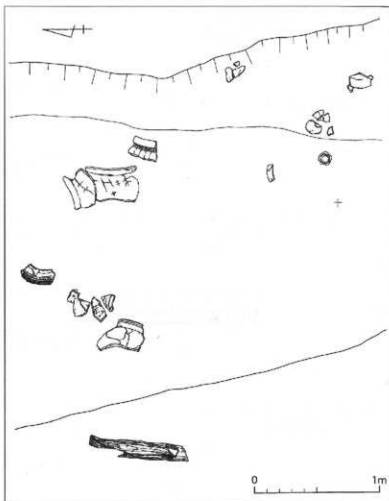
8は口縁端部を上方につまみ上げる甕の口縁部である。口縁端面に3条の凹線をもち、口縁下端部はナデ、体部外面はハケ仕上げである。胎土は密で、色調は淡褐色である。

9はタキ成形の見られる甕の口縁部である。体部上半にタキが施され、口縁部は捻り出し、粘土を補強後、ハケで整えナデを行っている。内面はハケで仕上げている。胎土はやや密で、色調は淡褐色である。

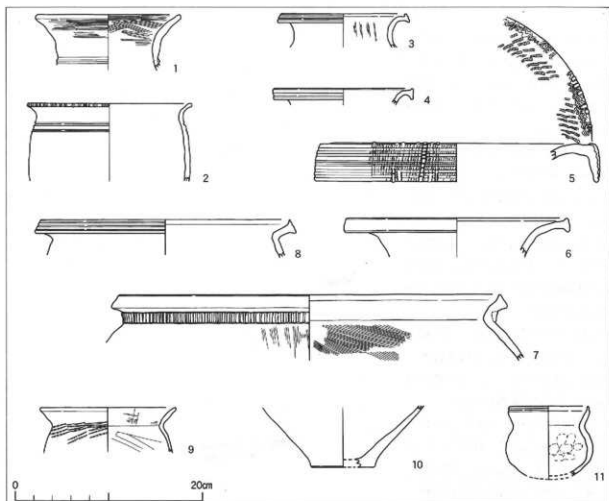
10は偏球形の体部に短い口縁がつく小型丸底壺である。口縁部に1条の凹線があり、体部上半には強いナデ痕を残す。胎土は密で、色調は褐色である。

11は平底をもつ壺の底部である。体部外面・内面とも調整は不明である。胎土は粗く礫を含み、色調は淡褐色である。

出土遺物の3～7・11は上層黒色シルトから出土、何れも皿様式と考えられるが、遺物5は皿様式(新)からIV様式に位置づけることもできる。遺物8～10は砂礫層から出土し、8はIV様式(古)、9・10はV様式と考えられる。これらの土器の他、出土している遺物の中には比較のまとまった状態で出土している部分もあり、その状況から投棄された可能性を残すものもある。なお、前期の土器は下層の砂礫層中から出土しているが点数は少ない。このことから、この河道は弥生時代前期から中期にかけて流れが見られ、中期に一定の埋没があったものと判断される。また、河道の詳しい性格等を示す手掛かりが得られずあくまで地形から見た推測でしかないが、この地域は現在こそ宅地化が進んでいるものの、数年前までは沼地や湿地であったことから、弥生時代前期頃から地形的に周りより低い低地を成し、この低地を取り巻くように人々の生活が営まれていたのではないとも考えられる。



第65図 自然河道内弥生土器出土状況(1/30)

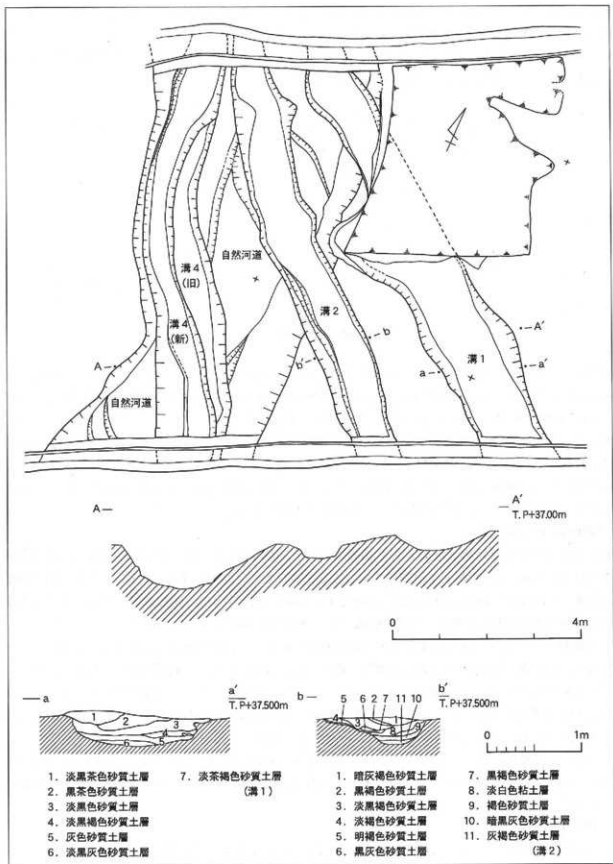


第66図 出土遺物(1/4)

第62図の遺構配置図を見ると偶然ではあるが調査区の中央部に自然河道や溝が南北方向に流れるのも、当時の自然地形が今回検出された自然河道に沿って若干の谷地形を成し、この地形を巧みに利用した生活の営みがあり、自然河道の埋没後に溝1、2、4が掘り込まれるのもそうした人々の自然に順応した痕跡とも受け止められる。また、中央部の自然河道や溝の東側畝状耕作痕と西側の一部に見られる耕作痕状の痕跡から推測するとこの付近は低地の最深部にあたり、集落は付近の微高地上の地形に存在していたのではないかと推測できる。現在のところ集落がこの地の何れに存在していたのかは判断できないが、今回の調査で出土した遺物の時期から、これまで推測されていた荒牧遺跡の存続した時期が弥生時代後期後半の短期間の集落の存在論と反して、ある一定期間の定住と人々の営みが推測されることとなった。何れにしても、今回の自然河道の検出では、河道の規模と埋没過程から弥生時代中期のこの地が従来から考えられてきたように降水が自由に流路となって流れる湿地帯であったことが再確認され、また調査の過程では湿地帯が形成されていたと思われる泥炭層がほぼ調査区全域から確認されている。なお、調査区の西側の土層堆積状況を見ると西側に微高地状の緩い傾斜をもっていることが確認され、調査区と東方の天神川とのあいだにも微高地が存在していることはこれまでの調査でわかっており、今回の調査では、調査区の西側にも微高地が広がることができ推測範囲が広がることとなった。

溝4 (第67図、PL.29-30)

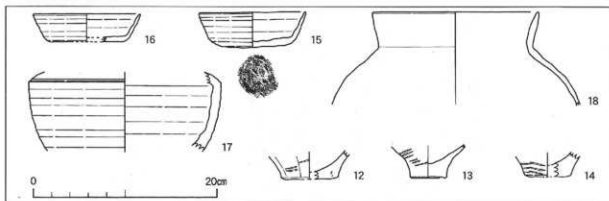
自然河道の埋没後に掘削された弥生時代後期の溝で、北東から南東へ調査区を最短距離でまたぐ、幅1.5m、深さ0.5mの素掘溝である。なお、流れの方向については自然河道と同様に特定することはできな



第67圖 溝1·2·4平面圖·断面圖(1/80·1/40)

かった。この溝は、埋土の堆積状況から再掘削が繰り返されており、第64図d・eの断面観察から2回の再掘削が行われているものと判断される。埋土は基本的に下層に砂礫層、上層に灰色シルトが認められ、砂礫層が厚く堆積するたびに再掘削がなされたものと考えられる。

出土遺物は、埋土中から細片化した弥生後期の土器片が出土している。遺物の量は僅かで完形となるものがなく、ここでは鉢あるいは甕の底部と考えられるものを図示した。



第68図 出土遺物(1/4)

第68図12は、流路(旧)が埋没後、再掘削された新しい流路の最下層から出土したものである。11同様残存状態はよくないが、体部外面にやや右上がりのタタキ痕を残す鉢あるいは甕の底部片と考えられる。内面の調整は不明で、胎土はやや粗く、色調は淡赤褐色である。

溝4については、砂礫層が堆積するたびに再掘削を行ってはいが、今回の調査で確認できた掘削回数は2回であることから、流路としてはさほど長期に渡って機能していたとは考えられず、弥生後期のごく限られた期間にその機能を失ったものと推測される。また、溝の規模と細かな土層の堆積状況から、流れ事態は緩やかのものであったと考えられる。なお、性格は不明である。

溝2(第67図、PL.30)

溝4の東に位置する北東か南東方向の素掘溝である。規模は、幅1.0m、深さ0.3mを測る。溝は調査区北側で溝4に合流する。北側の土層観察から、最後に掘削された段階の溝4と併存し、それ以前に機能していた溝4の埋没後に掘削されたものと判断された。埋土(第67図)は、概ね上層に黒色シルト系の黒褐色砂質土層と淡白色粘質土層からなり、底部で薄い細砂層の堆積もみとめられた。

出土遺物は埋土中から細片ではあるが、弥生後期の鉢もしくは甕の底部片が出土している。

第68図13は粗製の鉢もしくは甕の底部片と考えられる。底部は平底で、底部外面から体部にかけて右上がりのタタキを施す。内面の調整は不明。胎土はやや密で、礫を少し含み、色調は褐色である。

14は比較的径の大きな平底をもつ甕の底部である。底部外面から体部にかけてタタキが施されている。内面の調整は不明である。胎土はやや密で、色調は淡灰褐色である。

この溝からは調査の過程で、溝4で確認された再掘削の痕跡は確認できず、埋土の堆積状況が密であることから砂礫による埋没がなかったのか、あるいは埋没後、再掘削することなく放棄されたのか詳細は不明である。

溝1(第67図、PL.30-32)

溝2の東側に位置し、北東から南東方向に伸び溝2にはほぼ平行する素掘溝である。規模は幅1.6m、深さ0.4mを測る。埋土は上層に細砂を含む淡黒色土系、下層に灰色砂質土が堆積している。埋土の下層からは須臾器や土師器が出土し、出土遺物から奈良時代に比定される。

出土遺物の中より、須恵器の甕・壺杯を図示した。

第68図15・16は須恵器の杯Aである。15は体部内・外面ヨコナデ、底部はヘラ切り後ナデが施されている。底部にヘラ記号と考えられる線刻が見られる。胎土は密で、色調は青灰色である。

16は内・外面ヨコナデが施されるが、底部は磨滅により不明。胎土は密で、色調は青灰色である。

17は須恵器の長頸壺体部と考えられる。体部外面上位に一条の凹線が見られる。内・外面にナデが施され、体部外面下位はヘラ削り後ナデが施されている。胎土は密で、色調は青灰色である。

18は須恵器の甕口縁部である。口縁部はナデが施されているが、体部内・外面は磨滅し調整は不明である。胎土は密で、色調は淡青灰色である。

この溝は埋土の堆積状況を観察すると、下層の堆積は比較的成層状態に近く、上層では埋没状況を示すかのような堆積状態を見ることができた。このことから、初期は穏やかな流れがみられたものの、埋没過程において再掘削することなく、序々にその機能を失っていったものと考えられる。

土坑1(第69図)

調査区の北東隅で検出した。遺構の大部分が調査区外にかかるため詳細は不明である。平面形は不正円形を呈する素掘の土坑であり復元径は1.5m、深さ0.7mを測る。土坑の規模、形態及び常に湧水のある状況等から考察して井戸状遺構の可能性も考えられる。明確な時期を示す遺物等は出土していないが、埋土中から緑釉陶器の細片や須恵器の甕細片が出土している。

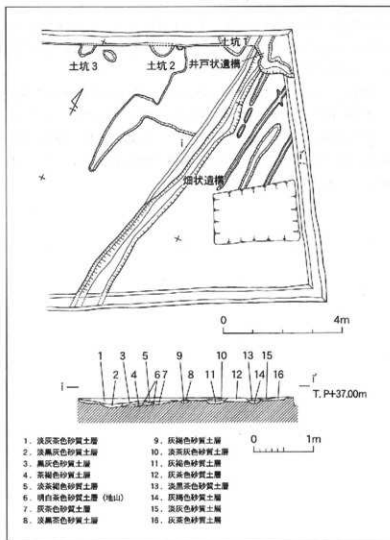
畑状遺構(第69図、PL.30)

調査区の東側で検出した。土坑1の埋没後に掘削されている。この遺構は地山を一段掘り下げることにより区画を行っている。なお、検出された遺構は東側に広がるものと考えられるが、調査区外のためどのような状況かは把握できなかった。この遺構の掘り方内には明灰褐色土層が認められるが、この層上で南北方向に平行して走る小溝群を検出した。この小溝群は耕作痕と考えられることから畑状遺構とした。

まとめ

今回の調査で得られた成果は次のようにまとめられる。

荒牧遺跡周辺の本格的調査の歴史は浅く、はじめて弥生時代の土器が発見された昭和61年の市内全域に及ぶ遺跡分布調査、さらに平成3年の第4次調査や第5次調査及び第16次調



第69図 畑状遺構平面図・断面図(1/80・1/40)

査で弥生時代後期の堅穴住居跡等の遺構及び遺物が発見され、荒牧遺跡に於ける弥生遺跡が、弥生時代後期に始まり、古墳時代に移行する直前に廃絶したと推測されるまでになり、弥生遺跡の存在が明確に位置づける成果が得られている。しかし、その調査の歴史は極めて浅く、調査面積も限られたものであって、この周辺地域の時代を考察するにはあまりにも資料が乏しく、歴史的環境を考察するには大胆な推測の域を出なかった。

今回の第26次調査では、この地域で確認されていなかった弥生時代前期から中期の土器を含む河道を検出したことによって、周辺地域に弥生時代前期から中期の遺構の存在を裏付けることとなり、荒牧遺跡に於ける人々の営みが、弥生時代後期からさらに下った弥生時代前期及び中期に溯る資料を提供することになり、今後の調査で前期・中期の遺構や遺物が確認・出土する可能性を示唆するものとなった。また、この荒牧遺跡周辺におけるこの時期の環境を見ると、隣接地とは言えないまでも東方には川西市加茂遺跡、南方には尼崎市武庫庄遺跡など、抱点的な集落をなす遺跡があり、少なからずこうした遺跡との関係は現段階では不明とはいえ、将来、新たな調査で前期から中期にかけての遺構や遺物が確認されたり出土した時のことを考えると、今回の調査で新たに弥生中期の遺跡と位置づけられる成果を得たことは、摂津における弥生中期社会を考えさせるうえで大きな意義を持つものといえる。なお、今回検出した弥生後期の溝は、2回にわたる再掘削が行われていることから、集落における水利用や、この周辺が湿地帯としての自然環境を有していた頃の治水や灌漑などの何らかの関係も考えらる。しかしながら、今回の調査地域は遺構の検出状態と遺物の出土状況から決して弥生集落の中心部分に相当するものとはいえ、むしろ集落の縁辺部に相当するものと考えられ、荒牧遺跡の推定範囲を含め、遺跡の広がりに対する再考察を加える必要性もでてきた。

最後に、今回の調査は弥生時代や奈良時代の中心部分の調査をしたわけではないが、今後、荒牧周辺での調査が進むにつれて遺跡の範囲や実態が徐々に明らかになって行くものと期待されるものであり、特に、弥生中期の集落の位置については、未調査の多い東西両側へ遺跡範囲が広がる可能性もあり、数々の制限の中で行われて行く地道な調査の積み重ねによって、これらの実態が徐々に解明されて行くことが期待される。

(深谷)

第11節 荒牧長野遺跡第2次調査

所在地 伊丹市荒牧字長野54ほか
調査面積 24㎡
調査期間 平成8年12月6日～12月9日
調査担当 深谷 憲二(茨城県)
石崎 善久(京都府)

調査概要

今回の調査は阪神・淡路大震災の災害復興事業に伴う共同住宅建設事業が計画され、伊丹市教育委員会が確認調査を実施することになったものである。

当該地は埋蔵文化財分布地の範囲内にあたるところから、調査に先立ち伊丹市教育委員会の支援依頼を受けた兵庫県埋蔵文化財調査事務所復興調査班の職員が調査を担当した。

調査は新築建物建設予定範囲に2m×2mの試掘トレンチを6カ所設定し、遺構・遺物の有無、遺構面までの深さ、遺構面の数を確認することを主眼において実施した。掘削に際しては近・現代盛土を重機を用いて除去、その後、順次人力によって掘削・精査するとし、適宜写真撮影・作図等の記録作業を行った。

遺跡概要

荒牧長野遺跡第2次地点は、武庫川と猪名川に挟まれた伊丹台地の北西、猪名川の支流である天神川と天王川に挟まれた洪積段丘上に位置する。この荒牧周辺は猪名川や武庫川がつくった古い時代の氾濫原(安倉面)に属するものである。

この荒牧長野遺跡から程ない北東の隣接地には荒牧遺跡があり、昭和62年の遺跡分布調査で弥生時代の土器片が発見されて以来、平成3年の第4次調査では弥生時代後期の竪穴住居跡が、また、荒牧遺跡の推定範囲の西部で実施された第5次調査では弥生時代の溝が同15次調査でもその延長部が検出されている。平成5年には旧天神川の第16次調査として行われた確認調査及び翌年2月の本格調査でも弥生時代後期の流路と溝が検出され、この周辺遺跡の概要が序々にではあるが解明されつつある。

なお、この時の調査では弥生時代の土器片に混じってサヌカイトを石材とする旧石器時代末期から縄文時代早期と考えられる槍先形尖頭器が出土していることから、この周辺地域では旧石器時代か



第70図 荒牧長野遺跡第2次調査区設定図(1/5,000)



第71図 調査区設定図(1/1,000)

ら縄文時代早期にかけての人々の営みがあったことが予想されている。

調査成果

今回の調査対象地内には計6カ所のトレンチを設定し、調査に際しては、必要に応じて人力掘削後再び重機を用いて可能な限り深く掘り下げ精査を繰り返して、遺構と遺物の所在の確認に努めたが、遺物については少量の出土がみられたものの、遺構については確認することはできなかった。

層序

基本的な層序は各トレンチとも同一で、上層から、1層は灰褐色土層（現代耕作土・水田土壌）、2層・3層は褐灰色土層（旧耕作土・水田土壌床土）、4層はうすい褐灰色土層（包含層）、5層は灰褐色粘質土層、6層は地山である。なお、盛土以下の土層堆積状況は概ね成層を成すものである。

遺構と遺物(第72図、PL33)

遺構については基本土層の5層並びに6層上面で精査を実施し遺構検出につとめたが、何れの面からも遺構を検出することはできなかった。ここでは、確認調査で出土した遺物についてふれたい。

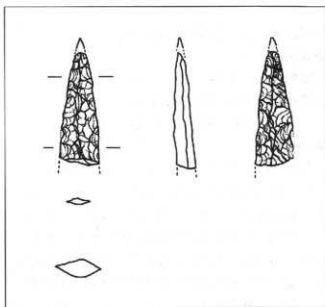
出土遺物は全て4層中から出土している。出土点数は少ないものの土師器・須恵器・青磁碗及び槍先形尖頭器が出土している。何れも細片であり、摩滅も著しいため2次的な移動を受けているものと考えられる。

第72図は、調査区西側に設定した第5トレンチ出土の槍先形尖頭器である。出土層位は4層のうすい褐灰色土中から胴部下位過半が欠損している。サヌカイトを石材としているが石理が目立ち、2次的な移動や風水による進行が著しい。素材は剥片と考えられ、周囲からの粗い調整加工を施している。左右両端中央部には極めて僅かではあるが剥離面が認められる。先端部欠損後の調整加工は施されていない。胴部下位刃部の剥離は出土時に剥離したものである。なお、有舌尖頭器の可能性も考えられる。

まとめ

今回の調査では遺構を全く検出することができず、また、出土遺物も少量であり、出土している遺物は2次的な移動によるものと考えられることから、当該地は遺跡の中心部には相当しないものと判断される。なお、調査によって地山が東側に傾斜していることが確認されていることや、遺物の出土位置が西側に設定されたトレンチ内から多く出土する傾向があることから、荒牧長野遺跡の中心部はさらに西側に存在している可能性が考えられる。

また、今回の調査で槍先形尖頭器や青磁碗が出土したことによって、今後の調査でこれらの遺物に該当する時期の旧石器時代末期から縄文時代早期や中世集落の遺構が検出されることが期待できる。(深谷)



第72図 有舌尖頭器実測図(1/1)

第12節 西野遺跡第5次調査

所在地 伊丹市西野6-35-1、36-1の一部
調査面積 231㎡
調査期間 平成8年6月20日～8月2日
調査担当 中山 浩彦(埼玉県)
白根 義久(千葉県)

調査概要

今回の調査地に阪神・淡路大震災の復興に伴う共同住宅建設が計画された。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲内にあたり、また隣接地でもこれまでに4次の確認・全面調査が行われていたため、全面調査を実施するに至った。それにより、伊丹市教育委員会と兵庫県教育委員会が協議を行い、兵庫県埋蔵文化財調査事務所復興調査班の職員が調査を担当することになった。

遺跡概要

西野遺跡は、武庫川左岸の伊丹台地上に立地する弥生～古墳時代にかけての集落跡である。本遺跡は、伊丹市教育委員会が昭和61(1986)年度～63(1988)年度にかけて実施した遺跡分布調査により新たに発見され、弥生土器片が発見されたことにより弥生時代の遺跡が存在することが予想された。本遺跡はこれまでに4次の確認・全面調査が行われており、遺跡の範囲は伊丹台地西端の縁辺に沿った東西200m、南北100mと推定されている。今回の調査地点の南西の隣接地にあたる第3次調査では、弥生時代中期後半と後期の竪穴住居跡5軒、土坑数基、古墳時代後期の竪穴住居跡6軒、掘立柱建物跡数棟などが検出されており、弥生時代中期後半(第IV様式)～後期(第V様式)と古墳時代後期の集落跡であることが判明している。今回の調査区は、遺跡の北西端に当たる東西に長い範囲について発掘調査を行った。標高は約27.5mであった。

周辺の遺跡としては西野遺跡の北約520mに、赤鳥7(244)年銘の半円方形帯神獣鏡を出土した宝塚市安倉高塚古墳が位置する。墳丘は径約17mの円墳で、主体部は竪穴石室である。その他の副葬品も注目すべきものが多い。武庫川左岸の弥生～古墳時代の遺跡としては、伊丹市荒牧遺跡、荒牧長野遺跡、荻野遺跡、東野遺跡第1地点、堀池遺跡、尼崎市宮ノ北遺跡、北裏遺跡、三良田遺跡、道ノ下遺跡、弥生時代の大型建物跡が検出された武庫庄遺跡、東武庫遺跡などがある。

また、武庫川右岸には、宝塚市と西宮市境にかけて広がる標高約80mの丘陵に立地する仁川高台遺跡、標高約150mの丘陵に立地する仁川五ヶ山遺跡の弥生時代(第Ⅲ～Ⅴ様式)の高地性集落がある。

他に、流域が異なるが北東約4.5kmの猪名川流域には標高約40mに立地する、弥生時代中期(第Ⅲ様式)から後期(第Ⅴ様式)にかけての環濠集落として著名な川西市加茂遺跡がある。

調査成果(第74図)

調査成果(第74図)

調査の結果、全体を調査することはできなかったが弥生時代後期(第Ⅴ様式)の大型の竪穴住居跡1軒、ピット5基、近世～現代の礎石列3、土坑2基、ピット10基が検出された。遺構確認面には現代の攪乱が多く認められ、検出した住居跡などの遺構の遺存状態は良好とは言えなかった。従来の調査成果を踏まえた



第73図 西野遺跡第5次調査区位置図(1/5,000)

結果、本遺跡は弥生時代中期(第IV様式)～後期(第V様式)、古墳時代後期の集落跡であり、古墳時代前期から中期にかけては断絶が認められる。

住居址は、調査区東端で検出された。調査区外に延びており全体を調査することはできなかったが、径約10mの円形の大型住居址になると推測される。攪乱が著しく、残りは悪かった。主柱穴は4本が検出されたが、合計で6～8本になるものと思われる。炉跡は、住居址のほぼ中央で検出された。壁溝もほぼ全周していた。遺物はテン箱で約2箱出土したが、小片が多く完形の土器は1点も無かった。また、土器以外の遺物としても石庖丁の破片が1点出土しただけである。時期は、弥生時代後期後半(第V様式)と考えられる。

弥生時代のピットは、調査区の西側寄りに集中していた。住居址の柱穴とも考えられたが、検出状況から住居址とは考えにくい。遺物が出土しなかったため詳細な時期は不明であるが、住居址とほぼ同一時期であると思われる。

遺構は、西に行くほど希薄になることから、本遺跡の西限に近いものと考えられる。

層序(第75図)

調査区内の基本的な層序は、全体的に攪乱が著しく、遺構確認面の地山までは30～90cmと浅いことからどの面も状態は悪い。中でも状態の良い面としては南壁が挙げられる。

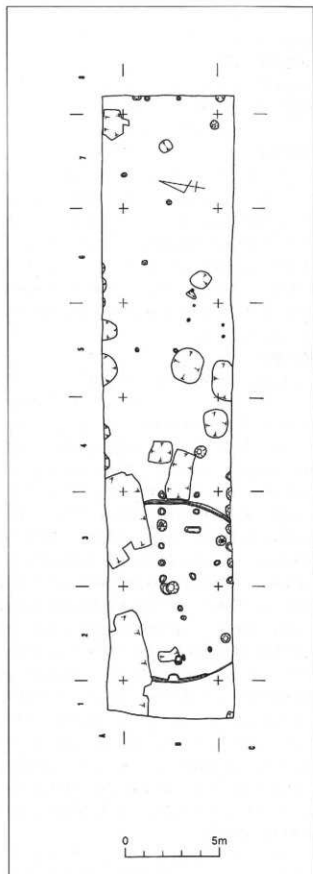
1～3層は、現代の盛り土である。地山面が安定していないことから、地山は数cm削平されていることが考えられる。そのため、住居址の立ち上がりも確認できたものよりは若干高くなるものと思われる。4～7層は住居址の埋土である。

弥生時代の遺構と遺物

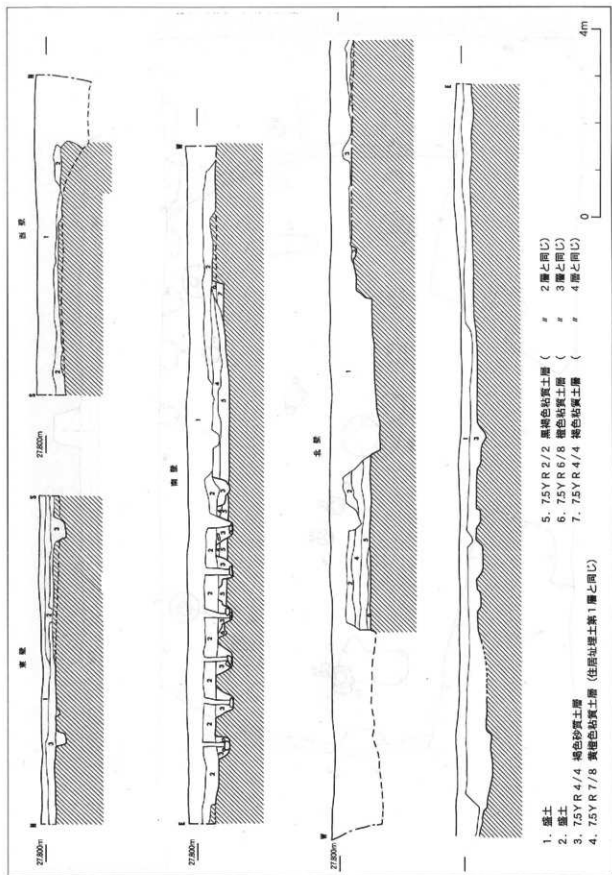
住居址(第76～79図、PL.34～36)

A-2・3、B-1～3、C-2・3グリッドにかけて検出された。南北は調査区外に延びていたため、全体を調査することはできなかった。北東・南東方向の床面および壁の一部は、現代の大きな攪乱坑によって壊されていた。また、礎石列1～3にも床面を壊されており、遺存状態は良好ではなかった。

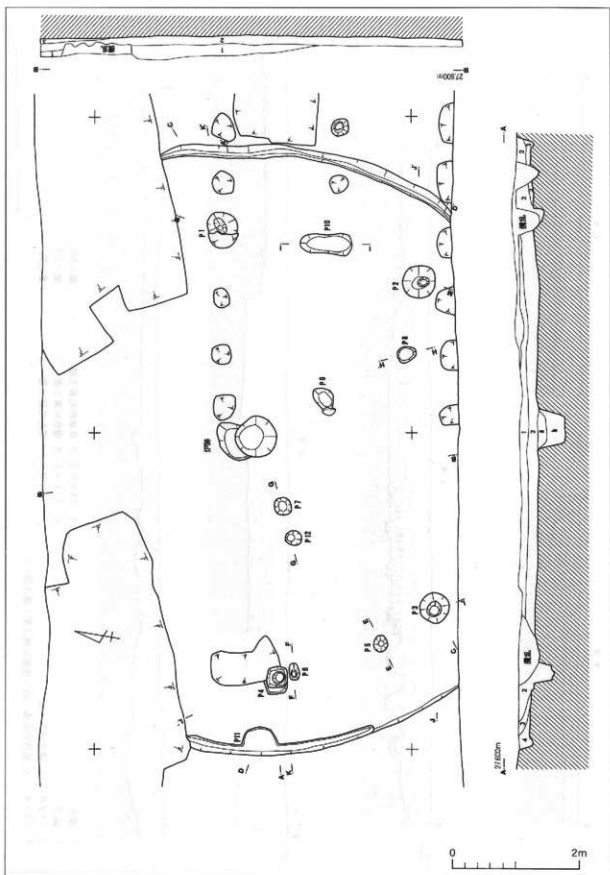
規模は、東西9.68m、南北(6.53)m、深さが0.14



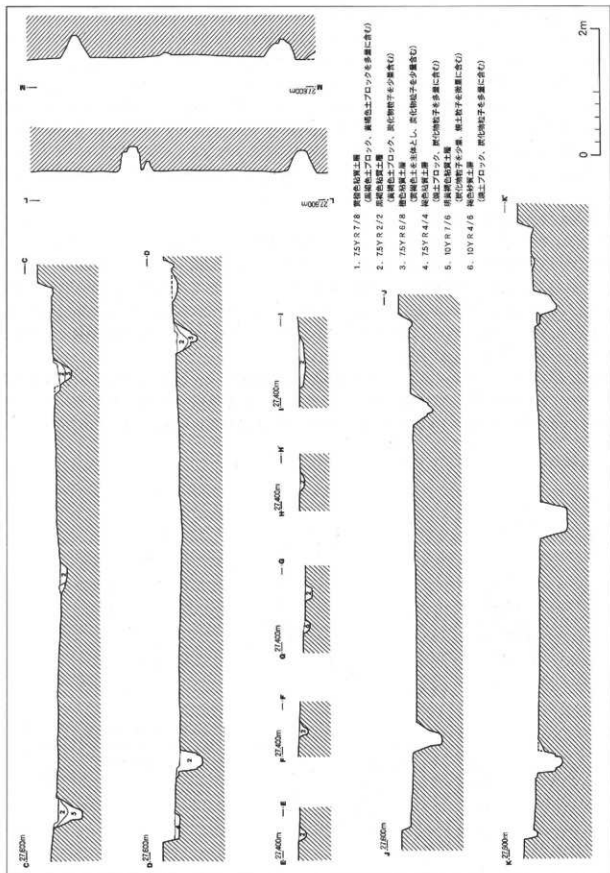
第74図 平面図(1/200)



第75图 土层断面图(1/80)



第76图 住居址(1)(1/60)



第77図 住居址(2) (1/60)

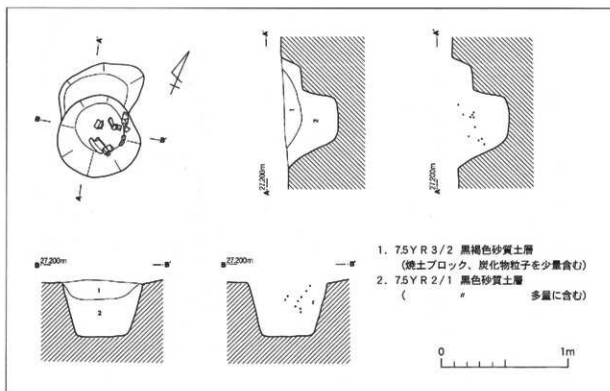
m～0.40mで、平面形態はほぼ正円形をしていたものと思われる。埋土は、4層からなる自然堆積であった。4層は、西壁寄りの部分にのみ認められ、焼土ブロック・炭化物粒子を多量に含んでいた。床面は、中央部分が壁際と比べると約10～15cm低くなっており、壁は緩やかな傾斜をつけて立ち上がっていた。壁溝は、幅11～21cm、深さ17～27cmで、西壁の一部を除き調査範囲内では全周していた。

炉跡は、住居跡のほぼ中央の位置で検出され、長軸91cm、短軸65cm、深さが45cmであった。平面形態は楕円形をしており、北側に不整形のテラス状の段をもっていた。地山の礫層を掘り抜いており、あたかも石で組んだ様相を呈していた。埋土は、下層の黒褐色砂質土中に焼土ブロック・炭化物粒子を多量に含んでいたが、明瞭な炭層は認められなかった。全体的に壁・底面とも火熱をほとんど受けていないことから、短期間で機能を失ったものと考えられる。遺物は、埋土下層からタタキ目を有する甕の底部片などが数点出土した。

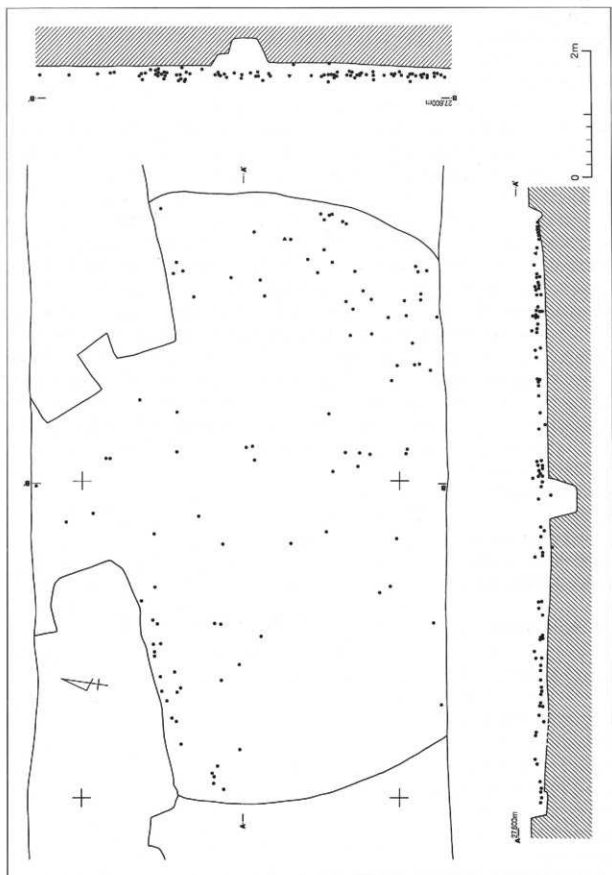
貯蔵穴は、今回の調査では検出できなかった。

ピットは、調査区内で合計11本が確認できた。その中で主柱穴となるのは、P1～4の4本が相当する。各主柱穴の大きさは、P1が49cm×(35)cm×37cm、P2が52cm×52cm×32cm、P3が48cm×46cm×46cm、P4が44cm×38cm×44cmであった。平面形態は、P1～3が円形で、P4のみがテラス状の段をもち長方形をしていた。柱穴の痕跡は確認できなかった。P5～12は、掘り込みも7～15cmと浅く、平面形態もまちまちで、各々の性格については不明である。P12の埋土には、焼土ブロックと炭化物粒子を多量に含んでおり、小規模な炉跡であった可能性も考えられる。

遺物は、主に埋土1・2層から出土しており、床面直上の遺物はほとんど認められなかった。弥生土器は小片が多く、全体を窺えるものは少量であった。器種としては、甕・高杯が多く見られる。甕にはハケ目とタタキ目の両者が認められる。土器以外には、2層から半月形直線刃の石庖丁の破片が出土した。



第78図 住居址炉跡(1/30)



第79図 住居址遺物出土状況(1/60)

遺物(第80図、PL. 36)

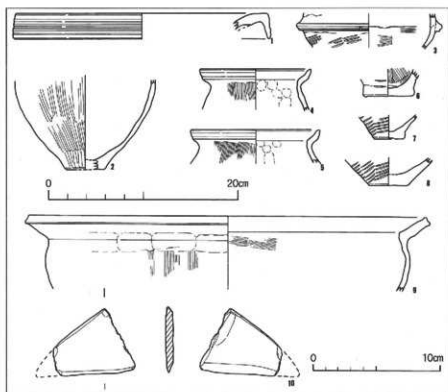
出土遺物は何れも小片が多く、凶化できる土器は少量であった。土器は、甕形土器、高杯形土器が多いが、高杯形土器は脚部の小片が多く凶化に耐えうる土器片は無かった。

1・2は、壺形土器である。1は、広口長頸壺の口縁部破片である。口縁部はほぼ直角に垂下し、外面には3条の太い凹線をもつ。調整は、磨滅が著しく不明瞭であるが、ナデと思われる。口径は26.6cm。胎土は、クサリ礫、長石、石英、雲母、砂粒子を多く含む。色調は浅黄橙色、焼成は良好である。残存率10%。2は、平底の底部破片である。調整は、胴部外面は縦方向のヘラミガキ、内面はナデである。底径は4.0cm。胎土は、クサリ礫、雲母、砂粒子を含む。色調は灰黄橙色、焼成は良好である。残存率20%。3は、手焙形土器の鉢部破片である。体部に突帯が巡る。調整は磨滅のため不明瞭であるが、底部外面はタタキ目の後ナデ。内面は、ヘラナデである。体部最大径は15.6cm。胎土は、雲母、長石、石英、砂粒子を含む。色調は浅黄橙色、焼成は良好である。残存率15%。4～8は甕形土器である。4・5は受け口状の口縁をもつ口縁部破片である。4・5共に口縁端部内面に面取りをしている。調整は、口縁部内外面ともにヨコナデ。胴部外面は縦方向のハケ目、内面は横方向のナデ。4は、口径は11.6cm。胎土は、砂粒子を少量含む。色調は浅黄橙色、焼成は良好である。残存率20%。5は、外面が僅かに煤ける。口径は13.6cm。胎土は、長石、雲母、クサリ礫を含む。色調は灰黄橙色、焼成は良好である。残存率10%。6～8は底部片である。6は底部内面にハケ目を、7・8は胴部外面に右上がりで一単位6条のタタキ目を施す。9は、大型の鉢形土器である。口縁部は全体的に器壁が厚く、端部には面取りをしている。調整は、口縁部内外面ともヨコナデ。頸部外面は、左方向の指ナデ。体部外面はハケ目後ナデ、内面は横方向のナデである。口径は42.0cm。胎土は、長石、砂粒子を含む。色調は浅黄橙色、焼成は良好である。残存率10%。10は、石庖丁である。半月形の直線刃で、石材は緑泥片岩製である。現存長6.6cm、幅5.2cm、厚さ0.6cm。全体の約2/3が破損しているために紐孔は確認できない。表裏面共に丁寧に磨かれている。残存率30%。1・2・6・7・10は埋土下層、3～5・8・9は炉跡からの出土である。また、今回図示しなかったが埋土上層からは、須恵器の破片が2点出土した。

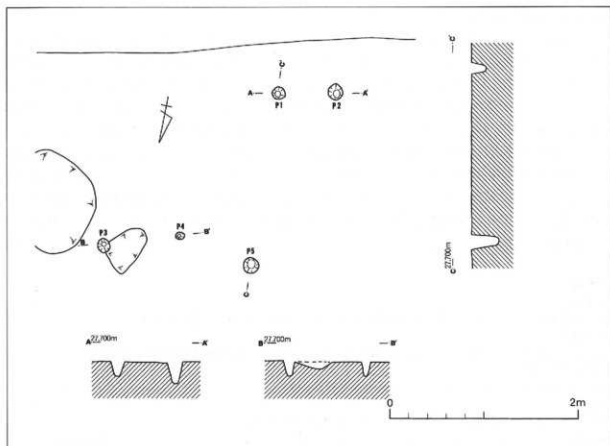
以上の出土土器から、本住居址の時期は弥生時代後期後半(第V様式新)と考えられる。

ピット(第81図、PL.36)

B-5・6、C-5グリッドで合計5基を検出した。何れも小形で平面形態は円形をしており、埋土断面には柱の痕跡は認められなかった。遺物が出土したのはP10・12の2基で、P10からは5点、P12からは1点の第V様式の弥生土器片が出土した。時期が特定できるピットは2基だけであった。



第80図 出土遺物(1/4・1/3)



第81図 弥生時代のピット群(1/40)

近世～現代の遺構

礎石列(第74図、PL. 36)

B・C-3・4グリッドにかけて東西方向に延びる礎石列が3列検出された。礎石列1は、底面に約10～20cmの平石を伴う柱穴が中心距離90cmの同間隔で7本並んでいた。礎石列2は、底面に約10～22cmの平石を伴う柱穴が中心距離90cmの同間隔で2本並んでいた。礎石列3は、底面に約12～25cmの平石を伴う柱穴が中心距離90cmの同間隔で6本並んでいた。

まとめ

今回の調査では、摂津地域で最大級の弥生時代後期後半(第V様式新)の大形住居址を検出した。規模は直径約10mの円形になると思われ、中央に炉跡を持つ。主柱穴は4本を検出したが、その配置から主柱穴は6～8本になると思われる。隣接地の第3次調査では当該期の住居址は、最大のもので約8.5mであったことから、この大形住居址が本集落において中核的な位置にあったことが推測される。摂津地域で9m以上の大形住居址が検出された遺跡は、報告されているもので6遺跡を数える。川西市内では、加茂遺跡の第96次調査で第IV様式の径約9mの円形住居跡が、第120次調査では中期の径約9mの円形住居跡が検出されている。尼崎市内では、田能遺跡で中期の直径約9.5m前後の円形住居跡が、武庫庄遺跡第6次調査で中期の直径約9mの円形住居跡が検出されている。神戸市内では、長田神社境内遺跡で後期後半の推定直径約9mの六角形住居跡、戎町遺跡では第Ⅲ様式新の直径約9～11mの円形住居跡、塩田遺跡で中期中葉の直径9.2mの円形住居跡が検出されている。全ての遺跡において中期～後期後半までの大形住居跡の形態は、円形(六角形)に限られている。何れの遺跡も集落の一部を確認したに過ぎないが、これらの大形

住居跡がその集落の核であったことが考えられる。

今回の調査で住居跡が検出されたことによって、本集落の弥生時代中期から後期の居住域が南北に大きく拡がることが予測される。これまでの調査で検出された住居跡は、重複関係が無く、各住居址間の間隔が広いことからほぼ同一時期に営まれた集落と考えられる。また、住居址の炉跡の状態が殆ど火熱を受けていないことから、弥生時代後期の集落は短期間で廃絶された可能性が高い。第3次調査では古墳時代後期の住居跡が約6軒検出されたが、今回の調査では古墳時代後期の遺構は何ら検出することはできなかった。遺物は、住居址の埋土上層から須恵器の蓋片が2点出土しただけである。第3次調査の成果からは、古墳時代後期の居住域が南東方向に延びていることが判明している。このことから、当該期の集落は北には延びず、南に展開していくことが考えられる。また、本遺跡には古墳時代初頭から中期までの間に隔絶が認められるが、西野遺跡のすぐ北には古墳時代前期の安倉高塚古墳があることから、周辺にその時期の大集落の存在が窺われる。

(中山)

<参考文献>

田能遺跡

尼崎市教育委員会 1982 「田能遺跡発掘調査報告書」『尼崎市文化財調査報告第15集』。

武庫庄遺跡

尼崎市教育委員会 1990 「尼崎市武庫庄遺跡(第4～7次調査報告)」『尼崎市文化財調査報告第21集』。

長田神社境内遺跡

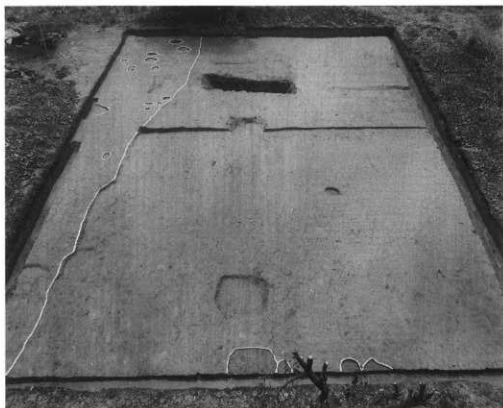
神戸市教育委員会 1990 「長田神社境内遺跡発掘調査概報」

戎町遺跡

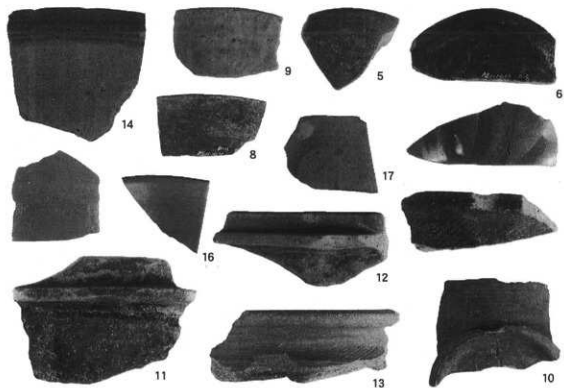
神戸市教育委員会 1988 「昭和60年度 神戸市埋蔵文化財年報」

塩田遺跡

神戸市教育委員会 1992 「平成元年度 神戸市埋蔵文化財年報」



a. 北園遺跡第11次調査全景（西より）



b. 北園遺跡第11次調査出土遺物



a. 北園遺跡第15次調査全景(北より)



b. 調査風景 (南より)



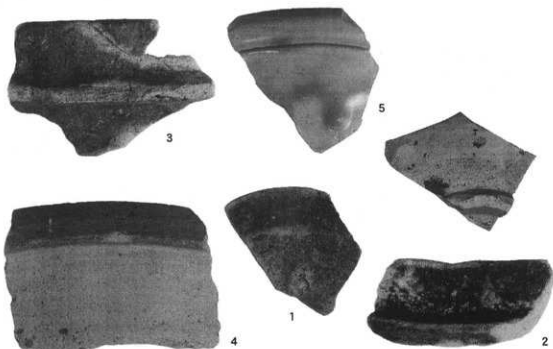
c. 東壁土層断面



a. 北園遺跡第15次調査東壁南側土層断面



b. 東壁北側土層断面



c. 出土遺物



a. 山田遺跡第4次調査北側トレンチ全景(西より)



b. Pit17~23検出状況(南より)



c. Pit15土器出土状況(南より)



d. 集石遺構(南より)



a. 山田遺跡第4次調査中央トレンチ全景(西より)



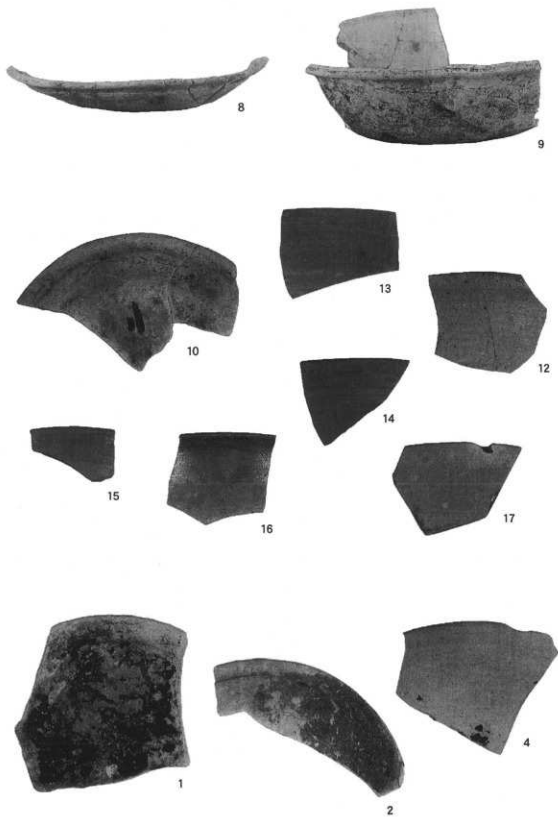
b. 山田遺跡第4次調査南側トレンチ全景(西より)



a. 山田遺跡第4次調査東側トレンチ全景(南より)



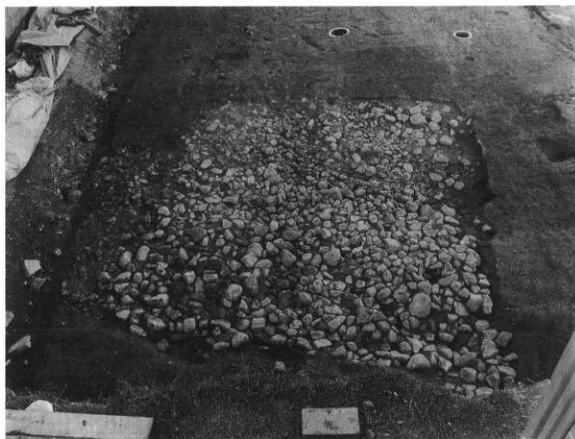
b. 山田遺跡第4次調査西側トレンチ全景(南より)



山田遺跡第4次調査出土遺物 1～4(包含層) 8・9(ピット15) 10～17(溝状遺構)



a. 山田遺跡第5次調査全景(南より)



b. 集石遺構全景(南より)



a. 山田遺跡第5次調査
集石遺構の石敷き(東より)



b. 集石遺構石敷き南東角(東より)



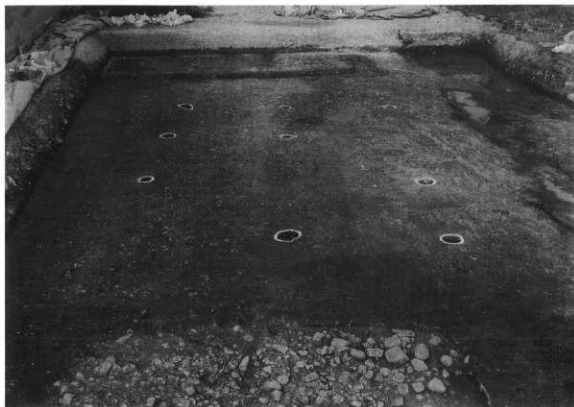
c. 集石遺構石敷き断面(東より)



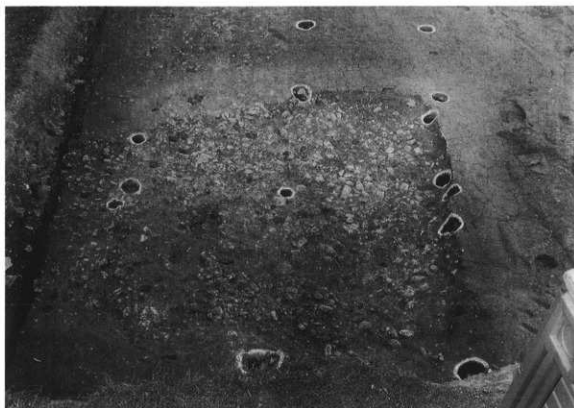
a. 山田遺跡第5次調査溝(西より)



b. 山田遺跡第5次調査井戸(西より)



a. 山田遺跡第5次調査掘立柱建物1(南より)



b. 山田遺跡第5次調査掘立柱建物2(南より)



3



4



5



6



14



12



7



11



8



9



15



24



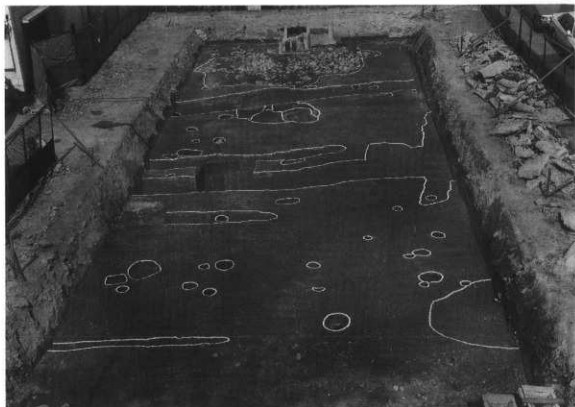
30



32

山田遺跡第5次調査出土遺物(2)

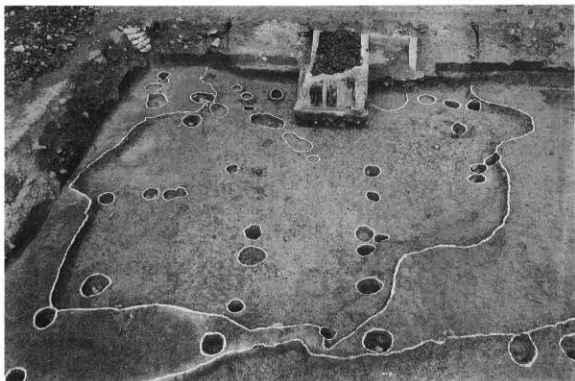
24(井戸) 30-32(掘立柱建物1)



a. 山田遺跡第6次調査全景(西より)



b. 集石遺構検出状況(西より)



a. 山田遺跡第6次調査集石遺構完態状況(西より)



b. 集石遺構白磁出土状況



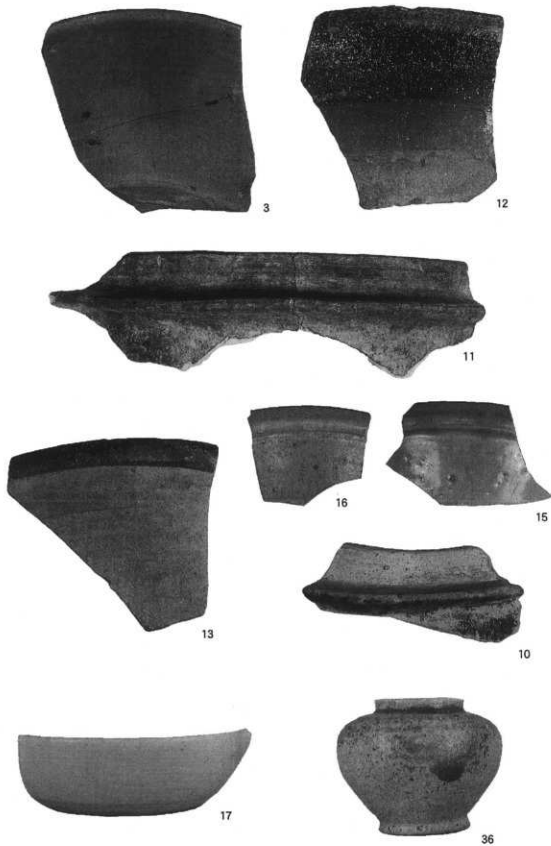
c. 溝1, 土坑1~15(北より)



d. Pit30(西より)



e. 南壁土層断面(北より)



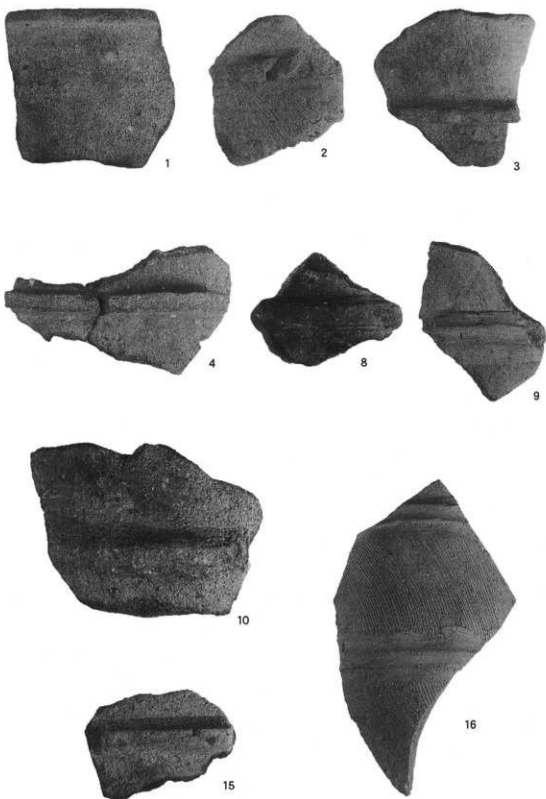




a. 柏木古墳現況(西より) 調査区から墳丘部(墓地)を望む



b. 柏木古墳第1次調査全景(西より)





24



25



26



27



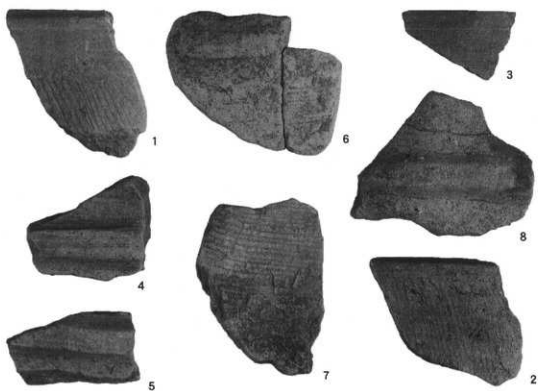
28



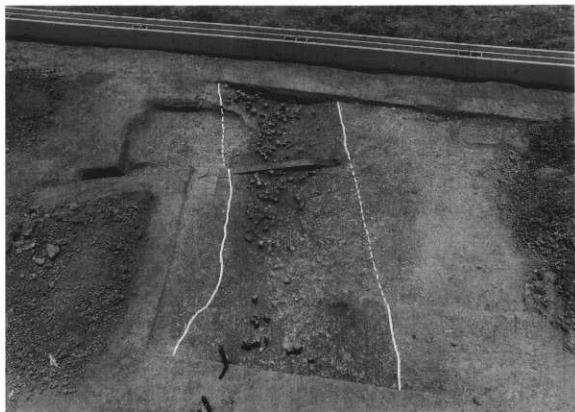
29



a. 御願塚古墳第6次調査全景(東より)



b. 出土埴輪



a. 南野古墳第1次調査全景(北より)



b. 調査区南側



a. 南野古墳第1次調査周濠検出状況
(北より)



b. 周濠内遺物出土状況(東より)



c. 周濠内遺物出土状況(東より)



1



2



3



10



14



15



8



21



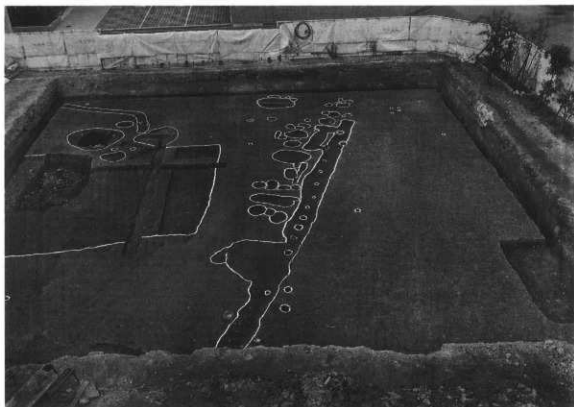
11



20



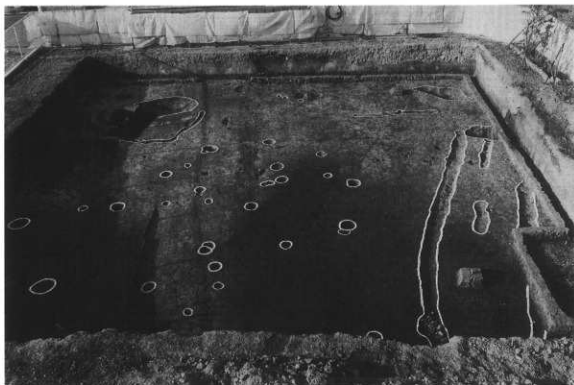
22



a. 荒牧遺跡第23次調査第1遺構面全景(北より)



b. 井戸1検出状況(東より)



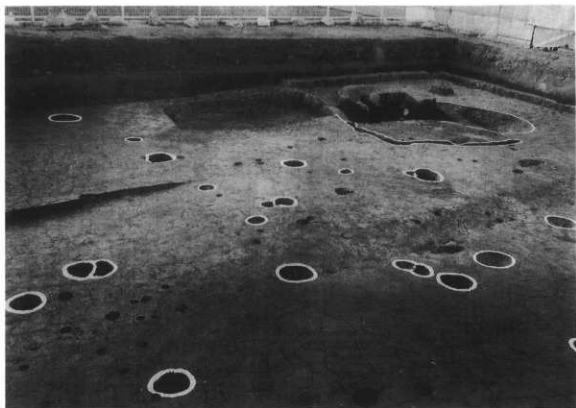
a. 荒牧遺跡第23次調査第2遺構面全景(北より)



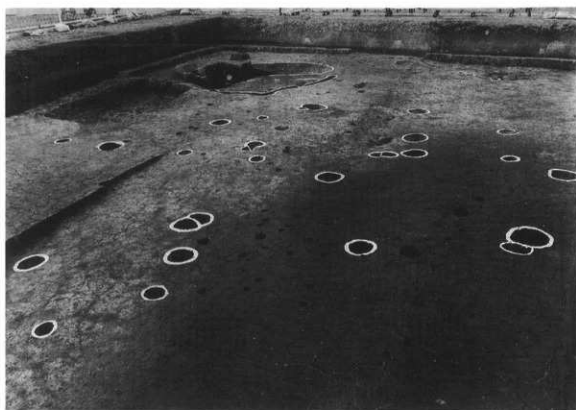
b. 溝6検出状況(北より)



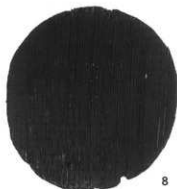
c. 溝6遺物出土状況(東より)



a. 荒牧遺跡第23次調査建物1(西より)



b. 建物2(西より)





a. 荒牧遺跡第26次調査全景(西より)



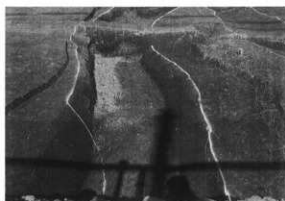
b. 自然河道(南より)



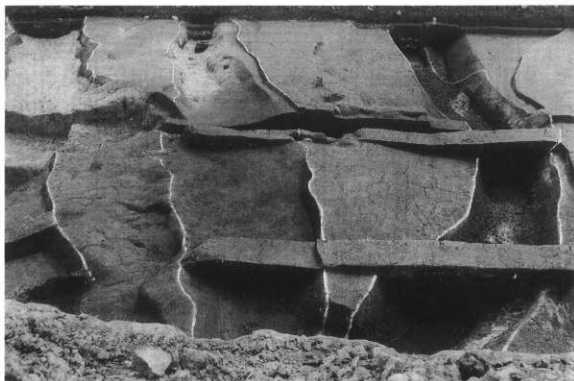
d. 溝4 (新)(南より)



c. 自然河道遺物出土状況(南より)



e. 溝4 (古)(南より)



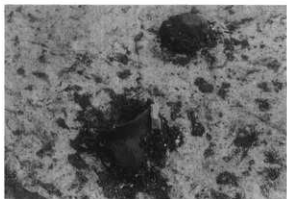
a. 荒牧遺跡第26次調査 溝 1. 2. 4 (北より)



b. 溝 1 (南より)



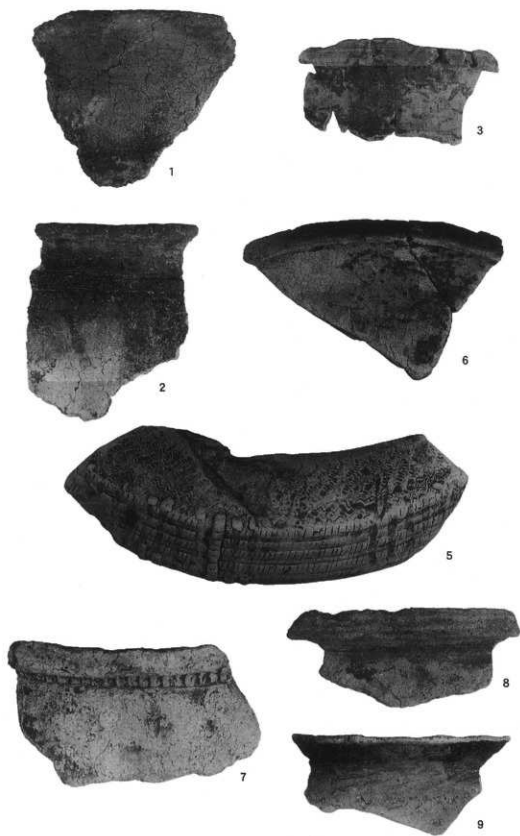
d. 溝 2 (南より)



c. 溝 1 遺物出土状況 (北より)



e. 畑状遺構 (北より)





15



16



18

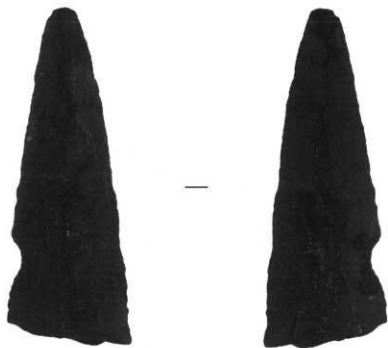
荒牧遺跡第26次調査出土遺物(2) 15~18(薄1)



a. 荒牧長野遺跡第2調査第5トレンチ南壁土層断面(北より)



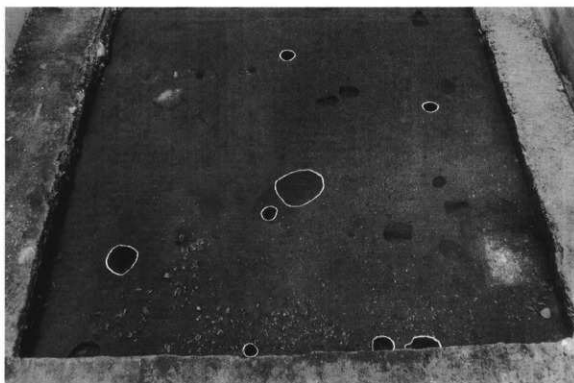
b. 槍先形尖頭器出土状況(北より)



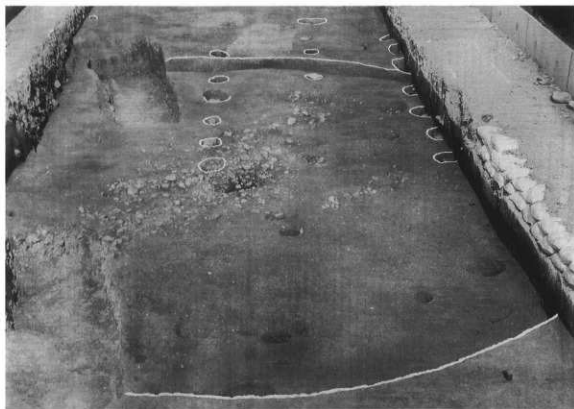
c. 槍先形尖頭器



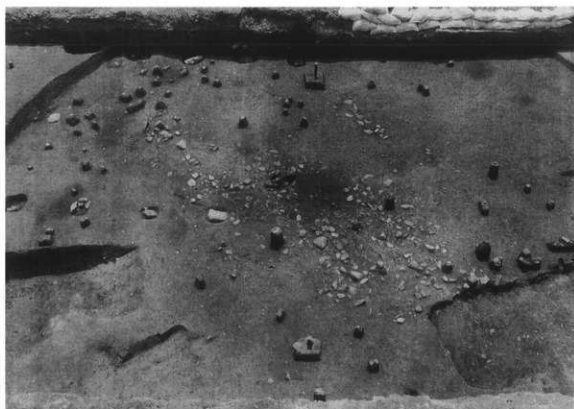
a. 西野遺跡第5次調査西半全景(東より)



b. 東半全景(東より)



a. 西野遺跡第5次調査住居址(西より)



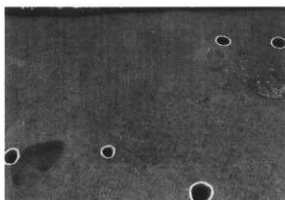
b. 住居址遺物出土状況(北より)



a. 西野遺跡第5次調査住居址炉跡(東より)



b. 住居址炉跡遺物出土状況



c. 弥生時代のPit群(北より)



d. 礎石列(西より)



1



4



9



5



10

e. 出土遺物 1~10(住居址)

報告書抄録

ふりがな	いたみしまいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ							
書名	伊丹市埋蔵文化財調査報告書							
副書名	震災復旧・復興事業に伴う発掘調査							
巻次								
シリーズ名	伊丹市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第23集							
編著者名	小長谷正治 瀬川真美子							
編集機関	伊丹市教育委員会							
所在地	兵庫県伊丹市千僧1丁目1番地							
発行年月日	1999年3月							
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
所収遺跡名	所在地	市町村						遺跡番号
北園遺跡 第11次調査	兵庫県伊丹市 北伊丹7丁目81	28207	18	34° 47' 40"	135° 25' 06"	19950605 ～ 19950620	162㎡	倉庫建設
北園遺跡 第15次調査	北園3丁目19-1, 18-1, 20-2	#	#	34° 47' 36"	135° 24' 02"	19961022 ～ 19961108	116㎡	共同住宅建設
山田遺跡 第4次調査	山田4丁目7番25号	#	35	34° 46' 04"	135° 23' 18"	19950821 ～ 19950904	240㎡	倉庫建替
山田遺跡 第5次調査	山田4丁目7番17号	#	#	34° 46' 05"	135° 23' 20"	19951113 ～ 19951206	192㎡	共同住宅建設
山田遺跡 第6次調査	山田4丁目7番21号	#	#	34° 46' 06"	135° 23' 17"	19960513 ～ 19960614	275㎡	共同住宅建設
柏木古墳 第1次調査	柏木町1丁目67-1,2	#	56	34° 45' 22"	135° 25' 01"	19950821 ～ 19950915	220㎡	共同住宅建設
御願塚古墳 第6次調査	御願塚4丁目348-5	#	55	34° 45' 46"	135° 24' 04"	19951201 ～ 19951213	75㎡	個人住宅建設
南野古墳 第1次調査	安堂寺町6丁目地内	#	47	34° 45' 41"	135° 24' 35"	19960531 ～ 19960606	36㎡	区画整理事業
荒牧遺跡 第23次調査	荒牧字西貝/内20-1	#	2	34° 48' 27"	135° 23' 13"	19951003 ～ 19951116	225㎡	社員寮建設
荒牧遺跡 第26次調査	荒牧字池ノ上10番地	#	#	34° 48' 25"	135° 23' 10"	19970116 ～ 19970221	360㎡	共同住宅建設
荒牧長野遺跡 第2次調査	荒牧字長野54地	#	4	34° 40' 07"	135° 23' 13"	19961206 ～ 19961209	24㎡	共同住宅建設
西野遺跡 第5次調査	西野6丁目35-1, 36-1 の一部	#	31	34° 47' 20"	135° 22' 33"	19960620 ～ 19960802	231㎡	共同住宅建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
北園遺跡 第11次調査	集落	中世	土坑		土師器・瓦器 2箱			
北園遺跡 第15次調査	集落	古墳・中世	遺構なし		須恵器・黒色土器・ 瓦器白磁 1箱			
山田遺跡 第4次調査	集落	中世	柱穴・集石遺構		瓦器・土師器 3箱			
山田遺跡 第5次調査	集落	中世	掘立柱建物跡・井戸跡・集石 遺構		須恵器・瓦器・土師 器 2箱			
山田遺跡 第6次調査	集落	奈良・平安・中世	溝・集石遺構・土坑		須恵器・灰輪陶器・ 瓦器 2箱			
柏木古墳 第1次調査	古墳	古墳	古墳周濠		埴輪 5箱			
御願塚古墳 第6次調査	古墳	古墳	古墳周濠		埴輪 1箱			
南野古墳 第1次調査	古墳	古墳・奈良・平安	古墳周濠		埴輪・須恵器 2箱			
荒牧遺跡 第23次調査	集落	弥生・奈良・平安	掘立柱建物跡・溝・畑		弥生土器・須恵器・ 土師器 8箱			
荒牧遺跡 第26次調査	集落	弥生・奈良	溝		弥生土器・須恵器 6箱			
荒牧長野遺跡 第22次調査	集落	縄文・中世	遺構なし		石器・土師器・青磁 1箱			
西野遺跡 第5次調査	集落	弥生	竪穴住居跡		弥生土器・石器 2箱			

伊丹市埋蔵文化財調査報告書

震災復旧・復興事業に伴う発掘調査

1999年3月

発行 伊丹市教育委員会
兵庫県伊丹市千僧1丁目
TEL 0727-83-1234

印刷 アイシー印刷株式会社

